投

913.56-Su96
12005007575 01
13.56
.Su96

ト149-84
913.56
Sa96

(二)

鈴木敏也 著

新註 雨月物語評釋

東京 精文館

上田無腸翁陶像
（方觀空中作西福寺所藏）

上田無腸翁之墓
（村瀨拷亭撰森川竹窓書）

（所在地）
京都市左京區南禪寺草川町
西福寺

無腸翁自畫賛

文麗翁作茶花急須

無腸文麗兩翁合作急須

裏面に自刻せる文麗翁の花押

596.51

序に代へて

恩師芳賀先生のお勸めに從つて、貧しい此一卷を世に問ふたのは、昨日のやうに思ふけれど、その間には既に十幾年の月日が流れてゐる。本書の改訂に就ては先生御在世中にお許を得て置いた事ではあつたが、つい延び〳〵になつて、やつと玆に曲りなりにも出來上つたのである。思ふに任せぬ節々も多いけれど、それでも舊版に比ぶれば多少の距りがあるやうな氣のするのが、せめてもの心やりであり、且先生への報恩の一つとも考へる。

舊版刊行の際、先生が卷頭を飾つて下すつたのは「歴代名著新釋序言」と題して

古文學の註釋書は、伊勢源氏を始として可なりに行屆いて居るやうである。古註比べれば、やがて時代の學問の進歩の跡も認められるのである。但し

なつて、日記物語に及んだのが、德川時代までの形勢であつて、物語日記といふ中にも、蜻蛉日記や、うつぼ物語に至つては、まだ何程も闡明せられて居らぬ。大鏡や榮華物語のやうな歴史物語に至つては、明治時代になつて、其の研究が緒に就いたといふ有樣である。祖國の文學の研究がすべての點に於て、まだ甚だ不完全であるのは、我等現代の學者の大に奮發しなければならぬ所である。よつて同志と相謀つて玆に歴代名著新釋の企をなした。まづ從來註釋の絶無な名著を採つて、新註を施し、尙進んでは古註の誤を正して新註を出さうとするのである。本書は其の第一卷として、秋成の不朽の名著を解釋したものである。今人の出來得るだけの努力も、後世から見れば、更に訂正すべき點もあらう。但し今人としての、國家に對する貢獻は、後生の爲に、進歩の一津梁たることを失はぬ。一歩なりとも、古人の研究以外に進まうといふのが、本叢書の目的であつて、吾人の義務を盡す所以とおもふのである。

大正五年一月

編輯主任
芳賀矢一
しるす

と云ふのであつた。其の時、此の叢書の豫定書目としては宇治拾遺物語、また十訓抄、英草紙等があり、それ〴〵筆者も決定してゐるとのお話であつた。しかし種々の事情のために、ともかく名著新釋は此の雨月物語が初めにして終をなすものとなつたのである、その後、私は公務の餘暇を評釋方面の攻究にも割いて今日に及んでゐる。元來註疏の學は極めてじみな仕事である。しかし斯道の開拓は自己の研鑽ともなり慫慂ともなつて、學徒にとつてはかなり重要な事業の一と信ずるので、足どりはのろいけれど、歩みは常に續けてゐる。それは先生が、そのかみの御企圖の一端を、少しでも多く實現したい素志に外ならない、改訂本雨月物語新釋はかゝる事情のもとに纒め

たものである。

この蕪辭を序に代へ、欅の並木路に若葉の風薫る、雜司ヶ谷なる先生の御墓の前に、謹んで此一卷を捧げまゐらす。

昭和四年五月　廣島にて　鈴木敏也

凡例

一、本書は大正五年一月刊行の歴代名著新釋第一篇「雨月物語新釋」を改訂增補したものです。

一、雨月物語の本文は安永版によつて校合し、用字・送り假名・振り假名等すべて原本通りに保存しました。假名遣ひの誤りなども敢て正さなかつたのは原本の面影を偲ばせるためです。從つて流布の刊本とはかなりの異同があると思ひます。

一、上田秋成の一生、及び評論と題した文學史的批判と內容の考察とを卷頭に配置したのは此の物語を繙く初學の人に、何物かを示唆するところがあらうかと考へたからです。

一、語釋は出來るだけ努力したつもりですが、猶判然しない典故があります。今は從來不明のまゝに殘されたもの二三を解說し得たのを以て、自らの慰めとするばかりです。他は大方博雅の士の高敎を仰ぎたいと思ひます。

一、評釋は私の感得したところに據つて鑑賞を試みたもので、只學生諸氏の手引草たらば幸と存じます。

一、卷中の挿繪は原本にあるすべてを複寫したものです。

一、卷頭の口繪は鏑木清方畫伯が嘗て金鈴社展覽會に出陳された名品です。こゝに掲載するを免さ

れたのを厚く感謝します。

一、最後に、校合に當つて原本の恩借を辱うした京都の藤井紫影先生、また本書の復活版を熱心に慫慂された舊師八波則吉先生の御厚意に對しても深謝の意を表します。

新註　雨月物語評釋

目次

第一編　上田秋成の一生

第一章　近世文學と戯作者氣質……一

第二章　薄倖七十六年……三

第三章　人としての秋成……一〇

第四章　創作の諸相……三三

第五章　秋成の文藝觀……四五

第二編　雨月物語評論

第一章　解說……四九

第一節　創作の年代と刊行……四九

第二節　文學史上に於ける系統と時代の影……五三

第三節　特質……五九
第二章　雨月物語に現はれたる說話……六四
第一節　說話の內容と形式……六四
第二節　說話の先蹤……六九
第三節　類型的說話の表現法と藝術的效果……九四
第三章　雨月物語に現はれたる超自然……一〇一
第一節　各說話に現はれたる幽靈怪異……一〇一
第二節　超自然分子の藝術的價値と雨月物語……一〇九
第三節　超自然の背景としての自然描寫……一一六
第四節　秋成の神秘思想……一二二
第四章　後代文學に及ぼしたる雨月物語の影響……一二七
第三編　雨月物語註釋
卷之一……一四一
白峯……一四一
〔特殊相〕白峯に現はれたる憤怒の情緒と其表現……一六七
菊花の約……一七一
〔特殊相〕菊花の約に描かれたる節義の觀念……一九六
卷之二……二〇〇
淺茅が宿……二〇〇
〔特殊相〕悲哀の女、宮木……二〇四
夢應の鯉魚……二三六
〔特殊相〕興義和尙と薛偉大人……二三七
卷之三……二四一
佛法僧……二四一
〔特殊相〕佛法僧に現はれたる恐怖味……二五九
吉備津の釜……二六一
〔特殊相〕女主人公磯良の辿りし宿命の路……二八六
卷之四……二九〇

目次

蛇性の淫……二一〇
〔特殊相〕蛇性の淫に描かれたる戀の蠱惑……三二六
卷之五……三四〇
青頭巾……三四〇
〔特殊相〕青頭巾の脚色と官能の匂ひ……三四〇
貧福論……三五九
〔特殊相〕文學的內容としての智的要素と貧福論……三七六
讀後印象……三八一

目次終

第一編　上田秋成の一生

第一章　近世文學と戯作者氣質

近世藝術史上の春――元祿と化政――當代の戯作者――
創作家としての秋成――時代の反映

わが近世藝術史上には再度の春が來た。先なるを元祿の世となし、後なるを化政度とする。一は背景に豪華なる世相を置いて、西鶴が居る、芭蕉が居る、巣林子が居る、光琳が居る。他は優柔なる時代の反影の下に、京傳が居る、馬琴が居る、三馬が居る、廣重が居る。かれを喚發せる上方藝苑の精華とすれば、これは爛熟せる江戸文明の生粹である。謂はゞ春深き花の峯の、尾上から麓路かけて、斑らになつた花の樹が、又だん〳〵と密になつて、向ふの嶺に薄紅の幔幕を引繞らした姿であつた。この麓の峽谷は云ふまでもなく、明和安永あたりの文運東遷期である。眞淵、蕪村、月溪はこゝに居た巨樹であつた。而してわが秋成はこの間に立つて幻妖の花を開いた一名木である。文學史家が、彼を指して上方文壇の大詰にあたつて光鋩陸離たる怪光を放つた彗星であると云ふのは妥當の言と云はねばならぬ。

近世文學、特に戯曲小説を閲讀して、作者の創作的態度を考察する時、吾々は玆に慊焉たるものに逢着する。それは所謂戯作者氣質の臭味である、藝術創作が全く遊戯的衝動に基く事である。彼

等は戯曲小説を遇するに、同じ純文學の範疇に入れらるべき詩歌とは殆んど對立すべからざる程、低級なものとして取扱つて居る。作家はその天賦の才能をこゝに集注しながら、しかも戯作と稱して憚らない、否戯作の名にかくれて自己の本領が他にあるものゝ如く裝はうとした。勿論これには時代精神の片影が宿つて居るけれど、藝術家としての彼等は全く虚僞の態度に出たと云ふべきである。創作家としての秋成もこの例に洩れなかつた、彼が八文字屋風の浮世草子に筆を染めたのは明かにこの傾向を示すものであらう。雨月物語の如きもその藝術的價値は暫く措き、創作の心理には幾分の遊戯的分子を否み得ない。國學の素養ある者の筆とも思はれぬ程に、彼が數篇の述作をあげて、語格の奔放不羈なのはその一證である。而して自己の勞作たる小説を、戯筆として重きを置かなかつたのも偶〻時代の好尚が反映したのである。

しかし彼が如何に其創作に對して無頓着であつたにせよ、時代の風潮が作家を離れた藝術を強いたにせよ、文學が人間心情の發露である以上、そこに閃めく個性の影を認めずには居られない。是に於て吾々はしばらく彼の閲歴に一瞥を與へ、更に人及び創作家としての彼を考察しようと思ふ。

第二章　薄倖七十六年

宮書の自傳――生れ年――その母――養家上田氏――義理の姉――青年期と時代粧――結婚――修養と初期の創作――三十八歳――醫者となりて――長柄村――俳諧と國學――綾足・美樹との交渉――家庭の不幸――京上り――珊瑚尼――人生の秋――寂しき一生

無腸生浪華、客于京師十六年、無父不知其故、四歳母亦捨、有倖上田氏所養、六歳養母逝、性多病、時々發驚癇、後母伏慈愛成長、年三十七父逝、三十八係回祿失居、始於是京撫問移宅凡十餘度、每地在神如迎似遂生活、商戸破産一爲醫、患疾不立業、泊然二十年、其間玩好國文國詩、不以爲業、年五十七、頓失左明、六十五、僥倖遇神醫、得左明又及右眼、後母給仕五十三年、亡妻精兼三十八年、今年七十五、嗟乎天爲何生我耶。

老ぬれば世の人數か、なには江の、あしがるわざの男なりしを。

これは彼が自像の賛にかきつけたと云ふ略傳である、しかも、この粗笨な數行の文字の裏には、痛ましい彼の一生が幻像の如く繰り展げられて見える。わけて、その當時にあつてすら、懐疑の雲

に蔽はれて居た彼の双親に就ては、霧の深い夜陰に遠寺の鐘を聞くやうな、物悲しさと遺瀬なさとを思はせる。口さがなき京童が、あるひは娼家の子悖と蔑み、或は崇禪寺馬場仇討の敵役 生田傳八郎の遺孤よと云ひ囃した、これに對して彼の言を聞けば、

三非は浪人者、白木屋は煙筒屋、鴻池は小酒屋、小橋屋は古手屋、辰巳屋は炭屋なり、神代からつゞいてある家のやうに誇る事おかしし、老は惡んで茶屋のはてじやと云ふ、いや太鼓持の古なつたのじやと答へる、穢多でさへなけりや御免の人交り、何にもせよかし、たゞ今御山の大將我一人、御相手が御座らつしやるまい（臍大小心錄）

と、むしろ消極的口吻を以て憤懣を遣つて居るのは、彼の氣慨としてはあまりに平穏にすぎる。生田の遺子と云ふ事には時代錯誤があるにしても、畢竟彼の素性には、人に云はれぬ秘鑰が潜んでは居なかつたらうか。

生前既に身の上を明かにしなかつた彼は、その生年に就ても一定しない。一般には享保十七年となつて居るが、これには質疑の點がある、それは加島稲荷獻納和歌帖の添書に

余幼稚、患惡瘡、醫云無生路矣、先考不堪悲泣、走此神祠以丹誠乞助命、還家倏然出九死、而經旬日乃癒、因是詣拜數十載壽六十八、全賴神之恩靈矣、今度以乞高貴乃智音之歌詠、且賦余之齡算爲奉幣焉、

享和元季秋九月　　阮無腸居士謹上

とあり、籐簍冊子の雨蛙と云ふ文の奥書には

右寛政十年の五月二十日あまりより文月のつごもりがたまでの事を日なみのさまに唯心尼の筆にかはらせし、山霧の記と云ふ中に書出せし也、日おもくやみていたはりすと河内の日下の里、正法寺と申す御寺にやどりてありし時なり。

とあつて、これが自傳の「六十五、僥倖遇神醫、得左明又及右明」とあるに當つては居ないかと思はれる、且、蕪村が後の也哉抄の序（この文は後段に引用する）を見るも、彼の生年は享保十九年でなければならぬ事になる。以上の理由によつて、吾人は暫く十九年說を採り、猶後勘を俟たうと思ふ。

彼の生家に就ても亦不明である、唯僅に彼と師弟の關係ある藤田顯（大阪の醫）がこの獻詠和歌帖の序には「上田先生……本姓田中、有故冒舅家姓、先生攝津曾根崎生」とのみあるがこれによれば生地も氏姓も明かである。しかし、傳奇作書に、曾根崎の妓家花屋の娘で妓女であつたものゝ子とあると誌して以來、「近世叢語」等が承けてゐるやうに、彼が娼家の子であると云ふ事は一般に信じられてゐる。いづれにしても、彼の双親は、打つや太鼓、彈くや三絃の歌吹海を背景とした、歌舞伎淨瑠璃に出て來るやうな、果敢ない戀の國の漂泊者であつたらしい。

かうした兩親の間に生れた彼は、その自傳の示すが如く四歳の時、母の手を放れて上田家に引取

られた。この上田家はもと丹波氷上郡上田村から出た武士であつたが當主の茂助（滿宜）は大阪堂島で紙油の商賈として繁昌してゐた。（但、秋成は旌孝記でこの養家の人々について、「養父名斎、俗稱養三郎、養祖父尚正、俗稱丹助、安永七年齢六十五にて世を去りぬ、母ふさ、窪田氏、今年八十五、いとも世にありがたき、かたり言になむ侍る」と云つて居る。）彼が一とせ妻を伴れて但馬城崎の温泉に行つた歸路、福知山からよしみの竹田を過ぐる際「右手の山にそひて煙の立つが賑はしく見ゆるを問へば、氷上の黒井といふ、この聞ゆる鄉は、おほ父達の住玉ひし古さとゝかねて聞きしものから、かかるついでにつけて尋ねゆかましを、母刀自のいかに待佗びたまふらんと思ひ棄て、こくりやうの坂道にかゝる（秋山記）」と誌して居るのは茂助の弟治藏（滿高）の養はれてゐた黒井村の酒造家をさしたのであらう。

「かくて父はもとより、生みの母の面影さへ、忍ぶよすがも描くすべも、知らで過した彼の幼年の日の、稚い夢の裏には、幾多の悲劇的場面が演ぜられたに違ひない。痘瘡にかゝつたのは五歳の時であつた、養母を失つたのは六歳であつた。「痘瘡の毒強くして右の中指短き事第五指の如し（膽大小心錄）」と云ひ「いときびはにて面だに見知り侍らず（旌孝記）」と云ふのはこの間の消息である。引けばほぐれるやうな果敢ない親子のえにしは、彼をして更に新しい養母（三人目の母）の手に委ねしめた。彼はこの母によつて青年期に達したのである。

もと〳〵秋成の養家には實子（娘）があつたらしい。この義理の姉がよくない者と通じて出奔したので、父は彼女を勘當し秋成を後繼とした。寶暦五年彼が二十二歳の時である。彼は實子のあるのに後目を繼ぐに忍びないからとて暇を願つたけれど、心の正しいものがわが子であると云つて、養父は免さなかつた。この姉が娼家を營んだのではなからうか。

姉は福果ある人にて家富み榮えけり、今はとて父に申して勘じ許し給へよと申す、父悅びてわたらひは何するも、世を安く渡らんには罪なしと許して、もとの親子の對面をさせたりき。（自傳）

とあるのがそれである。

かく遊里に緣者を有ち、遊女を母とし、富裕な養家に育つた彼のうら若き日は、一言以て蔽へば肉の歡樂を趁ふた耽溺生活にすぎなかつたらしい。かの膽大小心錄に「翁商戸の出、放蕩者ゆへ家財を積みかねた」と云ひ、旌孝記に「（後の母）いまそかりし時は日を愛すべき心を露ばかりも持たらず、大事の事ども御心にたがひて、重き罪かうむりし者の、いみじき人の上と思ふには、水無月ならぬに汗に衣をとほし、ながき息をのみ續くるこそいとうたてけれ、思ふも、悔の八千度かひなき事になん侍る」と云つたのも、僞りならぬ告白であらう。まことや、難波の花街は「まづ往來繁華のちまた、やかましからずして賑なり、諸事せわしきことのみじんもなく、夜店の風流は三國無双」の地。黑羽二重を上になし、中着にくろ出のかはり八丈、其下に重ねしは關東縞に古渡り更紗、紅

絹の袷の半袖襦絆、皆黒七子の半襟をかけ、鳶羽二重の羽織長く、茶繻子の帶を結び、中はへのさかやきに少し大きく額をかつがせ、結立ならざる水髮本田、裏付草履の清らかなる素足にはき、さも大樣に歩み（當世虎の卷）」手には扇子ばち〳〵の半開きと云ふ、纖弱柔婉なる風俗は、彼に見られなかつたとしても、いづれ、これに近い姿を、陶醉せる遊蕩兒の群に見出し得たと思はれる。

かゝる生活はいつまで續いたものか、寶暦十年二十七歳の時、妻（名はたま京都九條の農家の女で、植山氏の養女、時に二十一歳）を迎へても歡樂の夢は猶さめなかつたらしい。後年長柄の閑居に、妻が

よしや釘さしがためし小がな戸も、君いまさぬ夜は、昔は物すきまじかりしを、今の時々のひとり寢、念じわびつゝもあかすは、齡と云ふものゝ心得さするよ。よう年をわたりて住みつき給はぬにも、めでたしと思ひし家には事しげく、君がおぼし知らぬ物うさの侍りしを、此草むらの宿には、かうのどけき世もありけると、詑しさにかふるには、善しとも惡しとも思ひ定むる心なむあらぬ。（鶉居）

と云つたのや、門人釋昇道が、籐簍冊子を編して、その序に

歌や文や翁の齡にしては、いと少なきは、わかくてなはせし昔は、よろづうちたはれがちに、まめ〳〵しき道に心ざしもあらざりき。

と書いたのを見れば、此期間に於ける彼の閲歷も略々想見することが出來る。されば「われ若き時は文讀む事を知らず、たゞ酒のまでも、すみかをのどかになして宿にはゐぬ也、父は物よく書と度度いましめたまへば、時々机にかゝりて手習はじむ、友どちのわかくもあらぬ男來て、これは何事ぞ學問とやらするか、無分別なりとて机のむかふに胡座くみ、机にありし古り板の文徴明が千字文ひらきみてくりかへし、さても〳〵むづかし、此終にある年號と本屋の名なりとすつぱり讀みたし」と云ひしなり（小山氏藏、自筆の卷）」と云ふが如き生活の斷片には、偶々以て彼が當時に於ける家庭交友のさまを窺ふに足るものがある。

而して後年の「痴鼎談」に現はれた遊里洞房に關する奇警なる觀察や、八文字屋風の小說「諸道聽耳世間猿」や「世間妾氣質」に於ける狹斜の叙述は一面その內生活の反映であらう。雨月物語の如きは、この屈托なき生活の最後の收穫である。殆んど外部生活の刺戟と痛苦との上に超越した、彼の趣味好尙を盛りあげた至醇なる心情の迸りである。

頹唐的な耽美の氣分に抱擁せられた偷安浮華な夢も、養父の死（秋成三十七歳の時）につゞく火災（その翌年）を一期としてこゝに一轉化を餘儀なくせしめられた、長閑な春の日は去つて、蒼空からは、烈々たる太陽が白熱の光を大地に投げかけた。彼が遽然として生活難に面して立竦んだのは此時である。

三十八歳の時に火に罹りて破產した後はなんにも知つた事がない故、醫者を先づ學びかけたが村居してまづ

病を澤山に見習ふた事じやあつた。四十二歳で城市へ歸りて藥を開いたが、不學不術の營の事ゆゑ、人の用ひぬ事は知つて居た故、たゞ腦は意じやと心得て、心切つくす趣向がついて、合點のゆかぬ症と思へば頼まぬに日に二三返も見にいた事じや、いや〳〵と思へば外の醫師へ轉じさせても相變らず日々見舞ふた。こなじや故、病人も喜ぶ家族もとかく受けがよかつたで、四十七の冬、家を買ふてさつばり建立して四十八の春移つた。十六貫目入つたがなんでやら出來た事じや……五十五の春から又醫をやめて再びの村居……

……（膽大小心錄）

彼は世渡りのよすがとして、醫を選んだ。而してその修業のため村居したと云ふのは、隱退した時の村居と同じ場所であつたらうか、又それは何處であつたらうか、彼の也哉抄に於ける蕪村の序を見るに、

……爰に我友無腸居士なるものあり、津の國かしまにかくれ住み客を謝して俗流に交らず、ふかくやまとの國ぶりにふけり、人しらぬ古き書をさへさがし見ずと云ふ事なし……

于時安永甲午孟春下院

夜半亭蕪村誌

平安　儿董書

とある。甲午は卽三年で秋成が四十一歳の時、卽醫術開業の前年である。從つてかしまの里は前の村居の場所でなければならぬ。（これも享保十九年生の一證となる。もし十七年生ならばこの年は四十三になるし、四十二に城市に歸つたとあるから、蕪村がかう書く筈がない）。このかしまは歌島（加島、神島）で大阪府下西成郡にある。秋成の痘瘡平癒の祈は卽この里の稲荷社に於てせられたのであつた。而してから檜葉には彼の「蕪村を悼む詞」があつてその終りに

かな書の詩人西せり東風吹て　浪華　無腸

と誌されて居る。蕪村の死は天明三年、丁度秋成が大阪で「さつばり建立」した新家に移つてから三年目に當る。浪華人傑談に「道修町に住し藥種屋なりしが」と誤傳せられ、「西天滿の梅が枝と云ふ所に移られしが」と傳へられて居るのは此新築の家の出來る前、そこ〳〵に移り歩いたものでもあらう。

浪華鄉友錄醫家の條には

上田秋成　字東作號餐霞居士　淡路庄村

とあるが、淡路庄は西成郡西中島村である。此鄉友錄は寛政二年版で、秋成が醫を廢して再び田園生活を營んだ天明八年から三年目である。これはもと醫者であつた爲めに載せたのか、全く廢業したのではなかつたのか不明であるが、いづれこの閑居の間にも知人に頼まれて醫藥を施した事もあらう。此里に住みふりし飛驒人が「やや寒うなり侍るには已がわざの暇のみになりぬるを、くすし

ばかりにはおはさすぞ侍る(鶉居)」の語も思ひ合はされる。

思ふに

上田秋成居長柄、結茅於水濱松林中、號曰鶉居、(古學小傳)

上田秋成嘗居於長柄(近世叢語)

つながぬ船とこそいへ、波によせられては、しばしとまりの岸もありけり。長柄の濱松の林はすこし距りたれど鄰れる杜の神の木の千年の陰にさしおほはれて、よそより早き竹の編戸……(鶉居)

とあるのや、歌集にあらはれた「田舍住せし一と云ふのは此處の事であらう。長柄は南中島村にあつて、西中島や歌島と共に同じく中津川の岸邊の村である。さればかのかしまの里と云ひ長柄と云ひ淡路と云ふも、同一個所を漫然と呼びならはしたものであらう。

かくの如く彼の半生を辿つて來るとこゝに一つの矛盾に逢着する。それは修養なき蕩兒がいつの間にか小說もかけば俳諧もやる、趣味の豐饒な刀圭家となりすまして居る事である。吾々はこゝに於て彼の修學に就て顧る所がなければならぬ。

彼の文學はまづ俳諧にその端を開いた。几圭十七回忌追善の續あけがらすに彼はかう云つて居る。

……今はた二十年のむかしとなりにき、几圭のおぢ適々難波に來たらるゝごとに、連歌の遊び夜となく晝となく、人々ら集りすゝけたる耳を傾け、句ごとに目さむるものにもてはやし、吾其席にあれば必ずしも打ゐまひつゝ若き人よ、さる句はかうぞ作るものなりとまめだちて數へられしが、うれしうてひたすら、あみだほとけに崇まへしより、いつかなじまれて、さや〳〵しき古家をとひもし、やどりもして、かたらはれしものから、此句作るわざにはやがて師にてぞますた、このあそびわすれゆくまゝおぢにもうと〳〵しうてわかれぬ。さるをこの四とせがほどのゐなか住に、むかしのすさび稀々云ひ出づるに、几董ぞ今の世にたぐひなきと聞きて、なり〳〵文のゆきかひして云ひかたらふも、おぢがむかしの契の末、むなしからぬになむ。ことし十まりなゝとせの手むけすと聞て、ありし世の俤まづおもひいでられて胸つぶれ、何ごともえいはずなむなりぬ。

續明烏の出版は安永五年で、その二十年前は寶暦七年になる。これは几圭の晩年であつて秋成が二十四歳の折である。思ふに、此頃、彼は飲めや歌への折花攀柳の渦中にありながら、一面、その文藝的才能を漸次開拓せられて行つたものであらう。かくて大江丸をしてはいはい袋に於て先達の中に無腸と數へさせ、几董をして

舞陽に無腸と云へる一大家あり、詩をよくし、萬葉歌を讀み、俳諧は宗因、鬼貫、來山をとる無双の才子也、只白眼にして世と交らず、可惜。(几董より奥州の東皐に宛たる書翰)

と歎ぜしめた地盤は作られたのであつた。

彼は更に國學を加藤美樹(宇萬伎)に學んだ。

わかい時は人眞似して俳諧と云ふ事を面白くたふとがりしが、歌よみ習ひて後も時々云ひてたのしむ也。(臨大小心錄)

の一節は彼が國學を後にした證である。然らば美樹の門に入つたのはいつ頃であらう。美樹は眞淵門下の俊傑、幕府大番の士で屢浪華勤番に赴いたのである。秋成は此機會を以てしたものであるか、それを明記したのは、獻詠和歌帖序に左の文が見えるのみである。

明和丙戌(三年)之秋、從加藤美樹、學皇學之古風、三年能達故事……

この言を信ずれば、雨月物語完成(明和五年)の二年前になる。明和五年と云へば、公金を盜んだものがあつて折から在番の美樹は連座して公廷に召されたが幾何もなく犯人が出て許されたと云ふ一事件のあつた年である。思ふに秋成はこの數年間、美樹の在番を機としては教をうけたものであらう。しかし彼が國學に志したのは、それより少し以前にある。

歌は中々よみ得られぬ事じやと思ひ絶えてありしが、人のすゝめにて何かしの中納言樣の御點をかけさせ給ふが有がたかりしにつきて、所々知らぬ事のあるは問ひ奉りしに「そちは心ざしのよい者じや考へておこぞ」とおしやつて終に御答なきに心淋しくて、契沖の古語を說きし書どもを集めて讀たれば、なほ所々に訝かしい事があつて、不思議に江戸の藤原の宇萬伎と云ふ師にあひて、そのいぶかしき事どもをつぶらに承りしが、此師もわが四十四五歲の時、京の在番に差されて上りたまひしが終に京にて空しくなれし也、齡は五十あまりにて在りし也。あたら事と歎けど我もその頃はくす師の業をつとめて日々東西南北と立走りしかば、又よき師につきてとも思はず、四十三歲より五十五歲まで怠りなく勸めしかば、稚きより習はぬ事にて終に身に障りて田舍へ養生のため隱居せしが、暇多ければ思出して魚の千里の學びをせしほどに、又師のいひし事にも知られぬ事どもありて本へかへりて見たれば大方に心得らるゝやうなが猶知られぬ事は陶淵明のおしやつたにつきてさし置きぬ。(流布本、臨大小心錄)

しかし、美樹に就く以前、建部綾足に據つた事が次の文で知れる。

若い時は人のすゝめで俳諧といふ事習ふたれば、さつても〳〵よい口じやと褒められたので四十に近いまで是(歌)を學ぶにひまが無かつた。人の云ふは、歌よんだがよい、俳諧はいやしい物じやと云はるゝ。そふ思ふたは歌はお公家さまの道じやとおしやれば、こちとの詠んだとてと思ふけれど、人のすゝめにて下の冷泉樣へ入門したれば、さてもそなたはよい歌よみにならりや、問やる事どもは追てこたふとおしやつて、その答なし。

契沖の著書を買ひ集めて物識にならうと思ふたれど、とかく疑ひのつく事多くて、道はかいかなんだな、江戸の宇萬伎と云ふ人の城番にお上りて、綾足が引合して弟子になりて、古學と云ふ事の道が開ける、初めは綾足が敎へよといふについて學んだれど、とんと漢字の讀めぬわろで、物問ふたびに口をもじ〳〵として、其後にいふは、幸ひ御城内へ宇萬伎と云ふ人が來てゐて、是を師にしてと云ふたが緣じやあつた。江戸人なれ

ば七年が問文通で物問ふ中に、五十そこらで京の城番に上つてお死にやつたのちは、よん所なしの獨學の遊びのみにて目があいたと思ふ。（異本膽大小心錄――小山曉杜氏所藏）

綾足の京阪漫遊は明和三四年頃で、美樹とは同じ眞淵門下のよしみがある。それが美樹と秋成とを結びつける機緣となつたのであつた。かくして彼が古典研究は着々とその歩武をすゝめて行つたのである。

けれども醫を廢めて長柄に隱退した後は災厄しきりに至つて、その翌寛政元年六月二十日には姑が死ぬ、十一月二十日には母が逝く、自分も寛政二年（五十七歳）には左眼を失つた。秋成夫妻の「心甚だめつそうになつた」のは無理もない。剩へ古事記傳兵衛と罵倒して居た宣長の聲名が隆々として天下を壓倒するのを見ては流石にいゝ心持はしない。まして先年（天明七年）宣長が呵刈葭に於て彼を駁擊した恨もある事とて、此文人肌の偏屈者が、これに對する反感も甚しく、いよ〳〵つむじが曲つて行つたものであらう。

母と姑との死は彼の妻をして落飾せしめた。五十一歳の時で瑚璉尼と號した。

姑母のものも、母のものも無益なは賣拂ふて三四百目あつたを、懷にして度々京へ遊びに上つた事ぢや、尼はもと京都の生れぢや故住みたいと云ふゆへ、まあこゝろみにちよつと知恩院の前へ腰かけて遊び初めたが……（膽大小心錄）

此出京の年を考ふるに、藤簍冊子の中に「年の暮に荷田信卿とひ來て、珍らしく都の春を迎へらるる事よ云々」の言葉書きした長歌の次に、

右寛政五年六月、漂然來京師、玆歳十二月二十八日夜賦之。

と註がある。されば秋成の所謂腰かけに京へ上つたのは六十歳の夏に當る。

京の住居は幾度か轉々した。

南禪寺の庵をかりて移つたが、こゝも曰くがあつて東洞院の月溪と同じ長屋住になりたり、ちと曰くがあつて、又衣棚の丸太町、そこにも尻がすわらず、もとの知恩院の門前の袋へはいつたが、尼の頓死の後は目が見えぬやら、何じややら不幸つゞきの世を、又一年餘くらして羽倉といふたくらうどの所へ、ちよつと腰かけたは、つい死ぬであらうの覺悟であつたが死なれぬゆへ、又南禪寺の庵の有つた所へ小庵をたてゝ七十三の春移り申した。（膽大小心錄）

この「南禪寺の庵をかりて」の條は、

栗田山のふもとのやどりを瑞龍山中の何某の庵に住みかふる時に、たよりつきて蘆庵のもとへ云ひやる。

かしこの人のいざと云にけふはあはゞしく移りゆきぬ、道の程ちかくなりぬれば御暇にはとはせたまへ、すきがましくはあられど、すこし廣きがよしと也、垣のとを過ぐる谷水の音のさやけきがめづらし、是は最勝院の瀧の末にてけがれなしと云ふ、纓すますばかりにあられど。夏來らば御足洗ひて遊ばせたまへ。

山に入るかしこきあとにならはずも、うき世の道に迷ひ入らまし（文反古）

とあるに當るし、「もと知恩院の門前の袋へはいつた」の條は、

花頂山のふもとによみそめし春
すまでわれみやはさだめむ栗田山あはたつ雪はきくらなりけり（藤簍冊子）

とあるのであらう。而して冠辭考續貂序によれば寛政八年九月の頃には栗田山のふもとに居た事が分るが、これは此年三月に智恩院に移居して引つゞき住んだのであらう。又「雨蛙」によれば、同じき十年には五月の末から河内の日下の里の寺に居た。

瑚璉尼の死も此頃で、秋成が彼女の遺文「夏野の露」に跋して、

本九條の農家の女、いとけなき時に植山某に養はれ、父母に從ひて難波にうつり來る。年二十一、われにかしづき、去年の冬五十八にして世を逝き給ひぬ、我母おのが母をも見つきはてゝ、髪をなぎ名をも改む、

と云つて居る。寛政九年十二月十五日で秋成の六十四歳の時である。

人生の秋も深うなつた。一葉散り二葉散り、はてははら〳〵と散り敷いて、すき透つた梢のみが寒い空に冴へる。晩年の彼は孤寂の氣がひし〳〵と身に迫つて來たであらう。

麥くだり燒米の湯のんだりして惜しからぬ命は生くる事じやが、書林が頼む事をして十兩十五兩の證を取つて十二三年は過したがもう何も出來ぬ故、煎茶のんで死を極めて居る事じや。（鶴大小心錄）

の繰言には多少誇張的な氣分があるとは云へ、まけじ魂の彼が天禀の奇才を抱きながら、しかも世に認められぬ滿腔の不平がその間に閃めいて居る。

妻の死後は、羽倉信美の邸に移つたり西福寺に宿つたりしてゐたが、文化六年六月二十七日遂に羽倉の家で歿した、時に七十六歳であつた。

顧みれば秋成の一生は長い寂しい一生であつた。不可思議の因緣の下に、此世に投げ出された彼自身が、既に奇蹟であつた。數奇な運命の星は早くもその頭に宿つて居た。若々しい歡樂の追求に日を暮して居た一個市井の蕩兒は、忽然不慮の災厄によつて痛ましい人生の姿の前に戰慄した。かくて醫となつて遂げず、國學に志して認められず、すね者と呼ばれ天邪鬼と嗤されながら。茶道家として僅かに大枝流芳と鼎の輕重を問はれつゝ、世の中と背中合せの七十餘年の生涯を、松風寂しき南禪寺畔の西福寺の、かねて奥都城と定めてゐた紅梅樹下に埋めつくしたのである。

第三章　人としての秋成

性格とその世評――その交友――「膾大小心錄」――對宣長――「くせものがり」の素材――諷刺と皮肉――生活の反映としての逸話――自己觀照の悲哀――痛罵と遣悶――秋成壁書――赤裸々の彼――師弟の情誼――妻への情愛――貴顯との交遊――人として。

狷介剛腹とは秋成を品隲するものゝ異口同音に稱する所である。彼の性格そのものが宛もその表象であるかの如く云ひ囃す。しかし彼が、社會なり交友なりを偏狹なる色眼鏡の間から觀るやうな態度は、生來の諷刺的才能が、儘ならぬ世に對する不滿の念に煽られて、或はモナ・リザの唇を思はせるやうな冷笑となり、或は噴火山的の熱罵となつたのではあるまいか。えたいの知れぬ形をした海鼠は天下の珍味である、外見の毒々しさを以て全體を推す事は出來ない。彼の毒舌あるがために秋成の全人格を蔽ひつくすのはあまりた酷である。口の惡いものは却つて心がよい。彼はたゞ很戾自らを喜んだのである、慢罵人の膽を奪ふのが面白かつたのである。峭直な皮肉と、深刻な諷刺とは彼の得意とする所で、その對象が親疎いづれであらうと、何等の障壁を設けず腹藏なく云つてのけた。謂はゞ天眞爛漫である。形式萬能主義の德川時代の士人には珍らしい一種の「露惡家」であつた。この點に於て彼には近代人の面影が見うけられる。

かゝる性情は人づきがわるい。まして時代が時代であるから憚る所なき皮肉は人をして眉を顰めしめた。從つて彼の交友は僅かに四五の指を屈する計りである。谷口蕪村、松村月溪、小澤蘆菴、村瀨栲亭はその僅かなる友の一群であつた。

栲亭は彼が淸風瑣言に序して「寓華頂之麓、與余居可相通、是以旦夕歡語乎、一堂頗愛其爲人」と云ひ、蘆菴とは、

年の暮にはいつも炭をきりて贈らるゝによみてかへせし歌　秋成

埋火のすみつきがたき都にも思ひを起す友はありけり

かへし　蘆庵

思ひやるかひこそなけれ埋火のすみつきてたゞひさにあれとぞ（つゞらぶみ）

の贈答をなして居る。これを見れば友情の温かさが思はれる、しかも彼は誌して曰く、

蘆庵云、そなたは何わざもせずしてあるが、いたづら也、人の歌直して事廣くして遊べよとぞ。答、人の歌直すべき事しらずと云。いなや唯おろか者を賢くして遣はせよと思ひてつとめよと云。いな〳〵其方ぞ生れ得ぬ人は却りて愚かにするにこそあれ、親の敎へしわたらひをよく心得し人もおのれになき才學は學ぶとい

へども愚になるのみ也といひしかは蘆庵答なかりし（贈大小心錄）

と、更に栲亭を評しては「村瀨は智者で小前な故、風流のない人じや、扨大阪では評判のわるい事があつた故、書いたもの、ほしがるものはとんとない」と云ひ、飲仲間の畫人月溪（吳春）をば「才物なれども俗癖あり」と貶して居る。又自己を東都文壇に紹介せし太田南畝を德としながらも猶「詩狂歌の名高けれども下手なり」と一蹴し去る。凡て人の思はくなど眼中にないやり方である。かの中井履軒が白川侯の聘を辭するために斬髮した時、彼は「髮そらずに斷りは云はれぬか」と面と向つて揶揄し、皆川淇園が秋成を見る毎に「どうじやおやち」と云ふのに對しては「どうやら骨が細うなつた、さきへ死にやろ、念佛申してやろ」と云ひ返し、弟の富士谷成章とならべて阿房の仲間に入れてゐる。

「眞淵沒後の國學界は加藤千蔭と本居宣長とが東西に對峙し、一は歌文の上に一は皇學に於て、それ〴〵覇を唱へて居た。これらも秋成の口に懸つては二束三文である。千蔭は「手もよいようでなし、歌は下手也、文盲也、大黑樣がお入なされねばあんな名利の人にやなれぬ」男宣。長は「田舍人の懷ろおやじ」に過ぎない。思ふにこの宣長の名は彼にとつては虫づのはしる程の惡感を與へたであらう。

ちかき頃神代がたりをつたへ得しとてまかしげに說明えし人ありき、是はきつね狸ならずして人が人を魅すなり、其なしへの中にわきて笑ふべきは月日は此國にてなりたる神にて萬邦をてらし給へば此光にあたらむものは、千萬里をいとはずかよひ來りて君と申してつかふべき者ぞと、蠻の國の制にてゾンガラスと云ふ千里鏡もて月日を見れば日は火の炎をたててもえ上るに同じく月は池波の風にたちさわぎたるに似たるよ、目鼻も何もなし、さるを神代がたりとて神か人かわきなくいひちらしたる人妖の生れたるなりき（自筆卷）

これは云ふまでもなく、古事記傳に注ぎかけた罵倒である。彼が宣長に對する態度は、あまりに感情に走せて理智の眼が盲ひた感がある。これは偶々彼の熾烈なる情の人としての一面を赤裸々に曝露した一例であらう。聲名に對する嫉妬とも見える所は、かの畫界の奇矯兒、曾我蕭白が自ら高く標榜し、當代の巨擘應擧の聲價を聞いて「畫を望まばわれに乞へ、繪圖を求めんとならば圓山主水よかるべし」と云へると好一對である。

思ふに彼の惡罵皮肉はその衷心の僞りなき告白である。思ふ所感ずる所を、何等禮讓の衣袂の下にかくす事なく有の儘に打出したのである。かの親友間に於ける寸鐵的の嘲笑も、この性情の發露に外ならない。時にはむら〳〵起る謀反氣に、その眞意の如何に拘らず、人が右と云へば左と云はねば腹の虫が承知せぬ事も多かつたらう。人はこの心情の分裂と矛盾との間に滑稽と無邪氣とを見る。多年の交友は早くもこの癖を見拔いて又始まつたぐらゐに思つて居たらしい。それでなくては美しい交際は出來なかつた筈である。

「彼の諷刺の結晶を具體的に示したものは癖癖談の一卷であらう。卷頭に添へられた、森竹窓の書簡はその消息を語つて居る。

御うはさのくせいものがたり、拜借にて寫々拜見いたし候、天王寺の法師がくすしの條、物產老人の類盡、居候書家のくだり、人々を見るやうにてあかずくりかへし見申候、誠に人には一くせとて、才ある人は才を相手とし、わるがう者はわるがうを言ひ倒さんとする癖にて、いづれ其才、其くせを振廻りにはし難くして夫を捨てゝ仕舞、塵芥場を拵らふる物なれば此本の作も定めて其ごもく場なるべし、是を面白と見る人も亦痴人にはあらざるべし、われらも其仲間入にと一本を寫して原本を御返上申上候、法論味噌一曲、薪より貰ひ候、其御口へ御あがり可被下候。

當時の人々――特に秋成が周圍の人々――にとつては、この條かの條、それぞれに思當つて或は哄笑し或は澁面作つた事がわかる。右の竹窓の書に見える天王寺の法師らしいのが、醫者となつて禮物に金銀をとらず物品のみをとるとて「唐山にては東帛と云ひ、我國にては神には幣と云ひ君には賈と云ひたてまつるも、おほかた帛錦の類なりけり……さて人の世に賄賂と云ひ、俗には鼻ぐすりとも袖のしたとも云ふは金銀のみにもあらざりけり」と冷評し、物產老人とも見ゆる條には「此は何の類なりとも答へらるゝを或人これを聞きて何の類の類の字は祇園町の娘ぶんの分の字にひとしく、いと紛らはし」と揶揄し去る。

これら一個人の行動に關する諷刺と共に一般社會にも闇夜の梟のやうな眼を輝かして居る、例へば「田舍上りの書生は國を出るより人の世話にはなりうち、寫本はぬすむもの、書物は借り取りに返さぬものとまづ覺えてくるもの」とて其惡傾向を諷し、「儒者たちの經濟りきみ、國學家の上古こがれ、えせ歌よみの萬葉ぐるひ、俗あたまの座禪觀法、二代金持の緣者のぞみ、世になし人の先祖よばしり、小借家ずまゐの茶の湯ぶるまい、また醫者の漢魏見識」とならべたてゝ人間の弱點に三十棒を加へて居る。

又白眼に一世を見下し獨りよがりして曰く

儒者歌よみと云ふも皆々商店で、けつく老がやうな閑寂の世は歴ぬ事じや、哀れなものどもぢや、又老がまれではなしに隱者じたてゝ筆耕を業とする人があれど、老がやうに世は廣がられぬと見えた。それと云ふが才があつても學文があつても、佞や鈍物やで口過にもかゝりかれる樣子じや、冥福の老も、ちと腹がちがふ故にそんな小人たちは及ばぬ〳〵。

要するに彼の諷刺は深さ强さの點から見れば力の弱いものである。その場限りの快感を貪るためとも解釋せられる。故に人情の機微に多少觸れて、はツと思はせる事があつても、鋭いメスを突込んで解剖分析して吾人の眼前に生々しい人世の姿を見せつける事は出來ない。自己の感情を忌憚なく吐露して居るために彼の諷刺はともすれば叫喚狂亂の態をなす。時には諷刺そのものが面白くて、

その諷刺と共に踊り出し浮れ出した感じをさへ與へる、從つてそこに泰然たる所がなく、動もすれば彼が單なる惡口屋、普通の漫罵家と見られるのはこれがためである。諷刺はもとより不滿足をあらはす消極的批評である。諷刺の材料は不滿足なるがために生じ、その材料が自己散鬱の道具となるわけである。即ち現世に對する不滿足から出發して滿足に到着しなければならぬ。故に諷刺冷嘲を浴せかける對象は無頓着である。換言すれば自己の優秀を示さんがために諷刺以外の交渉、即ち相手方の利害などは忘れて了つて居る。秋成が交友に於ける皮肉もこの消息を傳ふるものと思はれる。

諷刺を愛する程であるから世の中に不平である、不滿である。幾分か世間を茶化してかゝつて居る。故に人としての秋成の生活は甚だ無關心であつた。次に掲ぐる二三の逸話はそれを具體的に示したものである。

長柄の濱松蔭にかりほつくりてすむとて

むすぶより荒れのみまさる草の庵を鶉の床となしやはてけむ

庵を鶉居と名づけしは聖人鶉居穀食の謂にあらず、鶉は常住なしと云ふによれるなり。此いほりにある夜、ぬす人いりていさゝかあるものをかつぎていにけり、あしたおもふ

我よりもまづしき人の世にあれば茨からたち間くゞるなり

その入りし壁のこぼれを窓に作らせて蓋窓と名づけて風を入る便りよしと人に語りしかば、あなしれ〳〵しと云とぞ聞えし——藤簍冊子——

一日その庵を叩きこれは加茂季鷹にて候が此あたりをふと過り候まゝ、御閑夢を驚かし候、對面たまはるべくやと云入しに、中より辭あらく事のついでに秋成を訪ふ季鷹のあるべき、必定汝は僞者なるべし、疾く去れと呼ばはるゝに、季鷹頭をすくめて歩をかへし、翌日また庵を訪ひ翁に逢ひたてまつらむために、季鷹わざ〳〵參り候と云入れしに、よくこそと辭ぶやうにして秋成立出で、先づこれへと座に招し、しめやかに物語してありしが、珍客の來られしに一種一瓶の儲なきは餘りに荒涼なり、しばし待玉へと、やがてして薄き酒少しと菜のごときものゝ味噌にて和へたるを取出したり、季鷹これを味ふに何とも知れがたければ、是はいかなる珍味にやと問ふに秋成は額を撫で、君がためにとて今しも摘みし垣根草といふものと云ふに、季鷹も手を拍つて笑ひたりと。——列傳體小說史より——

無益の字、紙に世にのこさじと何やかとあつめて八十部ばかりの庭の古井に沈めて今は心ゆきぬ。

ながき夏見はてぬほどにわがたまの古井に落ちて心さむしも

さよみしを隣りの人おもしろしとやおぼすらむ、此井を夢の井と名づけて、しるしの石たてむとばかり、そこ（松本柳齋をさす）求めて書きたるを見す、これも賢しき翁のそのついえ、わきまへがたく且後には園圃のわすらひとなるべければみてのちやりすてぬ。——文反古より——

以てその大分を想見するに足らう。

然らば狷介不羈、傲岸剛腹と懐かしみのない批評を、世人から甘受した秋成が自己觀照は如何であつたか。かの「癖癖談」の末段、深草の里に、庭の小鳥が主人を評するの條は、そこに深い思索と鋭い内省は見られなくとも、彼が自癖を如何に觀て居たか、おぼろげながらに感得し得ると思ふ。

駒鳥の舌早なるが、人のもの云ふにかはらでひとり言するは、春ごとに此庵に來て遊ぶに、このあるじは何を生業にするともなきいたづら人なり、かくても世に住む甲斐ありや、いと惡むべきものなり。

とはやがて一般の世評ではなかつたらうか、秋成は更に下枝に遊ぶ鶯姫の口をかりて

このあるじはもと都の人なるが生れつきて心せばく、世を渡らんとすればおひかりのおそろしく、人の心のひろきまゝに、あしきといふこともいつはりも世の害にだにならぬことは、たくまずしてなすまゝなるか、それらを見聞くたびごとに、うちも歎き、あるは怒などしつゝ、また書をよめば、昔のみ忍ばしくて今の世をうとみ、藝にあそべばふるき世の人は上手も下手もこゝろ高しと仰ぎ、いまの眼のつけどころをさげしみて樂しまぬにより、とし月をいたづらに暮らすなり、世にあはれむべきものなり。

と感慨を披瀝して暗に現代に對する憎惡を述べて居る。而して「さればこそ世のおごりものが、あさましの心ざまなれ」との駒王の嘲罵には一見、自己を冷嘲するが如くにして、しかもその裏には社會に對する烈々たる反抗心が閃めく。

この主は世に云ふ癖癖の病をつのらして、え養はぬおろかさより我尊しとは思ひあがられど、世の人にみな濁れるものにするこゝろ奢の人なり、この主が思ふにかなふ世も人もいにしへよりあることなし、漢土のやまとの書どもにあかず敎ふるも、世の人の直からず、おほかたは侯けのみゆくを、なげきてにはあらずや。其理を推しいたるときても、その敎のまゝに行ふ人はあらぬげなり。あるじもこれがたびゝなるべし。

悲しい哉、凡俗の浪は天下の大衆を浸して居る。時代相の趨く所、偃きさとめる柵はない。よろしく世と共に推移せよ、滄浪の水濁らば以てその足を洗ふべしとは一般のとる易行道である。しかも熱血兒秋成が潔しとせざる所はここである。彼れは「及ばぬことゝ知りつゝ云ひ出づるがわれ賢のしわざなり」と自己の意志活動の無効なるを云ひ、更に「世にをし立てられてもおのれ濁らぬ先よしと云へり、それも表面をにごらざれば世には交り難し、此あるじが輩はこれを行ふ事能はぬものなり」とて抵ぐる能はざる自己の性格を語る。彼が初め醫となるや願心をたて「金口入、太皷持、仲人、道具の取次せまい」とて幇間の態度を唾棄したのであつた。世に合はぬはこれがためである。人に下らぬはこれがためである。彼が此の見方によりて長所ともなり短所ともなるべき特質を十分に理解しながら、猶毅然として高踏せる一生は彼の力強い人格の逝りである。

濁ると云へば惡むべきをたゞ世のありさまと見ばこと〳〵く忌むべきにあらず、花見嫁入のはれ衣はいつしか壬生の社殿の踊小袖となり、俳諧師のあたまに烏帽子がとまれば、神の忌垣の七五三繩は關取の褌にま

とふ、……それこれの違ひを云はで、世におしうつりつゝ、見聞かむには、怒も恨もあるまじきことならずや。（癇癖談）

何等の痛罵ぞ、何等の冷嘲ぞ。功利主義に向つてのこのアイロニーは、秋成の全人格が神經の束となつて顫動して居る程、痛切なる響を有して居る。さればこそ、

世の中の人なさぐれはおのづから塵なき庭のまつの下臥、（白眼看他世上人）

と取りすましながら、さすがに胸をついで出る憤懣は、

ためずとも直き心はおのづから竹と共にや空しかるべき、（竹與心俱空）

の遺悶となるのである。更に京攝戲作者考に載せられたる秋成壁書と云へるを見よ。

家寶かんしやく丸

第一　いぢなつよくし、はらのさむさをこたふべし

禁　物

酒肴、たばこ、油

すへもの、ものぐさきたきらふ

文人、茶人、財主、臭氣不可對

出店類藥無之候

奇峭以て矜持するさまがよくあらはれて居るではないか。特に禁物の中に文人、茶人と併稱したるは、彼が如何に當代の詩人雅客に慊らなかつたかゞわかる。されば膽大小心錄に於ては寛政前後の文人畫家を土芥の如くに罵倒し、癇癖談にては「むかし一天下こぞりて茶の湯なる時代ありけり」との毒舌を弄した。たゞ〳〵現實の姿が癪にさはつたのである。從つて僅かな事にも癇癖玉を破裂さした。鐘筑波で几董を悼んだ「冬かれてゆかしげもなき都かな」の句の前に、長い序が費用の點から削られた時、吳春に一書を裁して「ちよんがれめき候へども、これ〳〵月旦聞いてもくんねい、花の都の繩手の翁より申來り候は」を冒頭に、不平のかず〳〵滔々數千言をつらねたはその一例であらう。

思ふに彼の小心偏狹はむしろ憫笑に値するとは云へ、自己の缺陷を自覺して、しかも蔽ふところなく、赤裸の我を白日の下に投出した態度は、瀉瑠璃を後架で感心してゐるやうな僞善者の多かつた德川期に於ては、最も尊敬すべき人間の一人であつたと信ずる。

吾々は今迄、彼が性格の峻烈なる方面のみを眺めて來た、しかし人としての秋成を觀るには猶、その優しい半面を忘れてはならぬ。彼は遊里の兒であつた。慣習と階級の手を擺脫した、當代の遊里は、眞の意味に於ての人間を觀取し得べき唯一の自由鄕であつた。彼は酸いも甘いも嚙みわけた、所謂わけのわかつた人であらねばならぬ。後年彼が人目には傲岸な頑固爺と映じた頃も、流石

に皮一重奥には温い血が循つて居た。

彼が師加藤美樹の逝くや、その歌集靜舍集や雨夜のだみごとばを校正刊行したり、師の傑作と稱へられた

ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風寒しきちかうの原

の歌を石に刻して信州桔梗が原に建てたりしたのはその情義に厚い事を示して居る。又蘆菴初め交友の死にあたつて詠じた、挽歌の悲しい調は、籐簍冊子を繙くものゝしば〳〵心づく事であらう。さては冬の夜長を妻のために源氏物語をつぶ〳〵と讀み聞かせた彼。鶉居の佗すまゐに昔は家を外にして遊び恍けし夫を思ひ、老の身の今をうれしむ妻に「あなかしこし、さらずばいかでか、かゝる物狂を見つゞて三十年が程を念じ過させ給はん、我爲のまもり神にておはしけりと、首をむしろにつきて手をすり合し」た彼。瑚璉尼ならずとも誰か「おに〳〵しとのみ忌みにくむ」世の人に、このさまを見せたく思はぬものがあらう。血あり、涙あり、しかもナイーヴな心情を失はない彼の面目が躍動して居るではないか。

彼の交遊の範圍は狹かつたにせよ、猶、妙法院宮眞仁法親王（光格天皇の御兄）を初め、花山院大納言愛親卿、正親町中納言公則卿、などの顯貴の眷顧をうけて文雅の交りがあつたが、この事實は、一面彼の風格を偲ばせるに足るものがあると思ふ。

畢竟するに彼は聖ではない、賢ではない、はた鬼でもない。唯の人間である。境遇が性情を造り性情が境遇を生んで、その間に見出した狹い路を、自ら打水しつゝ尻端折の足駄穿きで、澁面造つて通つた男である、乾いた大路からは奇狂とも見えたらう。しかし彼にはこれより外に自己の通る路を見出さなかつたのである。

第四章　創作の諸相

秋成の創作の全圏——俳人として——その作品——小說の方面（前期）——「諸道聽耳世間猿」——「當世姿氣質」——八文字屋風の作品と彼の態度——「雨月物語」の出現——彼と史實の小說化——古典研究の方面——その著作——歌文の方面——「つゞらぶみ」等——彼の和歌——小說の方面（後期）——「春雨物語」に就て——「雨月」との比較——「くせものがたり」の諷刺——「ますらを物語」——「脚色餘錄」の誤謬——その他——「月の前」と「劍の舞」

斯くの如き性格から如何なる作品があらはれたか。

彼の創作は小說、紀行、和歌、俳句等の各方面に亘つて居るが大凡明和八年の災厄を以て前後二期に分けることが出來る。即前期は平和時代で彼が陶醉的生活の半面に當り、後期は漂泊時代で人世の辛酸を嘗めつくした折である。而して前期の創作と云へば俳人無腸としての俳句と、戯作者和譯太郎としての八文字屋本である。

俳人としては既に誌したやうに几圭から學んだ。几圭は高井几董の父である。無腸の秋成が交游に、天明俳壇の統帥谷口蕪村があり、その門下の几董がある事は、彼の句風を揣摩するに十分であらう。こゝにはその作品のうちより若干を拔萃するに止める。

山畑や蕎麥屋の軒に花薫る
梅咲くや馬の糞道江の南
枕にもならうものなり春の水
春の雲ゆく〳〵鶴におくれたり
さくら〳〵散つて佳人の夢に入る
あなかまと青梅ぬすむ衣の音
弟咲に淺黄が咲いたかきつばた
鞍かりて蹴上つめたし朝心（武庫川）
見あぐれば月に聲あり嶺の松
山を洗ふ雨に色なし秋の水
秋風に聲まだ青し笹のいほ
月にあそぶおのが世はありみなし蟹
梶の葉に硯はづかし墨の糞
朝顏に島原者の茶の湯かな
霎ふる湯ざめの床の夜もすがら（城崎温泉）
曉や市の中にも鐘凍る
月霞その夜もふけて川千鳥
四つに折つていたゞく小夜の頭巾かな（夜坐）

更に小說の方面を見ると、まづ和譯太郎の名のもとに著した「諸道聽耳世間猿」「當世妾氣質」の二篇がある。

諸道聽耳世間猿（明和三年刊行）は五卷十五話から成立つ短篇小說集である、その描くところは現實のありのままを寫したのではなく、作家の空想を面白可笑しく書綴つたものである、或は市井の出來事として衢の噂に上つた話もあつたらうが、要するに「おもはくは我心より出で、人の口に

かはりゆき、紹となり鵬となりて」こゝに世間猿の一篇と化し去つたものらしい。故に現世を對象としながら世相そのものよりも、むしろ裏に潜む作者と云ふ傀儡師の姿が強く感ぜられる。これは畢竟秋成の平和な周圍の事情が彼をして未だ人世に對する深い觀察と鋭い洞見とを啓發せしめず、旦那の畑いぢりと同じく、鋤が十分に土に入らなかつた。このためにその主人公は揃ひも揃つた變り物ばかりで特殊な人間をことさらに描いたとしか思はれない。これは一面秋成の趣味好尚が反映したので、家常茶飯の出來事をそのまゝに描寫するよりも、何か一風他と異つて、人の意表に出たいと云ふ投機的根性が、かゝる取材をなさしめたものと思ふ。

同年の冬に出た當世妾氣質の說話も、自ら序して「荒れにし我軒はいつしか浮浪子の中宿となりて長き世のかたみにはあらで荒唐世說をいはざれば夜食の腹ふくるるよと、宵よりつどひて七つの鐘聞く夜は數多たび、それが中にてえるとはなくて當世てかけもの、厚薄の情、をかしきあり、はかなきあり」と云へど、これも世間の巷談のみにあらで、乙姫の玉手筥さへ題材に入れて居る。かう云ふ構想上の技巧は「世間猿」「妾氣質」に於ては著しく弄せられ、讀者に向つてどうだ面白からうと常に鼻うごめかして居る風が見える。この行き方は氣質物作者全般に亘るもので、引いては所謂戲作者の通有性である。故に人生觀照の態度がおつちよこちよいに見える。夏目漱石の「行人」の主人公が、その父を評して云つたそのおつちよこちよいである。彼の父は、ある友の立派な代表者として行きながら、友の昔の戀人が二十何年も解らずに煩悶して居た事を、たゞ一口に胡魔化して得意で居た。それと同じく秋成の態度はこの場合相對世界に向つて如何にも輕薄である、この點は秋成が第三者の立脚地から人世を冷視した客觀的態度の發見に外ならないと辯護する者がある、勿論彼が茶化してかゝるやうな素質は青年時代から把持して居たにちがいない。或はその鋭鋒が時にふれ折にふれて閃めいた事もあらう。けれどそれは一世を白眼に睥睨した後年の秋成を見て初めて歸納し得べき言で、彼が初期の作を論評するには聊か當を缺くと思ふ。吾々が秋成の創作的態度を浮薄だと云ふのは、所詮八文字屋本の執筆それ自身にある。一世を風靡した氣質熱に犯された逃作の動機そのものにある。かゝる人そばへの下に筆を走せた作品が、藝術としての價値はもとより明である。加ふるに遊蕩の子、未だ人情の機微を解せず、人生の意義に觸れず、こゝに純然たる戲作と化し去つたのは洵に自然の數である。

又これを外面から見れば當時氣質物の花形、自笑其磧沒して文壇寂寞の秋である。世評の嘖々たるものがあるべくして、しかも何等の反響もなかつたのは、氣質物と八文字屋とを結ぶ因襲的勢力と、この種の文學に對する讀書社會の倦怠とが與つて力あつたからであらう。剩へ秋成の作は從來の範圍を多く出づる能はず、從つて世間猿諸國廻船も單に豫告に終つたのである。或論者は「この人にしてこの類の著者多からしめば文界の一奇觀を呈せしならんに惜むべし」と云つて居るが、吾

々はむしろ此種の作の少なかりしを賀するものである。特に妾氣質に散見する愚劣の文字は深く彼のために惜むところである。

今此二篇を比較するに、妾氣質は到底世間猿の敵ではない。世間猿の文章は往々にして西鶴の壘を摩し、奇才煥發、優に彼が凡庸作家でない事を示して居る。惜しい哉、題材と思想と錯誤し、幼稚にして皮相的な人生觀照は一種の空虛なる幻影として、あたら才筆をむざ〳〵生埋にした感がある。要するに此二作品は物思ひもなき春の小窓から、うつとりと眺めた浮世の影に過ぎなかつた。（わが雨月物語も亦初期の終に當つて剪枝畸人の名の下に、さながらの奇蹟の如く現はれた。奇蹟とは前の作品とは全くかけ離れた色彩の下に生れたの謂に外ならぬ。けれどこれは文學史上の流れから流へ歩渡りしたゞけである。）取材は悉〳〵史實と傳說とに據る怪異なる物語で、これを遣るに漢文脈の豊饒な雄渾瑰麗の文を以てした。その詳細は本文に讓りこゝには唯、作者の態度を述べるに止めて置く。彼は其序に「余適有皷腹之閑話衞口吐出」と云つて居るが、多大の感興を以て筆をとつたと共に、更に幾多の推敲を重ねた事も其想華から察せられる。しかも彼が技巧は文字語格になくして全然情調を出すに力めたらしい。

而して彼が好んで史實を小說化する事は其大なる特色である。——「雨月」の白峯・佛法僧を初め、「春雨物語」の血かたびら・天津處女はこの流を汲むもので、猶「籐簍冊子」に收められた月の前・劍の舞の二小品をも看過するわけには行かない。これらの說話の骨子は史實と云へ、大に傳說化せられたものである。かゝる取材の方法は多くの藝術家の慣用手段で、巢林子の戲曲、京傳馬琴等の小說に著しくあらはれて居る所である、しかし秋成は多くの作家のやうに史實の生地を塗りつぶし、時代錯誤の衣の下に、當代の人氣に投じようとはしなかつた。それは彼の創作が結構脚色に重きを置く戲曲小說と、撰を異にして居たからであらうが、思ふに彼は、史實そのものに深い感興を有つて居たのである。かの膽大小心錄に史論めいた個條の多いのを見てもその一端が窺はれる。かくて彼は興味の原形を損せざる範圍に於て技巧の彩筆を加へたのである。彼はこの態度を以て傳說にも臨んだ。「雨月」に現はれた說話にそれぞれ其先蹤を探り得るのはこれがためである。

且又、此一篇は神怪を描いてそこに人世の奥から何等かの消息を把握しやうとする深い思想はない。現實の匂ひに筆をつけても、ありのまゝなる姿を放下せる鋭い洞觀もない。自己の實生活とも沒交渉なれば自己の思索とも無關係である。要するに倫安の兒が感興に乘じて才藻を傾け、自己滿足のために描きあげた一幅の彩畫と見るべきであらう。

彼が後期に於ける述作は多く古典研究と歌文であつた。古典研究としては「校補古今集打聽」二卷（天明五年或、寛政元年刊）、「鉗狂人評」（同六年）、「安々言」（寛政四年）「よしあしや」「伊勢物語古意」（寛政五年）「冠辭考續貂」七卷（同八年成、享和元年刊）、「萬葉集見安補正」五卷（寛

政八年文化六年刊)、「靈語通」(同九年)「金砂」(文化元年)などを擧ぐべきであらうが、學者としてはさして優れた人とは思はれない。また、茶道に關する「清風瑣言」(寛政六年)、史學上の考證「漢委奴國王金印考」(天明四年)などは彼が特殊な才能を想見するに足るものであらう。

歌人としての創作の技はまた當代の一才人たるに背かない天分を持つてゐた。小澤蘆庵、伴蒿溪等との交遊と、さきに誌した堂上の歌人の知遇とが、冥々の中にその作品に反映してゐるやうに思はれる。

彼の歌文は『籐箕冊子』に見える「秋山記」「十雨言」「御嶽さうじ」「鶉居」などあるが、その他にも「岩橋の記」「山霧記」「かぐつちのあらび」「初瀬詣」「背振翁傳」「鶯鳶行」、また「花虫合」「十五番歌合」など『秋成遺文』(藤井博士編)に收錄されてゐる數篇は彼の想華を窺ふに足るものである。今は彼が和歌だけを摘出するに止めたい。

野鴉の羽ぶきの風にちらされし名殘りの枝の梅かをるなり
大堰川岸のさくらの影暮れて月になりぬる波の光は
春雨に着ならしごろもかたしきて柴のおき火を埋みかねつも
九重のとのへに渡す橋の上に見る目も靑き夏の山々
夏たちてきぬかろげなる都女の人妻ゆゑに顧みぞする

さみだれは夜中に晴れて時鳥あはれその鳥あはれその鳥
入りつどふ千船のひまを漕きいでゝ夕涼みするなには人かも
朝霧の海のたまもと見しはこの麓にしげき杉のむらだち
聲のみやひとり月見る窓の前にをのへの鹿の影もおちくる
いはけなき里のわらべが夕まどゐ月に指ざし門あそびして
秋ぎりの眞木たつ山に折りつれて宿の佛に花たてまつる
筥あげて夜のほど見ればともぶねのそなた時雨れて波さわぐなり
埋火のもとのまどゐにいきかひて都の人の冬ごもりする
雪深きけさの蔕をあげやりて今宵うれしく宿直せしかな
阿嬬なる君の使の都入り道さりあへや人のかしこむ
繪にまさり見るに尊き九重の神の御社法の大刹
みぞれ降り夜のふけゆけば有馬山いでゆの室に人の音もせぬ
友多き都に住めば明暮にさぶしくもあらぬ冬籠かな
根芹生ふ田井のみしぶの色ながら氷れる上に雪のつもれる。

此期に於ける歌文以外の創作は「春雨物語」と「癇癖談」との二編を傳ふるのみである。

春雨物語の枯蒼なる文章は明らかに雨月物語當時の作でない事を示して居る。土佐の極彩色に初まつて四條の淡彩となり、雲谷の水墨に終るのは一個人の文章史にも當篏る常套事である。「雨月」を深山の月の夜櫻とすれば「春雨」は澤邊の暮の尾花である。かれには雄麗の中に一脈の凄さが漲り、これには蒼凉たる間にも微かな明るさを滋へて居る。藤岡博士は二篇を比較論評して曰く、

雨月物語は秋成が中年の作にして春雨物語は蓋しその晩年の作なるべし、彼は修辭に意を用ひ、此は筆に任せて重ねて顧みず、一は迂餘、一は直截、艶麗と老蒼と二者その品を異にす。普通の讀者は雨月の花やかなるを取るもの多かるべしと云へども趣味の熟したるものは或は春雨の枯れたるを及び難しとせん（國文學史講話）

さはれ、小說として見れば春雨は遙かに雨月に及ばない。「血かたびら」にせよ。「天津處女」にせよ、中心人物の周圍を唯漫然と何の秩序もなく叙述したに過ぎない。謂はゞ一時代のある期間の記錄であるかの感がある。而して「海賊」は彼が目に映じたる貫之論。「目一つの神」は堂上家の歌學罵倒で、共に諷刺文學として見るべきである。卷末の「樊噲」は主人公の行動が何等の慣習形式に囚へられず小氣味よく躍動して居る所に、全く時代を超越した情趣があるが後半が現存しないために、未だ山のものとも海のものとも判然しない。一體、今日世に流布せる春雨物語は五卷物の缺本である。馬琴が物之本作者部類に、

上田秋成が戲墨讀本は雨月物語のみならず春雨物語てふもの十卷あり、こも續き物語にあらず、一回毎に世界は異にして十回あり、この書は印行せず、傳寫の本も世に稀なれば已はその書ありとも知らざりしに桂窓子いぬる年作者の自筆の卷物十卷を見たり、その後類本を見ず、當年傭者に寫させて藏弆すと、予がために云へり、こもまた得難き珍書なればいかで借謄せまほしゝ、よりて錄して同好に示すのみ。

とあるに徵しても明らかである。思ふに現存せる「春雨」の文學的價値はむしろ古今を品隲して冷嘲骨に徹する諷刺にある。この點に於て癇癖談が伊勢物語の簡古を喜ぶのあまり、筆をとりながらしかも當代の痛罵と化したのと同系統にあると云はねばならぬ。而して癇癖談に於ける大阪長町の貧民窟の一段は人生傍觀者としての細心精緻なる彼の用意がたま〳〵筆端に逆つて玆にその寫生的技能あるを明示したものである。癇癖談一篇は文化五年七月彼が歿後の出版であるが「吾妻に京傳あり」と序にあるのから考ふれば、京傳の隆盛期即ち彼が晩年の筆のすさびであらう。

猶、文化三年四月（七十三歲）圓光寺に詣でゝ、綾足が西山物語（三冊、明和五年刊）のモデルに逢ひ、その直話によつて書きとめた一篇の物語（藤井博士は「秋成遺文」に收めるに當つてますらを物語と名づけてゐられる）は純な創作ではないが、既に小說の素材となつてゐるものだけに一作品として眺める事ができる。

彼が主要なる創作は以上數篇に盡きて居るが、西澤一鳳が「脚色餘錄」に於て棧物語として擧げた

水滸の叢商人の條を原として、上田秋成が作の小說に棧物語五冊と云ふあり、是には若狹の旅人八九人連にて岐蘇の奥山をわけてゆくに一人の僧に逢ひ、名所跡を問ひなどする內、夕陽に及びければ、僧の案內によりて山寺に一夜を明かす、その僧 精進酒ながら客にすゝむ、此酒は蒙汗藥入有て、不殘賊の手に死す、一人の壯士辛うじてその場を逃れいで 谷間を越え、遙向ふに燈火ある孤屋にたどり行き身の厄難を語る、此家の老女も山賊の黨にて 再び爰にて賊に出合ふと、宋公明が流罪の旅中の艱難に混じて作せし作也

と云ふ梗概の書は、寛政十年刊行の雲府館天歩の作棧道物語（五冊）の事で、全く一鳳の思ひ遣ひである。また「列傳體小說史」には褻庭篁村の談として雨夜物語なるものが秋成の作にあるとてこれを見た四方梅彥（柳亭種彥の門人）の語つた筋を掲げて居る。

こは雨ふりつゞく夜、灯火かきたてゝ獨り文を繙くに、前栽のかなたに鐘の音 かすかに聞ゆるより耳聳てゝ近づきゆけば、土の下にて鳴れるなりけり。さては訝かしと歸り鍬もて掘上れば、いつ入定したりけむ一人の老法師の息も絶えずありて一心不亂に佛を念じ居たるなれば 救ひ出して、浮世の月に心の隈もなく互に物語る樣を描けるものなりとぞ。

果して、斯樣な作品があつたか、他に文獻の徵すべきものがないので 原本の現存せざる今日、如何ともなし難い。

この外、創作らしい姿態をなすものには籐簍冊子の中にある月の前、劍の舞の二小品がある。前者は西行と右府との間に起つた銀猫の說話、後者は鶴岡祠前の靜の舞を叙したものである。共に艶美に流れず枯淡に走らず、全篇に漲る雅潤なる氣韻は得易からざる名什である。わけて劍の舞は文情双絶。「白くにほひかなる面わのすこし衰へ」たる絶代の麗人が、「烏帽子の緒むすびたれ、色濃き衣、打かさねたる上に山藍摺もとらせし袖長きに赤き袴のこは〳〵しきを踏みはらゝかす」その舞姿は、そゞろに彼女が悲しき內部生活と共鳴して戀の力の强烈と藝術の匂ひの 芳醇とに、限りなき情趣の躍躍を感ずるのである。

第五章　秋成の文藝觀

秋成の小說觀——「ぬば玉の卷」に現はれ　源氏物語評——「よしやあしや」に見える伊勢物語評——彼の文藝觀と創作との交涉

最後に秋成の小說觀を窺ふに足る文字を、彼の遺文の中に物色するに まづ安永八年（四十六歲）

の作、「ぬば玉の卷」を發見する。小說の體裁をした「源氏物語の評論で、この年の秋、妻を伴つて城崎に入湯した時の筆のすさびである。堺の浦に住む宗椿と云ふ好事者が夢に明石の浦で一老翁に逢ひ、源氏物語の作意に就て問答する體で、翁は柿本人麿の靈であつたと云ふのである。要點は儒佛思想に附會するの妄を難ずるにあつて、源氏の君、夕霧、薫など主要人物の評に一見識を示してゐる。その中にある

そも物語とは何ばかりの物とか思ふ。もろこしのかしこにもかゝるたぐひは、ひたすらそらごとをもてつゞめとし、專ら其實なしと雖も、必ずよ作者の思ひ寄する所、あるは世の樣のあだめくを悲しび、あるは國の費えを歎くも時の勢のおすべからざるを思ひ、位高き人の惡みを恐れて古の事にとりなし、今のうつゝに打ちかすめつゝ朧氣に書きいでたるものなりけり。彼の源氏物語もこれがたぐひにて、深く量り遠く思ひやりて作り出でたれど、さすがにめゝしき心ざまもて書きなしたれば專らわたくし心多く、あだごとまめごとにつゞめたるを、あながちに讀み耽りて、强ひたることわりどもゝよろしう思ひなりては、又わたくしごとのみもて說きなすものなりけり。それらの人のいへることわり皆拂ひ棄てゝ、秋の夜の長きを明かしかぬる心なぐさには成りぬべき物ぞと心得べきを

の一節の如きは秋成の物語に對する意向を揣るに難くない。現實の姿を假想の世界に移して描き、作者が世相觀にある理想を託して寫す、そこに物語の本質があると見たのである。これは彼が前期の小說の一部にやゝ觸れてゐるやうに思はれる。

又、寛政五年（六十歳）の「よしやあしや」の序の中にも、彼の文藝觀らしい言葉が認められる。

凡そ物學びて才ある時にあはぬは我有一寶劍と云ひ、しら玉はよし知らずとも我し知れゝばとよみ、或は書は憤りになるとも云ふ、やまともろこし人の心は異ならぬものなり。彼處にては演義小說といひ、こゝには物語と呼ぶ。それ作り出てたる人の心は身幸ひなきと歎くより世をも憤りては昔を戀ひしのび、或は世の中の咲く花のにほふが如く榮ゆくを見ては、やゝ、うつろひなん事を思ひ、あるは時めく人の末、いかならんと我ながらもあざみ、又ためしなき齡を願ふも遂には玉手箱のむなしきをさとし、得難き寶しも、求めありく痴者のうへを愧かしむるには、唯今の世の聞えを憚りて、昔々の跡なし言に何の罪なげなる物かたりて書きつくるなむ、かゝる文のしらひなりける。

これは伊勢物語に就ての論評であるが、移して以て彼の小說論となすに足らう。此の所論は現實に於て蹉跌したる者がその憤懣を文字に寄せて散鬱の具となすこれ即ち文學なりと云ふの意に外ならぬ。藝術觀としてはあまりに簡略にして偏狹たるを免れないが、その言ふ所は悉く後期の述作の裏書となつて居る感がする。癖癖談、膽大小心錄はもとより春雨物語を貫く情調も正しくこれであ

る。從つて人としての秋成は最もよくこゝに映つて居ると云はねばならぬ。

要するに秋成の文藝觀（特に小說論）とその創作との關聯はさして明確なるものではない。こゝに取扱はんとす彼の代表作「雨月物語」の如きも、ある理想を現實の姿を以て具象化した作品ではなく、それかとて胸奥の鬱懷をこゝに吐露したものとも考へられない。思ふに稗史涉獵が彼の創作熱を刺戟し、湧き上つたの高興が其の趣味の上に築きあげた藝術品、卽ち「雨月物語」の一篇であると云ふ結論に達するのであらう。

第二編　雨月物語評論

第一章　解　説

第一節　創作の年代と刊行

上田秋成の代表作「雨月物語」の創作年代に就てはその序文に「明和戊子晩春、雨月朦朧之夜、窓下編以成界梓氏、題曰雨月物語」とあるので、その脱稿が明和戊子即ち五年であつたことが明である。しかし刊行はずつと後れてゐる。關根博士の秘本に馬琴が愛讀したと云ふ雨月物語があつて、其の書後に彼の自筆で

この書は京都なる國學者上田餘齋がいとわかゝりし時、明和五年戊子の春、戯れにつゞりなせしものなり（餘齋は浪華の市人なりしがば、この時は大阪に居りしなるべし）余は明和四年丁亥六月生れしかば我ふたつの年にや、此書成りてより九年を經て、安永五年丙申の四月刊行せしより世にあらはれしなり

と誌されて居る。此頃は丁度秋成の閲歴に一轉回あつた時期である。

翁商戸の出身、放蕩者ゆへ家財を積みかねたに三十八の時に火にかゝりて破産した後はなんにも知つたことがない故、醫者をまづ學びかけたが村居してまづ病を澤山に見習うた事ぢやつた。（膽大小心錄）

こんな理由からして稿本を筐底に藏したまゝ世に問ふ折もなかつたものらしい。列傳體小說史の編者は

されば雨月物語は秋成、平和時代の最後の著書ならんか、即ち小說時代(前期)の終局期に成りしものなり、さればその年より云ふもその作より云ふも老成の期なるべきに馬琴は何の據所ありて之を「いと若かりし時物せしもの」と云ひ、小說史稿(關根正直著)には「雨月の如きはわかゝりし時の筆のすさみなり」と云へるにや

と云つて居る。雨月を平和時代最終の作と云ふのは彼の經歷を顧みて首肯せられるけれど、年より云ふも作より見るも老成の期と推定するは速斷に過ぎはしないだらうか、人間四十以前を以て老成とするのは少しく妥當を缺くと思ふ。まして晩學の秋成に於ては猶更である。その上、馬琴が「いと若き」と云つた、いとなる漫然たる修飾の言葉に囚はれるのは、あまりに穿鑿に過ぎるものと云はねばならぬ。もしその作品そのものから來る感じに至つては決して老成期を思はせない。即ち明和五年は三十五歲に當り、安永五年は四十三歲に當つてゐる。

凡て、詩人の創作的過程は絢爛より平淡に入るのを通則とする。今雨月物語を見るに瑰麗の文をやるに奇峭の辭を以てし、加ふるに法格に囚へられざる奔放の氣が横溢して居る。かゝる作品から享ける印象は常に花やかな情趣に浸り、緊張した心持でなけらねばならぬ。而して雨月はとりも直さずかゝる條件を具備した作品である。即ちこの述作は彼の初期の收穫に屬するものと云はねばならぬと思ふ。

次に刊行書に就て一言したい。

一、安永本。半紙本で全部五冊から成る。卷一は十八丁、卷二は十五丁、卷三は十七丁、卷四は二十丁、卷五は十七丁、凡て十二行で、一行は二十五六字になつてゐる。表紙裏には「雨月ものがたり全五卷。書籍所、野梅堂梓」とあり、欄外には「今古奇談」と横書がしてある。その奥附を翻せば次のやうに出て居る。

安永五年丙申孟夏吉旦

書肆　京都　寺町通五條上ル町　梅村判兵衛
　　大阪　高麗橋筋壹丁目　野村長兵衛

帝國圖書館所藏本はこれである。(最近借覽した藤井紫影先生の藏本も、表紙裏は缺けてゐたが、同じ本であつた。)

二、東京帝國大學圖書館本。美濃紙版で上、中、下の三冊物である。上卷には、一の卷二の卷を、

中卷には三の卷四の卷を收め、下卷は五の卷のみである。上卷の表紙裏には上田秋成大人編輯、浪華書肆文榮堂藏版とある。發行の年代は不明であるが、安永本以後の刊行ではあるまいか。而して右二書とも挿繪は同一であるが筆者の署名は見えない。

明治になつてからは古書覆刻の氣運につれて、わが雨月物語も屢々活字本としてあらはれた。二十二年、古著百種の第二輯に「菊花の約」と「青頭巾」との二篇が載せられたが、完本の魁と見るべきは二十六年、不言巴と云ふ人の校訂本である。これは佐藤良次氏の秋成傳を卷頭にした四六版假綴で發兌書肆は不明である。後、帝國文庫本(二十八年、博文館、珍本全集中卷)名著文庫第三編(三十六年、富山房)、近くは國民文庫(四十三年)、有朋堂文庫(大正元年、上田秋成集)等があり、其後に出た國文學の叢書には必ず收められ、單行本も三四に止らないで、愈々坊間に流布するに至つた。

第二節　文學史上に於ける系統と時代の影

織り出す花草模樣の繪を解けば、組みあげられたる經緯の因果を、五彩の糸の亂れに見出すであらう。雨月物語一篇。彩るものは神怪幽玄の色調である。漂るものは空靈縹渺の氣分である。而してこれを貫くに人間界を超越する神秘の情趣を以てした、二千年の國文學史上、比類なき怪奇なる藝術である。

かうした作品が、秋成の創作的才能によつて何の手もなく生み出されたものであらうか。藝術の天才は力ある個性である。その個性の表現が形象をとつた時、初めて藝術品となるのである。しかし個性の內部に滲透する外界の刺戟影響を絕對に否定することは出來ない。そこに橫溢せる富贍な想像や、幽婉な筆致の中に潛む獨創力は別としても、又これに纏るゝ何等かの傳統がなければならぬ。

そこで先づ、雨月物語の成つた明和以前の文壇に一瞥を與へてその系統源流を搜らうと思ふ。

一、宗教文學の流れ

室町季世から元和偃武にかけて數十年の間、世は戰亂の巷と化して、日となく夜となく血腥い風が吹荒んだ時代である。亂國の慘禍は今更こゝに述べるまでもない。劍戟の響、矢叫びの音、この裏に潛む幾多の悲劇は、目のあたり展開せられた切實なる人世の姿であつた。討死、沒落、敗亡、流離などと云ふ、血の滲んだこの慘ましい現實は、如何に當代人士の胸に痛切なる刺戟となつて現はれたらう。わけて感受性の鋭い人は凝として居られなかつた。皮一重奥に流れる脈管には幾百年來傳承せられたる佛教的無常觀が隱れて居た。實際、昨日まで戎軒とした勇士が、忽ち緇衣の身と代へたのも決して二三に止らなかつた。而して、征衣の袖に烟焰の臭ひのぬけやらぬ寶永の頃に

は、早くも罪障消滅、因果應報を敎ふる佛敎思想が文學の上にもあらはれて來た。もとより前代文學、特に謠曲に現はれた宗敎的色彩の繼承と云ふ點もあるが、時代の反影として當然の現象である。

此系統に屬するものは早く七人比丘尼（寛永十二年）、二人比丘尼（寛文三年）、因果物語（寛文元年）等となつて現れ、共に現實生活の果敢なさ賴りなさを具象したものである。この風尙は年と共に著しく一方、佛者の威德や寺院の緣起などを說くと同時に因果應報の理を附會して、當時の低級なる民衆を畏怖せしめ崇敬せしめつゝ、佛菩薩の慈悲の袂に縋らせやうとしたのであつた。されどこれらの多くは趣向凡庸、行文亦蕪雜、佛說を世上の出來事に附會した幼稚なる文學に過ぎない、然るに他の一勢力がこの風尙をして長く目的小說——弘法敎訓としての——とのみでは滿足せしめなかつた、即ち當代の儒者が研學の餘技を詩文に向け、更に支那稗史の飜譯に現はしたので、玆に德川期文學の一大分野を占むる怪談小說の出現を見るに至つたのである。

二、怪談小說の系統

久しい間戰雲に鎖されて、僅かに五山の緇流の間に命脈を繫いで居た學術は江戸幕府の保導奬勵につれて、曙の色美しく文藝復興の機運を生ずるに至つた。併し當代の學問は訓蒙的であつた、實際的であつた、幕初の儒者が悉く藩侯の帷幄に參じて、經世の業に力めたのを見ても、斯般の消息は明らかであらう。

けれど彼等も亦一方に於て純文學の方面に筆をつけた。儒官が文敎の傍ら詩文の研究に力を致したのは勿論であるが、學識あり、敎養ある一部の人士が俗衆を啓發する目的を以て支那稗史を平明なる假名文に飜案した所謂假名草子の現はれたのも此時である。裳陰比事物語（慶安四年）、釋迦八相物語（寛文六年）を初めとして、同じ六年淺井了意の御伽婢子（おとぎぼうこ）が出た。これは支那の剪燈新話中の說話を基礎として他の神怪譚を加へ、國名姓名をも日本的に改訂した怪談物の短篇集である。十三卷六十七話、悉く靈界を語り幽境を說いて居る。正しく因果物語の系統を引いては居るが流石に巧妙暢達、此種の草子中に嶄然として傑出した作品である。此書一度出でてより所謂怪談系の百物語、お伽話の類が踵を接して續出した。

かく了意によつて時代を劃せられた怪談物は、林文會堂、靑木鷺水を經て、妖花異草、目もあやに咲き亂れたけれど、いづれも野路の狂ひ花で、深く留意するに足らぬものばかりである。然るに寛延二年に至つてわが近世小說史は近路行者の古今奇談英草紙の一名篇を得た。

英草紙（はなぶさざうし）は九篇から成る短篇小說集である。題材がいづれも怪奇なるに拘らず、一體に明るい調子の漲つて居ることが、甚しく目立つて見える。それは現實味が非常に克つて居るからで、從つて篇中の幽怪は唯、方便にのみ用ゐられたかの感がある。この點は御伽婢子と對照して注意すべき事項であると思ふ。而して用語文體が著しく漢臭を帶んで居ることに就てはその素材が今古奇觀などに

あつた事と、當時の漢文學の傾向とが然らしめたのである。

儒學者が餘力を詩文に致す風潮は年につれて隆盛となつたが、更に岡島冠山が通俗水滸傳、小說讀法等を著して俗文學の分野にわけ入ると、岡白駒は今古奇觀から佳作を撰んで小說粹言、奇言等を編纂する。時勢かくの如くなれば世人の稗史小說に對する態度も、さながら變せざるを得ない。讀書圈は次第に擴がつて俗譯相次ぐに至つた。かう觀てくると英草紙の文章上の意義も從つて明らかになつて來る。

御伽婢子と英草紙とが雨月物語以前に於ける怪談物の双璧なることは何人も否定しないであらう。彼を隱沼の暮れがたに、森蔭から流眸に見る紅椿の艶冶があるとすれば、これは日照雨降る眞晝の野邊の曼珠沙華である。一は鮮やな間に妖惑が潜んで居るし、他は明るい中に小暗い影が漂つて居る。而して此兩編と雨月物語との直接關係を指摘すれば、大體に於て御伽婢子は說話の上に、英草紙は叙述の上に、それ〳〵痕跡を印して居ると云ふべきであらう。

英草紙以後の文壇を見ると怪談物は縷々として續いて居る。而してその間にわが雨月を生み、寛政以後はいよ〳〵その數を增し、遂に化政度文學の精髓たる京傳馬琴の讀本に入つて、その一大要素をなして居る。雨月が英草紙と共に讀本の先驅と稱せられるのは――文章上の至大なる影響を併せて――もとよりその所である。

猶、この荒誕とも云はるべき題材が如何にして時代の人の興味を長く繫ぎ得たかは、當代の迷信を一顧すれば思ひ中ばに過ぐるものがあらう。これに就ては便宜上秋成の神秘思想（第三章第四節）に述べることゝする。

三、雅文物語の一派

更に他の一因としては、國學者の創作的方面、即ち雅文物語の出現を擧げねばならぬ。

自由研究の精神が國學界を動かして急に色めき立つたのは元祿以後である。これには一世を威壓した漢學者が漸次支那崇拜に傾いて、自國を卑下するの風を生じ、或は姓名を支那風とし、或は自ら東夷と號し、或は孔孟の軍攻め入らば如何すべきと詰られて返答に窮したと云ふに至つてはその極點であつた。物窮まれば則ち轉ず、その反抗的運動として國學者の覺醒を促し國民性の自重を喚起した。

こゝに於て古典研究の端緒は開かれ、下河邊長流、釋契沖を先覺者として荷田東滿を經、加茂眞淵、本居宣長に至つて黃金時代を現出した。かの儒學者に於ける經史と詩文との關係と同じやうに、國學者も亦古典の素養を以て歌文の方面に鋤を入れた。かくて一方に支那の純文學、特に稗史類が移植せられるのに對立して、この方面の研究も盛んになり、兩々相接觸して近世小說の著しい現象を生み出すに至つた。

既に荷田東滿に白猿物語（元文四年）、落合物語（寛保二年）があれば、賀茂眞淵は由良物語を綴り、本居宣長は手枕を草した。これらはもとより古語の法格を普及せんとした筆のすさびに過ぎなかつたらう。けれどこの風潮は所謂雅文小說の一團を形づくつた。雨月の成つた明和五年には建部綾足の西山物語が出た、又同じ人の本朝水滸傳（一名芳野物語）は羅貫中が水滸傳の飜案で、かの梁山泊を湖東の伊吹山とし、宋江、高俅をそれ〴〵押勝、道鏡に擬し、且發端に椿枝傳說を附會したものである（安永二年）。此外、村田春海に竺志船物語があり。後れては石川雅望に近江縣物語・飛彈匠物語（文化五年）がある。而して吾々が眞淵の門人帳を繙いて當代の雅文作家の大多數を、そこに見出し得る事は大に注意すべき現象であると思ふ。

かくてわが秋成を顧ると、彼は眞淵の孫弟子に當り、且その後半生を古典の攻究に委ねた事や、その作品に國文學の素養の見える事などゝ、彼此相勘合して見れば、かう云ふ一種の時代思潮との間に、何等かの隱約なる相互關係が潛んで居るのではあるまいか。

思ふに、雨月物語は、以上の如き數條の糸が縒れ縺れて織り上げられたものである。そのあるものは鮮やかな色彩となつて浮上り、そのあるものは嘿みながら沈んで居る。而して吾々に與ふる第一印象は、云ふまでもなく怪談物としての雨月である。

第三節　特　質

一、內容上の特質

雨月物語を繙くもの誰かその夢幻的色彩の强烈なるに驚かざる。其想や現實よりも靈界を重んじ、自然よりも神秘に傾き、想像の翼は遠く人寰を離れて空靈の域に達して居る。加ふるに詩的風韻の豐かな才筆は怪奇幽玄の詞章を縱橫に馳驅して、讀者をしてその神秘界を誘致せしめずんば已まない。而して等しく怪異の刷毛によつて一抹の陰影を宿して居るとは云へ、その作品は自ら二樣に分かれる。現實味の多いものと、少ないものと即ちこれである。勿論これは程度の差による皮相的區分であつて、その根本的性質の一なることは、もとよりである。

故に現實味の多きものとは云へ、全く超人間界の領域から脫却したのではない。その現世的色彩は、とりも直さず神秘界に誘ふ導因である、方便である。浮世小路を出でゝゆく道はやがて摩尼の御山に達するのである。されば「たのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり」の物うさは、「壁に蔦葛延びかゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる」淺茅が宿の一夜となり、「一枝の菊に、薄き酒を備へて待たむ」との約言（かねこと）は「銀河の影、たえだえに氷輪われのみ照らす淋しき夜半の人影」を見る菊花の約の宵となるのである。讀者はこゝまで來て襟元に冷水を灑がれたやうにはつと

する。宮木や赤穴の靈を闇の彼方に思ひやつて尤もだと思ふ。而して道具に使はれた現實味に對して何等の疑惑をも感じない。陷穽に落されて恐れ入つてゐる形である。其心的狀態は全く神秘の情調に浸つて、ひたすらに幽怪の空氣を呼吸するに餘念ない。雨月物語の長所はこゝにある。

現實味の多いものすら既にさうである。少ないものに至つては猶更に幽怪神秘を恣にする。一たび想像の羽を伸して思ひを天上に馳するや、或は「木立雲を凌ぎて茂りさび、道に昇ふ水の音ほそぼそと清みわたる」、佛法僧の夢幻境となり、或は「髭髮もみだれしに葬結ほれ見花をしなみたる中に」、證道の歌誦する青頭巾の別乾坤となるのである。

作中の人物に對する同情と云ふことも亦一特色たるを失はない。その最も著しいのは蛇性の淫である。性慾の權化として描出せられたる眞女子が人間に纏綿する一場の物語は、材料そのものが既に嫌惡の情を以て見らるべき性質を有して居る。然るに作中に現はれた此女主人公は楚々たる可憐の女として描かれた。變に狂ふ女の情熱とさしたる徑程もない。彼女は、「ひたすら吾貞操をうれしとおぼして徒々しき御心をなおぼしそ、といとけそうじて」言葉をきくのである。「われをいづくにもつれゆけと云へば、いと嬉しげに默頭く」が如き全然處女の嬌態をも敢てするのである。かの後世の小說の如く、所謂惡玉を向ふへ廻して用捨なく憎惡の對象としたのとは、自ら大なる差があつて、これには何となう作者の同情から生ずる微溫が感ぜられるやうである。從つて此一篇に變化と云ふ超自然の一分子を除いては、極めて現世的に印象され、しかも全く一個の人間らしく取扱はれてゐる。從つて雨月特有の奇峭な詩趣には乏しい。吉備津釜に於ても作中人物への憐憫の傾向が見られる。「妬婦の養ひ難きも老いて後其功を知る」と云ひ、「夫のおのれをよく修めなばこの患自ら避くべきものを」と說いて暗に磯良の窮鬼を同情の眼を以て眺めて居るのはそれである。

猶他の特色としては作品に現はれた現實的色彩の多寡に拘らず作者が作物と同化しつゝ動いて居ることである。一例を擧ぐれば夢應の鯉魚に於ける興義が魚となつて湖心を游泳する心持は作者自身の心持である。その間に一分の隙も見えぬ程、ぴつたりと膠著して居る。かくてこそ竹生島の朱の玉垣の影に驚き矢橋の渡の水馴棹を逃れるさまも首肯せられるのである。荒唐な事件と思ふ理智の眼を開きながら、作者の眞面目な態度につい引込まれて、「比良の高山の影うつる深き水底に潜くとすれどかくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき」と云ふやうな嫌な調子の描寫をも忘れ、ひたすらに魚の狀態に感興を動かすのである。

最後に、白峯及び貧福論に於て、「靈物の口を借りて史上の變遷を豫言せしめたる一場は文學上の一手法とはいへ興味ある行き方である。特に白峯に於ては描寫せられたる背景と心にくきまでに調和して無限の情趣が漂ふのを覺えしめる」。

以上は雨月物語に於ける特質の明側である。けれど日の當る處には、きつと蔭がさす。雨月が藝

術として渾然たる珠玉でない以上、又暗側もなければならぬ。その最も甚しいのは和漢の故事の引用である。それは單に修辭上の熟語成句を臚列する謂ではなくして、長々と御說法を初めるのである。此弊は馬琴に至つて極點に達したが、俗をなしたのは初期の讀本作家である。例へば白峯の西行が上皇に向つて「遠く震旦をいふまでもあらず、皇朝の昔云々」とて論爭するあたりや。佛法僧に於ける紹巴が玉川の歌の講釋の如きはその著しいものである。されば、これらは筆端の奔放に任せて、やゝもすれば中心思想と遠ざかり散漫は引いて全體の周匝を破り、折角緊張した情緒に弛緩を與へる。かの貧福論がかゝる說法をせんがためにのみ作られたかの觀があるのは、此弊の極端に曝露したものと云はねばならぬ。

二、形式上の特質

文章上の特質である。その詳細に就ては評釋に讓つて、こゝには簡單に個條書として留く。

(い)、漢文派と國文派との融合を計つた結果、漢語の熟字に和訓を施したものが多い。

沙石。話柄。重陽。落草。妖怪。秀麗。蘭若。志誠。長嘘。過活。

等の類である。

(ろ)、語格、假名遣ひに無頓着なることは從來盛んに指摘せらるゝところである。玆には落合直文氏の訂正した一部分を引用する。

やゝありて云ふは今までかくおはすと思ひなば、など月日を過すべき、去ぬる年京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き御所の軍潰へしかば總州に避て禦ぎたまふ。管領これを責むること急なりと云ふ、(淺茅が宿、原文)。

やゝありて云ふは、今までかくおはすと思ひなばなどか月日を過すべき、去ぬる年、京にて鎌倉の兵亂の噂をきゝたり。御所の師潰え、總州に避けられしに、管領これを攻むること急なりと云ふ。(落合氏、訂正文)

尤もな訂正である。原文の文脈は非常に亂れて居る、けれど雨月物語全般から云へば、殊更に語格をも訂正する必要はないと思ふ。しかも奔放不羈は天才の常で、異彩ある特色は、えてその間に胚胎するものであるから、强て文法を以て拘束しようとするのは作家に對する敬虔の態度とは云へまい。吾人は唯雨月の一特質としてこゝに提示すればよい。

(は)、文脈一段落とすべき得所に拘らず長く續いて居るのを多く散見する。

ほどなくいなのめの明けゆく空に朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば、かさねて金剛經一卷を供養し奉り山を下りて庵に歸り閑かに終夜のことゞも思ひ出づるに平治の亂よりはじめて人々の消息年月のたがひなければ深く愼みて人にもかたり出でずその後十三年を經て……(白峯)

はその一例である。「出でず」で、一旦段落になつてゐるやうにも見られるが、文脈はすぐ續述され

てゐる。

これ以外、文章上の特質にその背景たる漢詩文の流行とか、先蹤をなした作品とか、換言すれば當時の文藝思潮が明確に反映して居ることを忘れてはならぬ。

要するに、雨月物語の特質は筆端の悽愴と構想の幻怪にある。その長は寫實的筆致の精緻にあらずして幽冥不可知の神韻にある。故に現實的分子の薄弱なるもの程、その特色が鮮明に浮上つて見える。たとへ想髓の淺薄、文體破格と云ふ幾多の批難缺點の下に、至醇なる藝術として免しがたきにせよ、人物と事件と結構と詞章と、兩々相俟つて、この種の文學の翹楚であり且又國文學の一名珠たるを失はない。而して其描かれたる神秘的色調の心髓と現代文學の一特質なる神秘思想との間に、近づくべからざる溝渠の存在することは、現代の地盤に立つて古文學を觀照するものにとつて、慨らぬものゝあるのは洵に已むを得ないところである。

第二章　雨月物語に現はれたる說話

第一節　說話の內容と形式

一個の說話はその內容と形式とに於て必ずしも單純ではない。外觀上渾成と見ゆるものも、仔細に檢すると意外に複雜な說話的分子から構成せられて居る。今雨月物語に收められたる九篇の說話を通覽するに、大部分は幽靈出現の說話であつて、その六篇までを數ふることが出來る。これを更に分類すれば、次の三樣式となる。

一、怨靈說話。　白峯、佛法僧、吉備津釜。
二、亡靈說話。　淺茅が宿、菊花の約。
三、精靈說話。　貧福論。

こゝに云ふ怨靈、亡靈の差別は靈異出現の動機に於て、一個人或は現世に對する怨恨の有無に從つて區分し、精靈とは單に無生物の靈の意に外ならない。しかしこれは餘りに漠然とした區劃法である。むしろ幽靈出現の徑路そのものから觀察する方が遙かに徹底したやり方であらう、然るときは色彩は自から二樣になる。

一、必然的出現。　淺茅が宿、菊花の約、吉備津釜。
二、偶然的出現。　白峯、佛法僧、貧福論。

必然的出現とは、亡靈出現の動機が說話中の主人公の從來の行爲と直接の因果關係を有する場合、換言すれば主人公の閱歷に據つて初めて亡靈を誘起し得る場合である。更に具體的に云へば、逢ふを待つ間に戀ひ死した淺茅が宿の宮木の幽魂は、その夫勝四郎に於てのみ意義があり、朧ろな

る黑影の中の赤穴の靈は菊花の約ある左門にして初めて首肯せられるのである。もしそれ吉備津釜の磯良の生靈が夜毎に募る凄じき叫聲に至つては、全世界を傾倒しても求むる所は、われに情なかりし正太郎あるのみである。即ち亡靈出現は主人公との牴觸が極めて密接であつて、必然に起り得べき性質を有してゐる。

これに反して白峯の西行も、佛法僧の夢然も、乃至は貧福論の左內も、靈異との交涉は偶發的の事件である。崇德院と西行との正史上の關係は暫く措く。「彼は西國の歌枕をさぐる途すがら「白峯と云ふ處にこそ新院の陵ありと聞きて拜みたてまつらばや」とて弔つたのである。而してあやなき闇の中から圓位々々と呼ぶ聲がする。見れば「形異る人の著たる衣の色紋も見えぬ」姿が目に入つた。西行は誰とも氣がつかぬ。しかも「嬉しくも詣でつるよ」との一言に、さてはと思つたのである。誠に意外と云はねばならぬ。故に、西行をこゝに點出する代りに、寂蓮としても、文覺としても、或は爲朝としても、幽靈出現の點から見れば何等の差別はないと思ふ。尤も史的人物と詩的聯想との關係から生ずる藝術的効果は別問題である」。貧福論の錢神の如きは必ずしも左內の枕上に立つには及ばない。「長咏にして飽かざる所謂當世の一奇士」ならば何人の夢を驚かすも妨げない筈である。佛法僧に至つては、更にその沒交涉の甚しいもので、夢然と秀次とは因果の糸に繫がるべき何物をも有してゐない。單に高野山と云ふ場所が結びつけただけである。吾人の偶然的と云ふのはこの意味に外ならぬ。

猶內容を檢すれば菊花の約には仇討物の系統が入つてゐるし、吉備津釜には宗教的緣起傳說に屬すべき祭式說話の御釜祓と、護符說話の禁忌とが含まれてゐる。護符禁厭の說話には成功する場合の高僧傳式と、不成功に終る九十九傳說式とがあるが、こゝでは後者の形式をとつて失敗に終つて居る。九十九とは不完全單位數で九仞の功を一簣に缺くと云ふ體裁である。この傳說は類例が多く失敗の動機としては鷄啼、妨碍等の外面的動因をとるが、吉備津釜では錯覺と云ふ內面的動因になつてゐるのは面白いと思ふ。

次に、夢應の鯉魚は夢遊と云ふことが骨子となつて、それに技藝傳說が加はつてゐる。夢裡に人間以外の動物に化する形式はプリミチーヴな想像で、莊周が胡蝶になつたのは有名なものである。他面から見れば、こゝには又、佛者傳說の一類型をなす蘇生說話と相通ずるものがある。それは人が一旦瞑目して地獄遍路をなした後、蘇へると云ふ形式である。而して魂が體を離れてゐる中は人間界とは絕緣せられて、しかも魂自身はそれと知らずに焦慮するのが、又この說話の重要事項である。されば興義が「こはいかにするぞ」と叫んだとて「佛弟子を害する法やある助けよ〳〵」と喚めいたとて、文四も餘手も知らぬ顏をしてゐたのである。「御伽婢子」に見える「鍛冶友勝遊行の事」も "Kwaidan"（怪談）の「秋の助の夢」もこの例である。最後に技術が入神の極、生を得ると云ふ形

式は技藝傳說の常套であつて、金岡の畫いた馬が夜な〳〵萩戸の萩を食つたとか、奉納の彩の繪がぬけ出して畑を荒したとか云ふ話は、說話としてかなり廣い範圍を占めてゐる。又末段に至つて「終焉に臨みて畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に放せば畫げる魚紙繭をはなれて水に遊戯す、こゝを以て興義の繪世に傳らず」と云ふが如く說明傳說式になつてゐるのも類型の多いゆきかたである。

蛇性の淫は明らかに怪婚說話に屬するものである。怪婚說話とは人間と人間以外の或者との婚交を說く、神婚說話の一變體である。人間の對象たるべきものが動物である時、特にかう呼ぶのである。而してこゝに現はれたものゝ如く、女の方が蛇性で、其舞臺が人間界である點は、日本神話に見える豐玉姫と彥火々出見命との傳說の範疇に入るべきものであらう。たとへ原話が支那小說にあるにしても、素材の點ではさう云へると思ふ。然しこの話は豐玉姫傳說を初め怪婚說話の恒例のやうに破誓と云ふことによつて、カタストロフに達するのでなく、その終局は高僧傳式の宗教的分子が加はつてゐる。かの鞍馬の僧が初め失敗して後、法海和尙が災を除いた如く、相對稱せしめて高僧の功德を一層顯著ならしめる形式も、この種の說話の慣用手段であらう。且前段に於て、長ちく蛇そのものが女身になつて居たのに、後段では富子の身に全くのり移つてゐる。これは日寄とか狐つきとか云ふ時代の迷信が映つてゐるのではあるまいか。

同じく高僧傳式のものに青頭巾があるが、これには僧侶の墮落說話が因果關係をなして反照を鮮明にしてゐる。「彼碧果に基て還化せしとならば、道に先達の師とも云ふべし、又活きてあるときはわがために一個の從弟なり」と云ふのがこの說話構成の目的である。故に快庵は「いづれ消息を見ずばあらじとて、復び」山に上つたのである。「終に曹洞の靈場を開き給ふ、今なほ御寺は尊く榮えてありけるとなり」と結んだのは、とりも直さず、この一篇の宗教的緣起說話として動かし難き證券と云はねばならぬ。

以上の如く雨月物語に現はれた說話を分析して見ると、その內容に於ても形式に於ても皆在來のものより多く踏出して居ない。否むしろ密接な交涉があるやうに思はれる。唯その賦彩の濃淡と、結構の單複とによつて生じ來る情趣に、異常の芳香が漂ふ計りである。しかも、今こゝに見るやうな類型的な題材を、如何に趣味ある表現をなし得たかは、後節に讓り、それに先立つて前代文學の中に、これの說話の先蹤を搜り索むる必要がある。

第二節　說話の先蹤

國民の有する傳說說話が長い年代の間に、彼我錯綜し影響して文學史上の一寶庫を作ることは、いづれの世、いづれの國にも存在することである。ケルト民族の浪漫的な戀物語は泰西文藝に幾多の名篇妙詩を與へ、ヘブライ傳說は近代藝術の豐富なる源泉となつた。又我が國文學から支那印度

の説話を拾ひ、明治文學の中に歐洲藝苑の種子を求めたなら、人はその數量の意外に多いのに驚くであらう。

かくの如く説話は時代と共に推移し發展するものである、唯詩人の才能に濾過せられて幾分その形を變ずるに過ぎぬ。雨月物語に現はれたる説話も程度の差こそあれ、それ〴〵所緣があるやうに思はれる。今一々に就て前代文學の中から、その先蹤を求めて符合類似の點を聊か指摘しようと思ふ。

一、白峯

先づ便宜上次の四項に分つて細説する。

(イ)、西行が崇德院の御陵を弔つて歌を奉るの史實は、山家集及び保元物語に見える、

○讃岐にまうでゝ松山と申す所に、院おはしましけむ、御跡たづねけれどもかたもなかりければ

松山の波にながれてこし舟のやがてむなしくなりにけるかな

松山の波のけしきは變らじをかたなく君はなりましにけり

しろ峯と申す所に御墓の侍りけるにまゐりて

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちは何にかはせむ(山家集、下、雜)

○仁安三年の冬の比、西行法師、諸國修行の次でに白峯の御墓に參りてつく〴〵と見參らせ昔の御事思ひ出し奉りかくぞ詠み侍りける

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ(保元物語、三、新院崩御の事)

而して撰集抄は西行の自叙體に假りて更に詳細に記述してゐる

過ぎにし仁安の頃、西國はる〴〵修行つかまつり侍りし次でに讃岐みを阪の林と云ふ所に暫らく住侍りき……新院の御墓所を拜み奉らむとて白峯と云ふところに尋ね參り侍りしに松の一村しげるほとりに、くぎぬきしまはしたり、是御墓にやと今更にかきくらされて、物も覺えず。まのあたり見奉りしことぞかし、清涼紫宸の間にやすみし玉ひて百官にいつかれさせ……今かゝるべしとはかけても思ひかけきや、他國邊土の山中のおどろの下に朽ち給ふべしとは……始あるものは終りありとは聞侍りしかども、未だかゝるためしをば承り侍らず、されば思をとどむまじきは此世なり、一天の君萬乘のあるじも、かのごとくの苦しみを離れまし〳〵侍らねば刹利を須陀もかはらず、宮も藁屋も共にはてしなきものなれば高位も願はしきにあらず、我等も彼國王ともなり給ひけむなれども隔生即忘して凡て覺え侍らず、唯行てとまり果つべき佛果圓滿の位のみぞ床しく侍る。とにもかくにも思ひつゞくるまゝに泪のもれいで侍りしかば

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ

と打眺められ侍りき(撰集抄)

（ロ）、新院が魔王になられたことに就ては

此君の怨念に依つて生きながら天狗にならせ給ひけるがその故にや中二年ありて……此亂（平治）は讃岐院未だ御在世の間にまのあたり御怨念のいたす所と人申しけり。（保元物語、三、新院崩御の事）

の文が見えて居るし、西行が御靈に逢ふの條は

急き候程に是ははや讃岐の國に著て候、人を待ち新院の御廟所、松山を尋ねばやと思ひ候……

……いかに西行、只今の詠歌の言葉肝に銘じて面白さよ、いて〳〵姿を現さんと、云ひもあへねば御廟、頻りに鳴動して玉體現れおはします、誠に妙なる玉體の〳〵、花の顏たをやかに、髮に雲井の都の空の、夜遊の舞樂は面白や……又古の都のうきことを思しめしいだし逆鱗の御姿、あたりを拂ておそろしや（謠曲松山天狗）

と云ふのがある。

（ハ）、新院が西行への御述懷は保元物語の文章そのまゝである。第三卷にある「新院御經沈めの事」を見れば著しくその類似が認められる。

（ニ）、末段の化鳥に關しては、松山天狗にさがみ坊の名が見える

そも〳〵これは白峯に住で年を經る、さがみ坊とはわが事なり。さても新院思はずも此松山に崩御なる、常々參內申しつゝ、御心を慰め申さんと諸天狗を引つれて、翼をならべ數々に〳〵此松山に從ひ奉る、げきしんの輩を悉く取挫け殺し會稽の耻をすゝがせ申すべし……

思ふに、これは保元物語卷一の、

つのふり、はやふさの社の前を過ぎて千卷のみの前に壇を立てゝ行ふ僧あり、相模阿闍梨勝尊とて三井寺の住侶なり……兵あまたより取り伏せてこれを縛め（新院御謀反露顯の事）

とあるのから出たのであらう。

これらを綜合して考ふるに、撰集抄とは結構上及文章上に類似があつて兩者の關係を否定するわけにはゆかないが、それ以上に保元物語とは各項に於て密接なる交渉がある。かた〳〵以て白峯の粉本は保元一卷が主、撰集抄が副と云はねばならぬ。かの源平盛衰記の一節は明らかに保元から來たものであるから云ふに及ばない。

二、菊花の約

この一篇の典據は、今明確に指摘し得ない。いはゞ近世日本の精華たる武士道を骨子としたゝけに此種の作は頗る多いと思ふ。たゞ雨月の特色として幽靈談が加はつて居る。類似の說話を求むるなら、都賀庭鐘の英草紙第二卷『豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話』がある。兼秋が讃岐の屏風が浦で計らずも逢つた横尾時陰と、音樂の上で無二の友となり再會を期したが、約を果さんがため

來て見ると時陰は既に此世の人でなかつたので琴を斷つたと云ふ話である。その再會を約するところが頗る「菊花の約」の左門と宗右衛門との盟契に似てゐる。――兼秋云ふ「賢弟又孝子なり、然らば明年それがし來つて賢弟を尋ぬべし」、時陰云ふ「賢兄明歲何の時來り給ふ、我れ道に出てゝ迎へ奉るべし、道の通路塞がりぬれば、書信の往來便あしゝ、今其期を聞かせ給へ」と云ふ。兼秋指を屈して「昨夜中秋十五夜、天明たれば十六日、我來るは必ず此中秋兩夜のうちに即ち此所に來るべし、もし時を違へなば人と云ふべからず」云々とあるがそれである。中心思想と云ひ語氣と云ひ、粉本の一端をこゝに置くのも強ちに附會の說ではあるまいと思ふ。（猶、兼秋の話は『今古奇觀』にある「愈伯牙摔琴謝知音」の飜案である。）

更に遡れば西鶴の武家義理物語の卷三、其二に當る『約束は雪の朝飯』の一條であらう。これは「都も浮世と見なして賀茂の山に隱れ」住む石川丈山の草の庵に、雪の朝を音訪れたは、その頃備前にあるべき筈の、小栗何がしと云ふ友であつた。「編笠ぬぎて互の無事を語合ひ暫くありて此度の寒空に何として上り給ふぞと云へば、そなたは忘れ給ふか霜月二十七日の一飯食べにまかりし。」それよ〳〵、冬の初め月下の緣に端居しての話のついでに、その日は「わが志の日なれば一飯必ず」と約したのであつた。「俄かに木葉燒きつけ。柚味噌ばかりの膳を出せば喰仕舞つて其箸も下に置きあへず又春までは備前に居て西行の眺め殘せし瀨戸の曙、唐琴の夕暮、晝寢も京よりは心よしとて取急ぎて下りぬ」と云ふ物語である。物堅い武家氣質、節義を重んする近世的情操、これが秋成の興味を引いたのであらう。

三、淺茅が宿

萬葉集十六の卷、有由緣歌の中に次のやうなのがある。

昔者有壯士、新成婚禮也、未經幾時、忽爲驛使、被遣遠境、公事有限、會期無日、於是娘子感慟悽愴沈臥疾疹、累年之後、壯士還來、覆命既了、乃詣相視、而娘子姿容、疲羸甚異、言語哽咽、于時壯士哀嘆流涙、裁歌口號、其歌一首

かくのみにありけるものを、ゐながはの、おきをながめてわがもへりける

娘子臥聞夫君之歌、從枕擧頭、應聲和歌一首

ぬばたまのくろかみぬれて、あわゆきの、ふるにやきます、こゝだこふれば

右の物語に、同じ卷に見ゆる眞間の手古奈の傳說を思合せたものらしい。それは淺茅が宿の後段に手古奈の事が老人の口を藉りて點出してあるし、主人公の名が眞間の勝四郎と云ふのも注意すべきである。

而して妻の靈に逢ふの條は今昔物語の『人妻死後木形値舊夫語』と殆んど軌を同じうしてる

……われ山なく本の妻を去りけり、京に返り上らんまゝに、やがて行て棲まんと思ひ取てけ

れば上るや遅きと妻をば家に遺て、男は旅装束ながら彼の本の妻の許に行きぬ。家の門は、開たれば這入つて見れば有し様にもなく、家も奇しく荒て人住たる氣色もなし、此を見るにいよいよ物哀れに心細きこと限りなし、九月中の十日計りのことなれば月も極めて明し、夜冷にて哀れに心苦しき程也、家の内に入りて見れば、居たりし處に妻獨居たり……長き世を終夜語らふ程に例より身に染む様に哀れに覺ゆ、かゝる程に曉になりぬれば共に寢入りぬ。夜の明けたらむを不知て寢たる程に夜も明けて日も出でにけり、夜前、人もなかりしかば蔀の本をば立て上をば下さゞりけるに日の爛々としてさし入りたるに、男打驚きて見れば搔抱て寢たる人は枯々として骨と皮ばかりなる死人なりけり。（今昔物語、二十七卷、二十四話）

この今昔物語の話は『法苑珠林』卷七十五「晉桓道愍話」から出て、『發心集』卷五に見える「亡妻現身夫の家に歸り來る事」と同様である。しかし夫が別れた妻の許に歸つて來るまでの事件、即ち留守中に戰亂が起つて交通が遮斷され、而してその間に妻が死ぬと云ふ一條は御伽婢子の『藤井清六、遊女宮木野を娶る事』と同様で、月暗らく星明らかな夜、あらはれた妻の靈の、ありし世の名の等しいことも注意せねばならぬ。此御伽婢子の話は『剪燈新話』卷三にある愛鄉傳の飜案であるが、恐らく雨月の作者は原本から着想したのではあるまい、この宮木野の小話と今昔物語のそれとを結合した上、更に聯想を萬葉に走せたものであらう。猶說話そのものゝ類似の點から云へば葦刈船（延寶三年刊、一無軒道冶編）の卷六にある女夫池の傳說が近い。

此池のこと、しかとしたる、證說たれ知れる人もなし。しかれども所の人々いひ傳へ侍るは、今はむかし、ある夫婦比翼の契りをなせしが、夫さある事ありて田舍わたらへをしけり。其時男の曰く年を三とせ待つべしやがて歸りこん、其過ぎ侍らば心にまかすべしとてまかんでにけり。まことに月日の行く事、誰とゞむべき關しなければ程なく三歲になりけれども出越男も來す、妻いよ〳〵思ひにあくがれ臥て思ひ、起ておもひ、思ひあまりて此池水に入りむなしくなりけり、聞人聲をのみ泪をおとさずと云ふことなし。後男夢にも知らず我が住家に立越來れば、もと住みし所とも見えず物かはりすざましく草のみたかく生ひ茂り荒れはてゝわが思ひし女もなし。あたりの人に問ひければ件の事なんと語りしまゝ、聞くよりもはや胸うち騷ぎすゞろに涙せきかねて終に此池頭に來り足ずりをして泣けども甲斐なし。今はあるべきにあらずとてむなしくなりげると也。いとあられならずや、さるによりて、今の世までも俗に傳へて女夫池と云ひけるとなり。（挿繪略す）

水もらぬ契の末はくひたけに思ひしづみし女夫池かな。（葦刈船）

源流をこゝに求むるは當らないが、浪華名所として秋成の心の一隅には潛在してゐたと思ふ。猶秋成の藤簍冊子の中に「見神崎遊女宮木野古墳」の長歌があるがこれは別に關係はない。

四、夢應の鯉魚

都の錦の御前伽婢子の中に『五條通りにて水無瀬文治と云へるもの死して魚に化せし事』と云ふのがある。この文治が興義に當り、隣家の福岡源内が檀家の平の助になつてゐる。その他の大筋も同様であるが、元來この説話は、林羅山の怪談全書（卷二に魚服と題するもので梗概譯である）にもあつて、支那小説『古今説海』第九卷に見える魚服記の飜案である。秋成の取材も彼にあらずしてむしろ直接原作に據りはしなかつただらうか。唯、時處人物の差違があるのみで全然飜譯した形跡がある。即ち乾元二年に涇州青城縣主薄に任ぜられた蔣偉と云ふ男が興義に相當し、平の助は鄭滂、十郎が雷濟、掃守が裴察と云ふ具合で、魚になる所や、漁夫に捕へられて來る場面は勿論の事、碁を圍み桃を食ふあたりまで少しも省筆を用ゐて居ない。今全文引用の煩を避けて、たゞその一節のみを抄錄する。

吾初疾困爲熱所逼殆不可堪、忽悶忘其疾惡熱、求凉策杖而行、不知其夢也、既出郭其心欣々然、若籠禽檻獸之得逸、莫我如也、漸入山、山行益悶、遂下遊于江畔、見江潭深靜、秋色可愛、輕漣不動、鏡函遠空、忽有思浴意、遂脱衣於岸、跳身便入、自幼狎水、成人以來、絶不復戲、遇此縱適實契宿心（魚服記）

これを以て夢應の鯉魚の「我此頃病にくるしみて堪へがたきあまり」以下敎行を對照せしめたならば兩者の關聯は瞭然たるものがあらう。

五、佛法僧

この説話の出典としては明和五年正月刊行で京の人臥仙子文坡の作、怪談とのゐ袋卷四に見える『伏見桃山亡靈の行列の事』を擧げる事ができよう。

明和二年の事なりき、彌生中比、山城の國伏見の桃山に花ざかりなりと、友とする人、一人二人ともなふて桃山にいたり、終日桃の花盛をめでゝ、宇治見臺に酒をくみ興に乘じて日の暮るゝを忘れ、京師の見物人らやう〳〵にかへりつくる時、さらばと立て京をさして歸る、いかゞしたりけむ道に踏迷ひて、あちこちかと徘徊する折柄、はるかのむかうより提灯たいまつ星の如くかゞやかし來るものあり定めて大名高家のいづくへぞ行給ふならんと、立とゞまり見ゐたるに程なく近ふるまゝ、前驅の武士きびしくいましめ、殿下のお通りぞ下にをれとばゝつてゆく、驚き平地にひざまづきぬ、程なく二行に列をたてゝしと〳〵とゆく、供奉の人々皆衣冠びゞしく、御輿のあとは烏帽子狩衣騎馬うち交りておびたゞし。夜の事なればわかちがたき事あるべきに、その顏ばせ衣紋まで悉くよく見えたり、輿の中なるは年の比はたちばかり、東帶にて手に丸き物を持て見入給ふ體なり。扨一時ばかりあつておさ人とおぼしき人乘物にて供人あまたの内一人の袖をひき、いかなる御方にて渡らせ給ふと尋ねければ豐臣秀次公にてましますと答へて皆々行過ぎぬ、三人は茫然と御跡を見やり立居たるに東の空しろ〳〵とあけたれば道あるまゝにたどりければ、佛國寺の前に出しと、その人

語りし。

かく素材たる亡靈が同一である事や、文章上でも前驅のあらはれるあたりの文趣の類似から見て、秋成がこの作にヒントを得た事は疑を容れない。雨月の執筆時期は明和五年の三月頃であるから、その間の消息も窺はれると思ふ。もしこのお袋にあるやうな風說が當時の巷談として流布してゐたならば秋成の人柄としての興味の程も思ひ合はされる。

しかし、かゝる說話の生れ來る暗示を考察に入れる時、御伽婢子を聯想せざるを得ないのである。卷五の『幽靈評諸將』の一文はそれである。(而してこの原話は剪燈新話卷四の『龍堂靈會錄』である)。その說話は甲州郡內の鶴瀨安左衛門と云ふ者が、永祿丙寅の年の盂蘭盆供の夜、惠林寺で物故した管の直江山城守、山本勘助、多田淡路守などの靈が盛んに戰國武士を品評するのを聞いて、不思議に思ふ折、貝太皷の音聞ゆると共に「座中の號心得たりと傍なる太刀かたな、をつとり〳〵走出ると見えて跡方もなく搔消え」、鶴瀨一人殘つたと云ふ物語である。佛法僧の一篇は大體の結構は似て居るがかの豐臣秀次の浪漫的な悲劇的最後を思合せて、更に空靈幻怪の域に進んで居る。纖細な事ではあるが御伽婢子の文中に諸將が宴席の賦詩と、佛法僧の夢然等の連俳との間も何等の緣が潛んで居はしないだらうか。しかしこの種の怨靈談は白峯と同型で謠曲に多く現はる所である。かの太平記第二十五卷の『宮方怨靈六本杉に會する事』なども同一系統のもので幾分の關係をさへ思はせる。

六、吉備津釜

この說話は吉備津の宮の釜鳴傳說から發足して居る。而して說話の中心たる怪異が、釜鳴の靈驗を證する道具に使はれてゐることは、表題に徵しても明らかである。この傳說は當時の民間信仰として有名なものであつたらしく、耳袋や神社考などに散見する所である。

磯良の窮鬼が正太郎を取り殺すと云ふ一篇の骨子は、大體に於て御伽婢子の「牡丹燈籠」の翻案であることは否まれない。但しこの小話が幽鬼と人間との契に興味を置いて居るに反して、吉備津釜は怨靈の悽愴を描寫するに全力を傾倒して居る。こゝに一言すべきは牡丹燈籠も亦剪燈新話にある牡丹燈記の翻案なる事で、御伽婢子以前にも奇異雜談集——文明年中、江州三雲庄の妙感寺に居た六角氏の家臣中村某の編纂——の中に牡丹燈記(女人死後、男を棺の內に引込殺す事)として譯されて居る。秋成はその孰れに刺戟せられたかは不明であるが、恐らくは他の說話との關係から見れば御伽婢子に據つたのであらう。

猶、嫉妬のために生靈になるとの思想は古く古昔物語の近江國女生靈來京殺人話(二十七卷、二十話)、人妻成惡靈除其害陰陽師語(二十四卷二十話)などに見え、下つては物語草子から謠曲に夥しい例を遺した最も有力な民間信仰の一說話である。

七、蛇性の淫

蛇性の淫は支那小說『西湖佳話』の一篇「雷峯怪蹟」の飜案である。『西湖佳話』は淸朝乾隆年間の作であるが作者は明らかでない。十六種の短篇小說集で、いづれも西湖を中心とする傳說奇談である。その中、名妓蘇小小の事を敍した「西冷韻蹟」とこの「雷峰怪蹟」とが双璧をなしてゐる。今、煩雜ではあるが、蛇性の淫との對比上、雷峯怪蹟の大筋だけを敍する。

杭州に許宣と云ふ若い男がゐた。まだ獨身で姉婿の家に寄寓してゐた。ある年の淸明の節に保叔塔寺に詣でたが俄雨に逢つたので知合の船に乘つて歸つた。その時恰度雨に困つてゐる一人の艶女とその婢を同船させてやつた。岸についてから互に心ならず別れたが、町の途中で再び會つた。許宣は親戚から借りて來た傘を又貸しに貸してやつた。それが緣になつて近くなり二三日して婚約するまでになつた。女は白娘子と云ふ富裕な若い未亡人で、結婚の費用として金包を彼に渡した。

ところが其金が邵太尉の庫金であつたので許宣は捕へられた。彼の辯明によつて役人は女の家を襲つた。しかし昨日に變る荒廢した邸のさまが許宣を驚かした。奥の離屋に花のやうに着飾つた女がゐるのを捕卒が捉へようとすると、百雷の一時に落ちかゝるやうな響がして、驚くひまに女は姿を消した。その牀の上には盜まれた金があつた。許宣の疑は晴れたが、罪はゆるされず蘇州に流された。姉婿の奔走で、蘇州ではその知人の王と云ふ男の許で暮す事ができた。半年ばかり經て突然白娘子が尋ねて來た。許宣は驚き立てたが、王夫婦が仲に入り女の辯解も尤もらしいので二人は遂に夫婦となつた。

それから半年を經た二月の頃、許宣は友人と臥佛寺に詣つたが、一人の道士から妖氣に惱まされてゐると喝破された。その時道士から護符を貰つて歸り、妻を遠けようとしたが、却つて妻に見露はされて翌日は妻に伴れられてその道士を尋ねた。その結果、道士は白娘子のために方術を破られ、はう〳〵の體で逃げて了つた。四月八日の佛生會に、許宣は妻から新しい衣服を着せられ珊瑚の玉のついた金扇を受けとつて、承天寺に出かけた。所が、群集の中から盜賊呼ばりされて、また府廳に引立てられた。然るに被害者の再度の屆出で、盜難品は皆外の場所にあつたとの事であり、衣服と金扇とは似よりの品もあるからとて彼は罪名を着ないですんだ。この騷ぎのうち、妻は婢と二人で、夫の歸りが遲いから迎ひに行くとて出たきり歸らなかつた。こんな事情で許宣は更に鎭江に移つた。その時、姉婿が公用で出張して來たので、鎭江では藥屋の李克用の許に行つて、店の手傳するやうに斡旋してくれた。

ある夕、許宣が町を歩いてゐると、二階の窓から物が落ちて來た、驚いて仰ぐと女の顏がちらと見えた。と門口から慌しく出て來たのが、白娘子であつた。彼は怒り罵つたが、女はあの二品が先夫の持物だつたからと、またうまく籠絡して同棲する事となつた。かくして李克用の誕生日には二

人でお祝に出かけた。李は色好みで、白娘子の美に迷ひ、彼女が厠に行くのを追ふたが、計らず白い大蛇を見て氣絕した。大騷ぎとなつたが、氣づいた李は、押し隱して何も云はなかつた。女は許宣に李の不理盡を話して、李から離れて店を出すやうに勸めた。

七月七日は龍王の日で、許宣は、金山寺へ詣らうと思つて妻を誘つたが同意しない。たゞ寺の方丈の方へ行くな、布施を取られるからと注意するのみであつた。彼は、あちこち歩いてゐるうちに說敎場へ來た。彼は方丈と氣づいたので急ぎ足で出た。和尙は早くも見てとつて、侍者に今の男には妖氣がある、すぐ伴れ來れと命じたが、許宣は山を下りかけてゐたので、和尙は禪杖を取るなり彼を追かけた。山の麓では急に風が吹き出して、舟に乘らうとする人は皆騷いでゐた。その荒浪を押し切つて一艘の小舟が近づいたが、そこには白娘子と婢とが乘つてゐた。許宣を迎ひに來たのである。そこへ和尙が飛んで來て、舟中を見るや杖ふりあげて大喝した。と二人の女はそのまゝ水中に飛込んで了つた。

許宣は、夢のさめたやうに茫然として佇んでゐた。この和尙は法海禪師とて大德であつた。彼はこれまでの經緯を禪師に物語つた。禪師は云つた。それは、宿緣であるが、もう災もあるまい、早く杭州に歸れ。もしまた事が起きたら湖南の淨慈寺に來るがよい。とて、更に次の偈を與へた。

本是妖蛇變婦人　西湖岸上賣嬌聲
汝因慾重遭他計　有難湖南見老僧

許宣は禪師に別れて李を尋ねた。李は厠で見た妖蛇の事を白狀した。それから十日計りすると恩赦の命に接したので彼は杭州へ急いで歸つて行つた。姉婿は彼に、これも獨り身でゐるからだとて婚姻をすゝめた。彼は、妻は持ちたくないと答へたが、その言葉が切れるか切れないかに表に聲があつて、妾と云ふ妻がありながら何を云ふのです、と入つて來たのは白娘子であつた。彼は驚きつゝも云ひ爭つた。而して姉婿を戸外に伴れ出した許宣は、彼女が妖蛇である事を告げ顚末を詳しく話した。姉婿は、蛇なら、白馬廟に蛇取の名人がゐると云つて、その男を招く事にした。蛇取の戴先生は、雄黃と藥水の瓶を持つて來たが白娘子の室をのぞくと同時に、尻居に仆れて逃げ出した。蛇なら捉へるがあれは妖怪だ、すんでに命を取られるところだつたとて這ふ〳〵逃げ歸つて了つた。すると室から白娘子が許宣を呼んだ。仕方なく彼は室に入つた。女は、薄情な仕うちをするなら杭州一城の禍にならうと彼を脅しつけた。彼は慄え上つたが、途上にくれて、淸波門の方へとぼ〳〵と歩いて行つた。ふと法海禪師の偈が心に浮んだ。そこで淨慈寺まで尋ねて行つたが、禪師は不在であつた。彼は思ひ迫つて湖水に身を投げようとして既に片足を橋桁にかけると、引止める者がある。それは禪師であつた。許宣からの話を聞いた禪師は、一つの鉢盂を與へ、これで女の頭を力任せに押へつけよ、わしはすぐ後から行くと云つた。彼は歸るとすぐ女の室に入つた。而して隙を見

て鉢で押へた。女の姿はだん〳〵小さくなつて、遂には鉢の中からしきりに哀を乞ふた。そこへ禪師が來た。口に何か唱へて鉢を開くと七八寸位の傀儡のやうなのがぐたりとしてゐる。禪師は、何故に人につき纏るのかと詰つた。すると、妾は西湖の蛇で青魚と一しよになつてゐたが、許宣を見てから心が動いてこんな事になつた。しかし人を傷つた事はないから助けて頂きたいと答へた。禪師は淫罪が尤も重い、千年の修業をしたら免されよう、とにかく正體をあらはせと云ふと、傀儡は白蛇となつた。その傍には青魚の姿も見えた。禪師は二つを瓶に入れて袈裟をもつて被ひ、雷峯寺に埋めて、上に一塔を立て、四句を偈をしるした。

雷峯塔倒　西湖水乾　江潮不起　白蛇出世

許宣は禪師の弟子となつて塔下に住んだが、後業が積んで病のないのに坐化したと云ふ。

以上の梗概によつて蛇性の淫を顧ると大體の筋書に相違はない。最初の雨やどりから傘を貸す段まで、原文は同船のよしみと街頭の傘を同じ材料の場面が二重になつて却つて煩雜に陷つてゐる。譯文での神實が、原文で現金になつてゐるのも支那臭がある。石榴市の再會と吉野の花見とは巧みに取扱はれ且漸層的に進展してゐるが、原文の蘇州の再會と臥佛寺の道士とは共に食ひ足りない感がある。道士が白娘子の幻術に敗をとるのは面白いが、佛生會で、また盜賊の嫌疑にかゝるのは蒸し返しでいかにも拙い行方である。鎭江の事件も、洞で既に白蛇の形相を見せたのはどんなものか。金山寺の段はいゝけれど。妖氣を見咎められるのが二度目、偈文も最後を加へて二度となるのは構成上巧緻とは云はれまい。また、婚姻の相談中に白娘子が入りこんで來るのも面妖であるし、戴先生の蛇取事件も滑稽味が足りない。法海禪師の態度はよしとしても金山寺で山から追ひ下るのはちと勇敢にすぎる。且、全篇としては事件が同程度の强さで推移するだけで、場面としての重心、各場面の均整を缺いてゐる。かう見て來ると凡て秋成の飜案の方が構想に於て、はるかに整齊であり、場面もそれ〴〵と核心があつて、しかも詩的昂揚が認められる。即ち飜案蛇性の淫にかなりの優越を感ずるのは、必ずしも「吾が佛尊し」の僻見でないと信ずる。

許宣此時看見這個光景。也驚得呆了。道。分明是這裡。隔兩三日。怎便如此荒凉。何立道。既是這裡。只得打開門進去。因叫地方動手。將門打開。一齊擁了入去。只見內中冷陰陰寒森森。並無一個人影。大家一層一層。直開了入去。并無一痕踪踪。直開到最後一層大樓上。遠遠望見一個如花似玉。穿白的婦人。坐在一帳床上。衆人看見不知是人是鬼。便都立住脚。獨何立是公差。只得高聲叫道。娘子想白氏了。府中韓太爺有牌票在此。要請你去。與許宣對苦麼銀子的公事。那婦人動也不動。聲也不做。何立沒奈何。只得大着膽子。擁衆上前。將走到面前。只聽得一聲響亮。就似青天一個霹靂。衆人都驚倒了。響定。再近床邊一看。只見明晃晃一推大銀子。却不見了婦人。及點點銀數。恰是正是四十九錠。

これを蛇性の淫に於ける熊野の荒邸の場と比較せよ。更に吉野の瀧宮の段を念頭に浮べて次の一節を讀め、

大和尙見叫他不着。便自提了禪杖趕將出來。趕到寺前。見衆人皆欲渡江。因風大。尙立在門外等待。忽見江心裡一隻小船。飛也似來得快。衆人都驚道。這些些小船怎麼不怕風。又來得快。此時許宣也立在衆人中。昂頭爭看。不期那來的小船。恰正是白娘子與青青。立在上面。許宣正吃驚。要問他來做甚麼。只見白娘子早遠遠叫道。丈夫。風大。我特來接你。可速速上船來。許宣聽了。一時沒主意。正要下船。不料大和尙。在後看得分明。大喝一聲道。孽畜。你到此做甚麼。正要擧杖打去。只見白娘子與青青。連船都翻下水底去了。

かくても、雨月の作家果して西湖佳話の筆者に一籌を輸するものであらうか。

以上によつて、出典と風趣とは、ほゞ說きつくされたと思ふが、秋成の腦裏には、猶、日本の古典に所緣するところが少なからず介在したに相違にない。その點に就て、やゝ冗長の感はあるが因に記述しておきたい。

此篇には數條の說話が絡み合つて、それを蛇の邪淫と云ふ思想が元締をなして居る。先づ發端には、「雨やどり」と「夢の契」と云ふ二個の說話が認められる。

室町季世の作と思はるゝものに、雨やどり（一名、時雨の緣）と云ふ小說がある。これは二條萬里小路に住む左大臣家の公達に中將さねあきらと云ふ人があつた。妹が病氣で淸水に參籠して居るのを訪ふ途すがら、時雨に逢つて雨宿りをして居る所へ、來合せた三條東洞院の中納言きんかねの娘に、傘をかしたのが緣となつて契を結ぶと云ふ物語で、同じ頃の小說今宵の少將の初めにも同巧異曲の場面がある。これと蛇性の淫の眞名子と豐雄との戀の序幕は餘程近い。

而して豐雄が女の面影忘れがたく、しばしまどろむ曉の夢に、現ならましかばと思ふ心に急ぎたてられて、朝餉も打忘れて浮れ出し、さて尋ねて行くと夢占がしつくり合つたと云ふ筋は、何となく御伽婢子の「夢の契りの事」を聯想させる。舟田左近と云ふ男が、ある酒家に立寄つたところ、そこに美しい娘が居て、互に憎からず思つたが、言葉を交す機會もなくわが宿に歸つて來た。しかもその夜娘の許に忍んでさま〳〵に語らひ明すと見て、燈火の色白き窓の下に夢はさめた。かくて夜毎の夢路の逢瀨は濃やかになつたがあまりに堪へがたく、左近、意を決してかの家を訪ねて見ると家のさまも調度も夢の中とつゆ違はず、娘も同じ果敢ない契に夜毎の物思まさつて打伏して居た。

さはれこの說話の中心思想は蛇の邪淫と云ふに在る。この考へは印度傳說に源を發し、日本靈異記や今昔物語、宇治拾遺などに佛者の傳說と混淆して多く現はれて居る。

女人大蛇所婚賴藥力得全命緣（靈異記、中、四十一話）

嫁蛇女醫師語（同上の說話、今昔物語二十四卷、九話）

蛇見女陰發欲出穴當刀死語（今昔物語、二十九卷、三十九話）
蛇見僧畫寢閑呑受淫死語（今昔物語、二十九卷、四十話）

等はこの思想を現はす甚しい例である。

かく蛇の特性と見られた邪淫や、執念や、女性との關係を骨子とする説話は、以上の諸書を初め、古今著所集以下夥しく作成せられ、後世の因果物語になると、この點が極端に誇張せられて數多の奇談異聞を醸すに立つた。

末段の高僧の法力に依つて解決せられる一條は、この説話には屬性と見るべきで紋切形に終つて居る、こゝには法海上人の靈驗となつて居るが、同じ人の同じ功驗談である閑田耕筆卷二の五條の上大黒町某家の話を引くまでもあるまい。原話の法海大和尚の名をそのまゝ持込んだのは明らかであるから。

八、青頭巾

全體の色彩が既に支那稗史から脱化したものゝ如く考へられるが、出典に就ては未考である。しかしこの一篇に漲る情調からは謡曲の氣分を閑却するわけにはゆかない。現世の妄執にかられて安心し得ないのが、高僧の供養によつて成佛すると云ふ説話は謡曲を一貫せる普通の形式である、この作の如きも、その骨子は墮落の極、迷執の闇に閉されし僧侶を大德が教化すると云ふのである。

その因として稚子物語が附髓して居る。此思想は遠く萬葉に認むる事が出來るが、文學としての一派を作つたのは、鎌倉時代の石清水物語から、室町期の秋夜長、松帆浦、鳥部山、嵯峨等の物語が現はれた頃である。特に近世の元祿前後は時代と反影して、所謂衆道に關する文學が多く見られる。しかし、青頭巾にあつては單に客體であつて、むしろ一角仙人（今昔物語五卷四話）久米仙人（同上十一卷二十四話）良賢（同上十三卷四話）の系統をひく。即ち愛欲のために身を誤つた清玄や鳴神上人等の部類に屬すべきである。

而して、愛人の屍に執着するのは條は、宇治拾遺物語に見える次の話と類似して居るものがある。

参河入道のいまだ俗にてありける折、もとの妻をば去りつゝ、若き容よき女に思ひつきて、それを妻にて三河へゐて下りける程に、その女久しく煩ひてよかりける容も衰へてうせにけるを、悲しさの餘りにとかくもせで、夜も晝も語らひ伏して口を吸ひたりけるに、あさましき香の口より出て來たりけるにぞ、疎む心出て來て泣く〳〵はふりける（宇治拾遺四、三河入道遁世世聞事）

又影の如き人のまれ〳〵に偈を誦して居たと云ふあたりは、僧侶が死後舌ばかり殘つて讀經したと云ふ佛者弘法傳説から示唆せられたのではあるまいか。この種のものも、靈異記、今昔物語、古今

著聞集に散見するところである。

更に快庵の一喝に青頭巾と骨とのみ殘つたと云ふ幻怪な大詰は次の小說と同巧異曲と稱するを妨げないと信ずる。

……坤の角に塚のありける、築地をつき出してその角はしたうづ形にぞありける、殿そこに堂たてむ、この塚とりすてゝ、その上に堂建てむと定められぬれば、人々も塚のためいみじう功德になりぬべき事なりと申しければ、塚を掘崩すに中に石の唐櫃あり、開けて見れば尼の年二十五六ばかりなる色美しくして唇の色などつゆ變らでえもいはず美しげなる寢入りたるやうにて臥しけり、いみじう美しき衣の金つき麗しくてするたりけり、入りたるもの何もかうばしき事類なし、あさましがりて人々たちこみて見る程に、乾の方より風ふきければいろ〳〵なる塵になりて失せにけり。（宇治拾遺、六、世尊寺に死人を掘出す事）

猶、手近に素材を求むるならば怪談とのゝ袋に見える「禪座を以て怪を伏す奥州の禪僧」と「魔佛を以て一如とす悟道の聖人、附廢りし寺をたてし僧の事」とを擧げねばなるまい。

九、貧福論

金錢を擬人化した文章は魯褒（字元道、南陽の人）の錢神論に見える、その畧に

親之如兄字曰孔方、失之則貧弱、得之富貴、無翼而飛、無足而走、解嚴毅之顏、開難發之口、錢多者處前、少者居後錢之所祐、吉無不利何必讀書、然後富貴云々

とある。秋成がこれに暗示せられたとも云へるが猶近く御伽婢子にその先蹤を求めることが出來る。「長良僧都、錢の精靈に逢ふ事」は即ちこれである。

……文明年中に長良の僧都昌快とて學行すぐれたる僧あり、世を厭ふて西院の里に引籠り草庵を結びて靜かに行はれしに、或日怪しき人尋ねて入來る。年五十餘、其姿甚だ世の常ならず頂圓くして下に角ある帽子をかづき、直衣の色淺黃にして其織りたる糸細く輕らに薄きこと蟬の翼に似たり、自ら秩父和通と名乘りて僧とさし向ひ坐してさま〳〵物語す、我はもとこれ武州秩父郡の者、中比都に上り、それより本朝諸國の內行かざる所もなく見ざる所もなしと云ふ、僧都心に思ひけるは、是れ眞の人にあらじと推量りながら、しば〳〵問答して時を移す……今日は日も暮方なりいとま申さんとて座をたちて出る。其行跡を認めて見れば庵の東二十間計りにして竹藪の前にて姿を見失へり、明日里人を賴みてこそこを掘らせらるゝに三尺計の下に一つの箱ありて其中に錢百文を得たり、その外に何もなし、僧都これをとりて見るに和銅古錢なり。（御伽婢子、卷五）

而して精靈の口から史上の未來記を語らしめる一段は白峯と同一筆法であるがこれは後世の作者が、ある時代の歷史物語を草する際、しば〳〵とつた慣用手段であつて、大鏡以下戰記物にも散見

する所である。

第三節　類型的說話の表現法と藝術的効果

かくの如く雨月物語の說話には類型的題材が多い。その最も密接なる關係に立つものは前節に明らかなる如く御伽婢子である。從つて支那小說の間接の影響を否定するわけにはゆかない。その上今昔物語を初め所謂日本傳說の大半は、印度支那の思想に胚胎したものであるから、雨月に現はれた說話の根抵には、廣漠たる傳說の原野を涵す、人間至情の泉が流れて居る。しかし、其の說話が類型的であり、普遍的であるがために、創作として雨月が鼎の輕重を問はれる謂はれない。

藝術に於ては、作家の內的準備と作品の酣醉狀態とが合致するときは、眞の創造過程の起るべき條件が成立するのである。この酣醉狀態――昂揚した意識狀態、――が、眞の創造の果實を結ぶには、先づ準備としての材料の蒐集がある。この材料がかの狀態の中に鋳かされて新しい構成物が出來るのである。この內的準備は藝術家の特徵を示すものとして酣醉狀態よりも遙かに重要である。無から有を作り出す事は出來ぬ、如何に天分の强い作家でも、必ず自然又は先人の作に與へられて居る形を利用して、それを新しい形に組み直さなければならない。凡て生產とは强く變化した再現である。雨月物語の說話も此意味に於て生產物である。一體、再生的想像と原造的想像との間には本質的區別はない、直線の兩端である、實際に於て原造的想像も常に大部分は純再生的であるし、又所謂再生的想像も常に幾分、原造的である。如何となれば、たとへ知らず識らずにしても幾分はその要素を變形するからである。

要するに文學上の價値は、一にその表現如何による。かの換骨奪胎と云ひ、樣に依つて胡盧を描くと云ふも、藝術的表現の巧拙を示す槪念的言辭に過ぎない。野史にあらはれたアムレート傳說が、沙翁の手に觸れて悲劇ハムレットなり、丁抹の民間傳說もギョーテの頭を通過すれば、譚詩「エルル、ケーニッヒ」となる。又マロリーの「アーサー物語」も、テニソンのアイディルスも、漱石の「薤露行」も、もとを訂せば皆ケルト民族の戀愛談から出て居る。われ〳〵はこの適例を最も手近に索め得る。白峯說話の發展即ち是れである。

この史實は、さきに述べたやうに、先づ保元物語等に見え、潤飾を加へては撰集抄にあらはれ、更に小說化せられて白峯となり、下つて馬琴の弓張月、露伴の二日物語に及んで居る。弓張月、二日物語に就ては後章に讓り、こゝには白峯以前の作と併せて考へることとする。而してこれらの同一取材の中、雨月の筆が最も詩韻に富んでゐるとは從來の定說であらう。しかも、その新彩として認むべきは、上皇の御靈のあらはれる一段である。かの松山天狗にあつては謠曲の形式に囚はれたあまり、「まことに妙なる玉體の花の顏たをやかに」と云ふやうな、優雅なリズムから生ずる氣分に

纏はれた結果、「逆鱗の姿あたりを拂つておそろしや」の句が、如何にも唐突に聞えて何等の悽味もない極めて平凡なものになつてゐる。これに反して白峯には、彼一句此一句、兩々相激して遂に「雅仁われにつらかりし程は終に報ゆべきぞ」の御聲が强烈に耳朶に響く。さればこそ劫風の音も鬼火の光も、さては炎を吐く魔王の姿も、明快な印象となつて殘るのである。この一篇の中心は上皇の怨念にあるから、それさへ描き出せば、作品の目的は遂げられたのである。末段化鳥を呼び來るあたりは小氣味のよい程、題材が活躍して同一說話の中、他の後蹤を免さない趣があると思ふ。

凄味、恐怖味に關しては猶吉備津釜の末段を思ひ起す、牡丹燈籠の結末が童話的に失して滑稽に感ぜられるに反して、これはまた句々悽愴の氣を含み正太郎ならずとも慄然として戰き、愴然として恐れずには居られない。誠に餘裕のない壓迫と押付けるやうな强味とを持つた、力の充實した描寫である。雨月の特徵はかう云ふ所にあるので、佛法僧も靑頭巾も決して從來の怨靈談や、功德譚に見えるやうな單純なる說敎的お伽噺式に滿足しては居ない。說話の裏には、靈界の何物かを暗示する黑い陰影が漂つてゐる。それには境地に適當した色彩を以て、讀者の心をば作者の中心思想に順應せしめるやうな背景を、鮮やかに磨き出して居る。從つて創作家の心持が明らさまに映つて來る。藝術としての價値はそこに存在するのである。

淺茅が宿の興味の依つて起る主因は、右の白峯や靑頭巾とは大に趣を異にしてゐる。題材が既にセンチメンタルなものである。心をそゝる感傷的情緒が、わけもなく讀者を作中にぐん〳〵引入れてゆく。これを今昔物語にある同樣の說話と相對して見ると、夫妻の間の絕えたる動機に就て大なる差異がある。一はわけもなく棄てた女が戀しくなつたのであるし、一は儘ならぬ世に距てられたのである。換言すれば今昔物語のはかゝる境遇を作り、淺茅が宿では境遇に役せられて居る。この點に於て後者は御伽婢子の「滑六、宮木野を娶る事」と同型に入るべきであらう。而してその文學的效果に至つては、人間の機微を細寫しようとする心理小說ならば兎も角、漠然たる概念を中心として說話の興味をつないで行く、この種の物語にあつては、淺茅が宿のゆき方がすぐれて居ると思ふ。且結末に及んで御伽婢子の如く童語の形式に墜せず、却て今昔の系統をうけて幻覺とも解釋せらるべき主觀的態度の描寫に出てたのは、この一篇の價値のある所である。勿論今昔にあつては骨と皮ばかりの死骸に添臥したとあるし、これには「臥したる妻はいづちゆきけん見えず」とある。この二樣の叙述から享ける感じは、決して同一とは云へぬ。こゝには些しも理智的要素の侵入はゆるされない、唯情緒の上の問題である。直接に神經をそゝればいゝ。だから、かう云ふ具體的な死骸——特に不快を催さしめるやうな屍——を點出して、藝術鑑賞に際し、神經の顫動から生ずる微妙なる情緒の快感を、横合から水を打撒いて阻礙するやうな叙述は、巧妙なる表現とは云はれない。荒れたる宿の曉の夢が、さむれば昔の床は蘚と化して、那須野紙の古びたるに、一首の和歌の染めて

あつたと云ふ、夢幻的色彩の濃厚なる一段は、眞にこの一篇の生命である。而して餘談としての眞間の手兒奈の傳說をば、一村翁をして物語らしめて居るのは、强ちに冗贅として排するにも及ぶまい。悲哀の人に向つて可笑しい話をしたとて、それで慰藉せらるべきものでなく、益々憂愁の度を高める計りである。却て同じ物悲しい話をしてこそ、その間に自ら油然なる感情の融合を見出して、甘い涙と化することが出來る。作者が有意的に筆を下したのか或は單に萬葉の聯想から漫然と附加したるものか分らないけれど、讀むわれにはこの感が深い。

夢應の鯉魚と貧福論とには何等の創意をも認め得ない。强て其感興を求むるならば前者に於ては主人公と作者との同化せる筆致、及び後者に於ては靈物の口をかりて戰國武士を批評する條にある。而して此批判は英草紙の影響があるらしく思はれるが、要するに秋成の雜駁な歷史觀の斷片に過ぎない。一體貧福論そのものが雜談的なもので、徒らに故事を引用して鬼面人を嚇かす底のものである。これに比ぶれば夢應の鯉魚は優れて居るが、たとへ原文通りに筆をつけたとは云へ、魚に化して見たる家のさまを重複したのは、未だ飜案として上乘のものではない。

更に菊花の約を見ると、これはまた極めて近世的のもので一篇を貫く潑剌たる士道に、死人が逢ひに來ると云ふ民間信仰を結びつけて居るが、かゝる巷談街說と時代精神の一面とを掬り合せて弛みを見せない所は、材料が平凡なるに拘らず充分の效果を收めたものと云はねばならぬ。これは題材を活用した例であるが蛇性の淫はこの點に於て失敗してゐる。

この篇は量に於て雨月第一の長編で內容から三段に區分せらるべき性質のものである。即ち第一段は熊野、第二段は大和、第三段はまた熊野に歸る。一體、蛇の執念を的確に描出するには幾多の場面が必要であらうけれど「地を劈くる計りの霹靂鳴響して」姿をかくした第一段末と、篠つく雨を殘して瀧壺に踊つた第二段の結びとは、要するに同一形式である。變らぬ靈劍の前に此の處、村主の邸跡、このところ芳野山の瀧と、立札をたてたのと同樣で甚だあつけない。又この三段が個々別別に獨立した小話として存在し得る程、規帳面に一段づゝ形つけられて居る。その結果單に主人公の名に依つて繫がれて居る感が深い。從つて斷片的連歌的である。第一段から第三段に結んでも、又、二三の場面を挿入しても差支へないやうである。唯執著と云ふ觀念を深刻ならしめんために第二段を增してやれと云つた樣子が見える。故に緊張した氣分がない、如何に場面を重ねても、あれでは嫌惡と困憊の氣分を助長するのみで、主要な色調はます〳〵黯ずんでゆくばかりである。されば その長は部分的興味にあつて、優秀の個所を隨所に散見する所以は、こゝにある。かく論じて、「雷峯怪蹟」を顧ると、如上の缺點はこの原話の方が遙かに甚しい。前章の「說話の先蹤」の項で述べた通り、彼れはいかにも煩雜で、重複もあり羅列的でもある。して見れば秋成はあの原話を、よくこれまでに取捨して纏め上げ、しかも十分に日本化し得たものだと云はねばならぬ。要するに獨

立した創作として蛇性の淫を評すれば上述の缺陷はあるが、飜案として見れば原作以上の出來榮であると云ふ結論に到達する。もしそれ飽滿を知らぬ蛇淫を中心としての、熾烈なる色彩と、靡爛せる官能の高き匂ひとに至つては、原話の色調を除外する事は出來ないが、かゝる説話に興味を覺えて採擇した動因には、時代は遊隋安逸の世、處は淫蕩なる上方の都市、作者も亦頽廢的耽溺にその半生を送つた人であると云ふ條項が顧みられるのである。」

飜て思ふに、藝術創作の心理は、作家の天分、學殖閲歴によつて多趣多樣に活動するものである。「心の現象は風に亂るゝ雪の花のやうに」、自由奔放であつて、規矩準繩によつて律することは出來ない。試みに聯想をとつて考へて見ても、吾人の心の閃めきは思ひもよらぬ邊に飛んでゆく。從つて批評は創作家の心的狀態に立入るのを免されない。表現せられたる作品そのものに直接にぶつかつて行くべきである。而して攫取し得たゞけが此方の解釋し得らるゝ範圍で、過不及のあるのは當然である。故に全解釋を下し得るには全く對象と同體にならねばならぬ。作者と同心にならねばならぬ。けれどそれが果して可能であらうか、即眞は作者自身でなければ分らないと云ふことになる。ある藝術品になると作家自らが既にわからぬそうである。かうなればいよ〳〵他人に分らう筈がない。吾々は自己の心象に映つたゞけで、いやでも滿足せねばならぬ。

さきに類型的題材と呼んだのも、此種の文學が面數的に一通の分量をなして、吾々の眼に觸れて居たから、假りに名づけたのに過ぎない。秋成が果してわが想像通りな暗示を得て、雨月物語に表現したやうな説話を作つたかと云ふに、それは斷言は出來ぬ。唯そうらしいのである、しかしこのらしいの裏にはある程度までの論證がある。單にそれだけである、又、それ以上に進むわけにはゆかない。吾々はこの幾多の類似ある説話が、この作品に於てどれだけ藝術的に取扱はれたかを考察すればよいのである。

第三章　雨月物語に現はれたる超自然

第一節　各説話にあらはれたる幽靈怪異

人間の世に何等かの執着を殘して、靈のみ假の姿を現世に再現する所謂幽靈が、文學的內容としての價値はこれを後節に讓る。さきに雨月物語の説話を構成する中軸が妖怪變化にあることを述べた時、私はその出現の動機及び形式に就て云爲するところがあつた。こゝにはその表現と傳統とを明かにして更に超自然分子の藝術的價値に及ばうと思ふ。

一、「白峯」の崇德上皇。超人間的の偉力を以て、現實の蹉跌から起る精神上の不滿を、破壞的行爲によつて償はんとするのが、この怨靈の存在の意義である。上皇自らの言に從へば、先づ平治の

亂を起して仇敵を殲し、更に「應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通に祟つに」のである。それより後の世の亂れも猶噴火盡きざる結果であると云ふ。而して白峯の夜色の中に現はれた姿は蓬髪朱顔、つり上りし眼眸に、手足の爪は獸の如く延びて居た。その所業、行動、容姿はさながらの魔王であつた。怨念のために魔界に墮した話は頗る多い。佛教思想に浸潤した平安朝以降、文學に現はれたこの種の說話は縷指に堪へぬ程で、謠曲には天狗物と云ふ一範類を形成して居る。既に天狗魔王である以上は人間とはかけ離れたものでなくてはならぬ。故に西行と語るや、一堂に膝を交ふるのでなく、深山の夜を背景として中有に浮ぶが如く、膝より下は一團の陰火に包まれて居る。かくの如き現實と沒交渉の姿態にありながら、その情緒は悉く現世のものである。喜怒哀樂につれて變ずる聲音は悉く人間のものである。從つて言論動作は模糊たる一點の影もなく、明快に確實に表現せられて居る。吾々はこの幽靈に對して客觀的存在の强味を否認するわけにはゆかない。然しその出現するや眠るともなき西行の耳を驚かし、その去るや、薄れゆく鬼火と共にかき消すごとく、そゞろに對者をして夢路に休らうが如く感ぜしめる。この夢幻的な場面が幾分か西行の主觀に映じたものと考へられる。しかし幽靈から享ける印象を數量的に比較すれば、主觀的存在を主張するはあまりに客觀性が顯著である。

二、「菊花の約」の赤穴宗右工門。約を果さんがために双に伏して、魂のみ遙かに來た赤穴宗右衛門の靈は、夢幻的色彩を以て貫かれて居る。落ちゆく月の影うすき夜半、彼は風のまに〳〵朧々としてあらはれたのであつた。悄然たる影の如き彼は、長い沈默の下に漸く事情を語り出でた。さうして座を立つと見せて消え失せてしまつた。人が瞑目すると同時に、生前最も親炙した人の許に音訪れると云ふことは、今日猶しば〳〵耳にするところである。しかも、現代の日本文學に於ても、それ〳〵表現の方法と目的とは異るにせよ、漱石の琴のそら音、藤村の破戒等にはエピソードとして用ゐられてゐる。吾々はこれが如何なる科學的立論の下に解釋せらるべきか知らぬ。要はその作中にあつて、文學的內容としての存在の意義があればよい。一體、菊花の約の幽靈は甚だ現實的である。幽靈らしからぬ幽靈である、從つて現世の人でないと知つた時遽然として襲ふ驚異と悽味とが强烈でなければならぬ。然るに事實、左門の驚愕の火なるにも拘らず、吾々にはそれが却つて大袈裟に感ぜられる。これは「下物を列ねてすゝむるに赤穴袖をもて面を掩ひその臭を嫌くる」が如き夢幻的な小細工が著しく禍して、そこに密接な情緒の共鳴を見出し得ないからだらうと思ふ。小泉八雲はこのあたりを評して"Akanaa did not touch the food or the wine, but remained and silent for a short time." (Lafcadio Hearn : A Japanese Micellany)と、あつさり叙述して居る。

三、「淺茅が宿」の宮木。「いといたう黑く垢つきて眼は落ち入りたるやうに結びたる髮も背にかへりて故の人とも思はれぬ」彼女が、夫を見てさめ〳〵と泣き濡るゝ姿は、近世文學に現はれたる、

物怖ろしげな、不具的な、一見不快感を催さしめる數多の幽靈の中にあつて、稀に見る優にやさしい幽靈の一つである。この種の美的幽靈は謠曲に多く見うけられる。夢にたつ面影が、こゝでは具體的に幽靈となつて現はれるので、二人靜や松風は、その最も美しいものであらう、雨月と密接な關係のある御伽婢子に現はれた「戀の女」の幽靈も極めて美しい。彼等は年若くして死んでから、ありし世の艶姿をそのまゝに戀人に通ふ。これには多少童話的の色調があるが、浪漫的風趣の儚かな美しい說話と云はねばならぬ。宮木の靈もこの美しい幽靈の一團に總括せらるべき性質のものである。彼の女の楚々たる風丰は憔悴して又當年の影面を止めなかつたとは云へ、その衰殘の姿の中に、却つて可憐な容姿があつたに違ひない。それは夫の勝四郎もその幽靈なるを悟らなかつた位である。而してこの靈は黎明の霍の床に落ち散る一片の骨をも殘さなかつた。之がまた〳〵美しく感ぜられるのである。肉身は朽ち果てゝも若き世の戀のみは永遠に生きると、强ちに解釋しなくとも、唯、美は道德的觀念や宗教的信仰が變化しても人間の情感の上に不滅の生命があるものと云へばよい。

四、「夢應の鯉魚」の興趣。怪談としての悽みも冷たさも、此篇に於ては感ぜられない。篇中の人物には驚嘆があるが、讀者には輕快と微笑とを持來たす。それは興義が魚の動作をしながら少しも人間の心持を失はない所に矛盾があるからである。不思議な話と云へばそれまでゝあるが、しかし此矛盾が此說話の中心興味を成してゐるのは注意すべきことゝ思ふ。

五、「佛法僧」の秀次等。この篇に現はれた超自然は「白峯」の上皇と同じく天狗魔王の部に入るべきもので、謠曲の修羅物の系統を、そのまゝ踏襲した幽靈である。從つて謠曲の幽靈能の冒頭に於けるが如くその談話も擧動も何等超人間的の趣を啓示しない。全く現世の人間である。唯吾々が歷史上の智識に訴へた時、初めて陰森たる背景とぴつたり合致して、物凄さがぞつと襟元に泌みこむのである。恐る〳〵差し出す夢然の、「鳥の音も秘密の山の茂りかな」の句を見た彼等は、依然として人間の態度を失はず、「芥子たき明す短夜の牀」と末句をつけて笑ひ興じて居る。しかも修羅の時にやと立騷ぐに及んで靈は全く大地を離れた。こゝに初めて超自然らしい行動をとるのである。しかし謠曲の常套の如く「かき消す如く」失せたのではなく、最もよく活躍して「遠く雲井に行く」聲には、十分の悽愴と畏懼とが見える。

六、「吉備津釜」の磯良。これは德川文學に現はるゝ類型的幽靈——四谷怪談のお岩、皿屋敷のお菊、解脫物語の累など——の一である。而して此篇に於ては生靈、死靈の二方面になつて現はれて居る。磯良の生靈は多くの物語に表現せられたのと同じく、戀敵の女の上に取りついた。しかも源氏物語の夕顏の卷に於ける廢院の物凄き一夜の如く、枕上に立つ女の幻影は描かれなかつた。從つて鬼氣人に迫るの趣はなく、超自然分子そのものゝ齎らす感じから云つても大に物足りない。

死靈としての場面には二つある。前段は「顏の色、青ざめて、たゆき眼すさまじく我をさしたる手の青く細りたる、」恐ろしさに、所謂怨靈としての條件を具して現はれる。これは彦六の口をかりて「心の臆れたる時は必ず迷はしの神の魔ふものぞ」と云はしめて居るやうに、正太郎の幻覺、即ち彼の主觀に存在するものである。それにしては周圍があまりに明彩に描寫せられて居る。殊にその背景の精緻なる寫實的筆致は遂に外形と內容との不調和を來した。これに反して後段は、夜の世界を描出して、黑い夜を貫く聲のみを描いた。これがために寫し盡さゞる闇の奧に、底しれぬ恐怖と悽氣とが潛む。されば嗔恚の炎に燃ゆる怨女の形相は却つて讀者の心象に烙印を押しつけるのである。死靈を描いて眞に入神の妙があると云はねばならぬ。雨月に現はれた幽靈の中最も印象の深く鮮やかなのもこれがためである。

七、「蛇性の淫」の眞女子。蛇が女身に化した變化物の一である。彼女がその蛇體を現はしたのは鞍馬の法師に對した時、結末の法海和尙の袈裟に押伏せられた時のみである。怪異なる現象の下に逃れ去る時ですら、その正體を示さなかつた。それだけ眞名子は女らしく、否、人らしく描かれた。而して彼女の動作は、全然、戀に惑亂せる媚態である。熊野の荒邸で、一旦化性のものとの疑念を抱いた讀者は、豐雄と共に芳野の老翁の言によつて始めて蛇なることを知るのである。こゝに於て豐雄は愕然として色を失ひ、讀者は、――この變化の間には不自然な溝渠があるに拘らず――蛇と女と云ふ國民說話の因襲的思想の下に融化せられて、その心持になり、强ひて排斥しやうとも思はぬのである。

女性と蛇とに關しては猶數言を要する。この兩者を對稱して見るに、凡ての民族信仰を通じてその間に何等かの共通點を肯定して居るやうである。印度のトワシトリの神は「蛇のぬたくりと、野薔薇の美しさと、兎の物怖ぢと、秋霧の朝じめりと、燕の喉の和毛の柔らかさと鳩の呟き」などを以て「女」を作つたと云ふが如き、心的現象から觀た執念とか、感覺上の冷たさとか、或はワイニンゲルの云つたやうに、女は性以外に無意義であるとか、それら、くさ〳〵の思想が根柢に流れて居るのであらう。特に佛敎の影響の上に薰育せられた日本の民間にあつては、女は生れながらに罪業の深いものと定められ、從つて弘法の方便として蛇と女はよく結びつけられた。今昔物語の、女死受蛇身聞說法華得脫話（十三卷、四十三話）、女依法華力轉蛇身生天語（十四卷、四話）、の如きはその一例である。この種の說話は平安朝から鎌倉以降へかけて近世に及ぶまで、その例證を擧げたならば、蓋し夥しい數に上るであらう。中にも道成寺傳說の如きは最も發達した系統を有する者である。今昔物語の、紀伊道成寺僧寫法華經救蛇語（十四卷、三話）、の說話は、日本法華驗記に現れ、元亨釋書十九卷に見え、下つては謠曲道成寺、（道成寺、現在道成寺、日高川の三曲）となり、安珍清姬の巷說と結んで歌舞伎淨瑠璃に幾多の作を殘し、更に歌謠に入つて、京鹿子娘道成寺は各種の

唄物を作り「鐘に恨は數々ござる」の調をなすに至つた。かくの如き思想の流布は蛇と女とをして益接近せしめた。吾々が「蛇性の淫」に於て當然不自然なるべき結構を、平然として、むしろ興味を以て迎ふるのは全くこの慣習のためである。從つて奇怪極まる題材も小說として成立し得る——嚴密に云へば成立させてこれを許認し得るのである。

八、「青頭巾」の庵主。人が鬼になる。これは勿論不可思議である。しかし、鬼の字義は時代によつて、變遷してゐるから「鬼」の概念は非常に複雜な內容を有してゐる。この篇にあらはれた鬼は人の生肉を食ふにある。異事ではあるが、旣に病的現象である以上、超自然として取扱ふに及ばない。唯青頭巾の超自然はその末段にある。之は如何にも現實とかけ離れた世界と云はねばならぬ。幽靈でない。妖怪でない、變化では勿論ない。正しく人である。影のやうな人の聲ばかりが活きてゐるのである。しかも禪杖の下に青頭巾と骨ばかりが殘つた。かゝる怪異は荒誕である、無稽である。吾々の理性は鼻で笑はうとする。情緖は心臟を逆に躍つて快を叫ぶ。この行違つた心持を抱きながら、しかも猶こゝに多大の感興を惹起するのは、此超自然の奧に橫はる宗敎的信念及び巧妙なる描寫より生ずる力と美とに、吾々の理性が全く屈伏せられるからではあるまいか。

九、貧福論の黃金精。山には山の精がある。河には河の主が居る。無生物の精靈と云ふ觀念も東西に行渡つた廣いものである。まして夜半の寢覺の枕上に立つた黃金の精は、大黑樣のやうな風體をしてにこ〳〵して御座る。夢と云へばそれまでゞある、如何に理窟ぽい爺さんであつたにせよ。とりたてゝ云ふ程のものでない。

吾々はかくて一通り初めから辿つて來た。雨月物語の怪異は大體に於て、幽靈と變化との二種を含んでゐる。その描寫叙述にはそれ〴〵の特色がある。而してその文學的內容としての價値はどうであらうか。これまでその都度見當はつけて來たものゝ甚だ不十分であつた。これに確然たる斷案を下すには、先づ直接超自然分子の價値を定めてゆかねばならぬ。

第二節　超自然分子の藝術的價値と雨月物語

「現世の生活から離脫し去つた魂が、過去の業因に繫がれて、一念なほ幽明の境を彷徨し、ありし世のまゝなる姿を現出する。しかも眼これを視て、手これに觸れることができない。影消え幻失せては模捉するに苦しむ。世俗に云ふ幽靈とは卽ち是れである。

幽靈の有無は暫くこれを措く。かゝる超自然分子が一般に强烈なる情緖を惹起し得ることは、現代文學の內容として優に存在するのを見ても明白なる事實である。然し智的判斷によれば是等の現象の或るものは全然不合理である。しかも智的判斷は必ずしも情緖よりくる感興と平衡し得るものでない。人間の意識は複雜である。冷靜なる判斷より何者も腦裡に容れ難いと思ふのは理窟一遍に

活きよと云ふに等しい。合理的現象の外は文學的內容たる能はずと斷ずるのは、根本的に文學を解せぬものゝ囈言と云はねばならぬ。

思ふに文學上の價値は合理不合理の問題によつて決すべきでなく、むしろ其情緒を喚起すべき事物、若くは境遇を捕捉し得るか得ないかにある。合理なるがために感興が湧く、感興が湧くから文學的內容としての價値があると云ふのはいゝ。けれど不合理であるから感興が起らないとは云へないだらう。猶一歩進んで感興はあるが不合理であるから開明の今日、文學の要素たる資格がないと云ふならば、それは科學と文學とを混用したる癡者である。開明の今日とは、よく妖怪を排斥する時に用らるゝ言葉である。これはとりも直さず科學的智識の流布せる時代との意に外ならない。勿論汽車が走る、飛行機が飛ぶ、いかにものべつに化物の跳梁した江戸時代とは大分調子が違つて居る。しかし、それら科學の發達のために。どれだけの幽靈が退治せられたのであらう。畢竟するに人間の智識と云ふものは「われら今は知らず、未來も亦知らざるべし」ではあるまいか、强ちに幽靈とは限らない。萬有の奥に伏在せる神秘は否定すべからざるものと思ふ。科學萬能の夢のさめやらぬ頃は、一切の事、凡て解釋し得むとの意氣込であつた。しかし、いくら科學が萬能でも宇宙の第一義はとてもわかるものでないと云ふ科學に對する愛想づかしの聲が、そこゝに聞え出した。デユボア・レーモンは「認識の限界」、「世界七不思議」に於て科學研究の際限を說いた。即ち運動の起

欠

菊花の約、淺茅が宿、及び吉備津釜の三篇にすぎぬ。これとても全編客觀の影を除去するわけにはいかないのである。白峯や佛法僧から起る興味は、むしろその背景にある。これ等は見樣によつては主觀的の幻影とも云ひ得よう。神韻縹渺たる青頭巾の捕捉し難き奇怪も、この部類に屬すべきものである。夢應の鯉魚は夢裡と云ふ幻境を中心としてゐるが、その表現は主客觀のどちらつかずに終つて、興味索然たるを免れない。蛇性の淫に至つては、客觀的描寫を以て終始してゐる。從つてあまりに思はせぶりな姿態を示してゐる。雨月の中、第一の長篇なるに拘らず、怪異の印象は極めて皮相である。最後の貧福論はまづ純然たる主觀的の靈、夢想の怪と云つて差支ない。これは題材と中心思想とが文藝的感興に緣遠いものであつたゝめに、折角の表現も力ある効果を成さなかつた。

かくの如く觀て來ると、超自然分子の表現が主觀たり、客觀たるに從つて、文學的効果に著しい影響を與ふる事は的確であるが、これに伴ふ他の要素の組合せが又大なる因果的關係を有するのを度外することは出來ない。しかし、唯この超自然が藝術的內容たり得るの點に於て、吾々は窈冥牛蛇の話も怪癖鬼神の談も、たとへ、自然の法則に乘離し、物界の原理に背馳し、若くは現代科學上の智識によつて闡明し難き事物たりとも、東西文藝の資料として恰好のものたるを論斷して憚らないものである。

欠

、第三節　超自然の背景としての自然描寫

全篇の骨子を怪異に求めた雨月物語が、超自然分子に豐富なるは怪しむにたらず、自然に深い愛着を持つ國民の手に成つた作品が、材を花鳥風月に仰ぐのももとよりそのところである。然らば作家はこの二者を如何に結合してどれだけの効果を收めたであらう。

雨、月を通覽するに、その自然の愛は近代人のそれの如く、自然の核心に突入つて明晰なる了解と客觀的考察を經た結果ではなくして、甚だ朦朧糢糊として居る。自然を觀察するけれども其眞相を攫取しようとはせぬ。唯實在の根柢にあるものを、霧に包まれた山河の姿を模索するやうに、感得し豫想しようとするばかりである。故に彼秋成の自然觀は智慧や論理や信仰を離れたものである。具體的の形もない不可思議なものである。これはわが古典文學に共通の言葉であつて秋成一人の自然觀のみに限らないけれど、かゝる感想の上に立つ作品がたゞ漫然と幽玄神秘などゝ云ふ主觀的說明の文字を以て蔽はるゝのは此所以に外ならぬ。

かくの如き自然觀照の態度は、凡て明確輕快なる眞畫の光を避けて、夜の寂寥に走らしめた。凡庸なる畫の勞苦と醜惡とが、闇黑の幕に閉ぢられたとき、この感想は生き返つて、人生の秘密をおぼろげながら認識して、萬有の精髓に牴觸しようと試みた。又たとへ、それが日影のさすところにあつたとしても、陰鬱な荒廢した氣分が漲つてゐなければならぬ。されば雨、月の作者は先づ夜を描いた。而して夢のやうな月光を描いた。

日は沒りし程に山深き夜のさま常ならで石の牀、木葉の衾いと寒く神淸み骨冷えて物とはなしに凄まじきこゝちせらる。月は出でしかど茂きが林は影を洩らさねば。あやなき闇にうらぶれて眠るともなきに、まさしく圓位圓位と呼ぶ聲す。（白峯）

怨靈はかゝる背景の下に出現したのであつた。陰森たる夜氣に包まれたる自然現象と幽界との交渉が一種悽愴たる情調の下に離るべからざるものがあるのは、吾々の感情の否定し得ざるところである。

銀河の影、きえ〳〵に氷輪われのみ照して淋しきに、軒守る犬吠ゆゐ聲すみわたり浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり、月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉ぢて入らんとするにたゞ見るおぼろなる黑影の中に人ありて、風のまにまに來るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。（菊花の約）

月夜こそ不可思議の極みである。天地山川を一抹の青白き光の中に熔かしこんで紗を放きたるが如く、わだつみの底の如く、凡てを縹渺たらしめ恍惚たらしめる。月光は正しく現實界を消滅した後の世の、魔力ある光である。自然の永しへなる、秘密の呟きである。

みる〳〵日は入り果て背闇の夜のいと暗きに燈をかゝげざれば、まのあたりさへわかぬに只谷水の音ぞ聞

ゆ。あるじの僧も亦眠藏に入て寉なし。夜更けて月の夜とあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬくまもなし。（青頭巾）

あなやと叫ぶ靡耳を貫ぬきて思はず尻居に座す。こは正太郎の身の上にこそと斧引提げて大路に出づれば明けたると云ひし夜はいまだ暗く、月は中空ながら影朧々として風冷やかに、さて正太郎は戸を放ちて人は見えず。（吉備津釜）

夜蔭に次で幽暗の氣分の横溢するは荒廢せる景狀である。

前栽廣く造りなしたり。池は水あせて水草も皆枯れ、野良藪生ひかたぶきたる中に大きなる松、吹き倒れたるぞ物すさまじき。客殿の格子戸を開けば腥き風さと吹き送り來る。（蛇性の淫）

廢園のうら寂しさと物凄さの中には人力以上の何上の何者かゞ潜むのを覺えしめる。而して靈異と自然とを綯合せて、弛緩の跡がない。滿目蕭條たる風趣はこの短い行文の間によく現はれてゐる。

次の一節に至つては更にこの氣韻の躍動せるものである。

寺に入りて見れば荻尾花のたけも高く生茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに三の徑さへわからざる中に堂閣の左右に頽れ、方丈庫裏にめぐりたる廊も朽目に雨をふくみて苔むしぬ。さてかの僧を座せしめたる簀子のほとりを求むるに、影のやうなる人の僧俗ともわかぬまでに髭髪もみだれしに、葎むすぼふれ尾花おしなみたる中に蚊の鳴くばかり細き聲して物さも聞えぬやうに、まれ〳〵唱ふるを聞けば『江月照松風吹、永夜清宵何所爲』。禪師見たまひて、やがて禪杖をとりなほし作麼生何所爲ぞと一喝して、かれの頭を擊給へば忽ち、氷の朝日にあふが如く消え失せてかの青頭巾のみぞ草葉にとゞまりける。（青頭巾）

思ふに荒廢せる景趣が超自然の氣分を助長するのは、その均齊を缺き調整を失つた境地、即ち完全ならざる狀態から生ずる聯想的結合の感じに依るのである。故に家にあつては朽頽してゐる、野山は荒れ果てゝゐる。水は必ず銹び澱んでゐる。而して怪物と云へば三つ目であり一本脚である。凡てが完全の域に遠ざかつたもの計りである。要するに常規に外れた異樣なものが情緒を憾かし易いからである。

荒廢と夜とを結合したのに次のやうなのがある。

此時、日ははや西に沈みて、雨雲おちかゝるばかりに閉けれど舊しく住みなれし里なれば迷うべうもあらじと夏野わけゆくにいにしへの繼橋も川瀬に落ちたれば、げに駒の足音もせぬに田畑は荒たきまゝにすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居もなし……こゝ二十歩ばかりを去りて雷に摧かれし松の聳えて立てるが雲間の星の光に見えたるを、げに我軒の標こそ見えたれと先づ嬉しき心地して歩むに家はもとに變らでありゝ人住むと見えて古戸の間より燈火の影もれ（淺茅が宿）

小暗き林の裏にいさき草の屋あり。竹の扉のわびしきに七日あまりの月あかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。ほそき燈火の光、窓の紙をもりてうらさみし。こゝに待たせ給へと内に入りぬ。苔むしたる古井の下に立て見入るに唐紙すこし開けたる間より火影ふきあふちて、黑棚のきらめきたるもゆかしく見

ゆ。（吉備津釜）

共に荒れたる宿に亡き妻の靈に逢ふ一段である。一體の氣圍氣の齎らす色調が、相似てるやうではあるが、仔細に檢すると甚しい距離がある。一は大詰であり、他は挿話であると云ふ說話構成上の問題は別として、これを包む夜の色彩や、配合せられた自然現象や、說話としてこゝまで來る情感の調子などが、合致して與へる結果は決して同一とは云へない。而してこの夜の帳を引剝ぐると後には廢頽せる景色のみが殘るのである。

五更の空明けゆく頃、現なき心にも、すゞろに寒かりければ、衾被んとさぐる手に何物にや簌々と雪するに目さめぬ。面にひや〳〵と物のこぼるゝは雨や漏りぬるかと見れば、屋根の風にふきまくられてあれば、有明の月白みて殘りたるも見ゆ。家には扉もあるやなし、蓑垣朽頽たる間より荻薄たかく生出で朝霧うちこぼるゝに袖濕てしぼる計りなり。壁には蔦葛延びかゝり庭は蓬に埋もれて秋なられども野らなる宿なりけり。（淺茅が宿）

家と見しはもとありし荒野の三昧堂にて黑き佛のみ立たせます。里遠き犬の聲ゐ力に家に走り歸り（吉備津釜）

こゝに至て類型的な場面を用ゐながら、依て生ずる氣分の差異はます〳〵甚しい。これは又以て凡庸ならぬ才能あるを示すものであらう。

かくの如く荒野を描き、夜陰を描き、月を描き、霧を描いた作家は、又風雨を描いて天變地妖の色彩を强烈たらしめた。

松吹く風、物を儚すが如く、雨さへふりて、常ならぬ夜のさまに壁ゐ距てゝ扉ゐかけ合ひ、既に四更に至る。（吉備津釜）

此二人急ち躍り立ちて瀧に飛入ると見しが水は大虛に湧きあがりて見えずなる程に、雲摺墨ゐうちこぼしたる如く、雨篠ゐ亂して降り來る。（蛇性の淫）

時に峯谷ゐゆすり動きて、風叢林ゐ儚すが如く沙石ゐ捲き上ぐる、見る〳〵一團の陰火君が膝の下に燃上り山も谷も雲の如くなり。（白峯）

塵は一寸はかり積りたり。鼠の糞ひりちらしたる中に古き帳を立て花の如くなる女一人ぞねる……近く進みて捕へんとせしに忽ち地も裂くる計りの霹靂鳴り轟くに許多の人逃るゝ間もなく、そこに倒る。（蛇性の淫）

右の諸例は即ちこれである。

猶超自然の背景として深山の夜を點出し、その全體より生ずる情調に重きを置いたものは佛法僧と白峯とである。唯かゝる神秘幽玄の境地は日光と共に消失するのを常套とする。白峯に於て、西行は「十日あまりの月は峯にかくれて木のくれやみのあやなき」間は夢幻境に彷徨して居たが「ほ

どなく、いなのめの明けゆく空に朝鳥の音」を耳にして山を去り、佛法僧の夢然も黎明になつて「ふる露の冷やかなるに」蘇生し、「いまだ明けきらぬ恐ろしさに大師の御名を忙しく唱へつゝ漸く日出づると見て」山を降りたのである。かの青頭巾の僧の如きは激しい夜半の狂亂の後、「夜明けて朝日のさし出でぬれば酒のさめたるが如く」柱に凭つて默然として吐息をつくのであつた。かゝる一種の制約は自然現象に對する感觸に基因して居る。だからその神秘的分子は、常に黑い空に鬼火の燃え上る雨の夜や、梟も人眞似して啼きさうな霧の夕暮や、日影はさしながら通り雲に颯と翳るやうな魔性の世界が、その本領である。光を避け暗に隱れ、整形をとらずして異狀を尊ぶ。故にその背景たる自然はどこまでも平和愉樂の域から逃れ出る。かう考へて雨月を見ると、その自然が直接超自然の背景となつて居ないものまでも、一體に悒鬱暗憺の色に抹すられてゐるやうに思はれる。

然らば青天白日の下に幽靈を現出せしめ得ないかと云ふに、絶對にその斷言は出來ない。現にヴオルテールの戲曲には眞晝間妖怪が群行して居ると云ふし、鏡花氏は嘗て「出來るなら春の眞晝、銀座の眞中に幽靈が出して見たい」と云つたと記憶する。所詮は作家の技能の問題である。やゝもすれば或は滑稽なお茶番と化し、或は幽玄な色彩を失つて折角の超自然的特徴を消滅さしてしまふ。かの蛇性の淫の眞女子の如きはあまりに人間らしいために、一面この傾向に陷つたものと云はねばならぬ。要するに超自然の背景として文學的感興を惹起する點に於て、陰影ある暗黑が明快な

欠

信ずる人は、それだけ既に一種の神秘家だと云へる。(Dramatist of To-day)と同じ意味に於て、わが秋成も一種の神秘思想家だと云ひたい。

要するに彼の神秘思想を解剖すれば次の三ケ條に總括し得ると思ふ。

一、前代文學の影響

二、時代迷信の反映

三、神秘に對する作者の感興

而して、彼の創作の動機がその第三にあるのは云ふまでもない。

第四章　後代文學に及ぼしたる雨月物語の影響

風に誘はれて散る胞子は、思ひもかけぬあたりに春の芽を吹く。此の物語の影響の如きも意外の邊にまで及んで居る。人間の精神活動が大自在に跳躍する以上、一個の小說に對して鑑賞者が抱懷する情感は縱橫にして無盡である。況んや所謂ヒントなるものは、他の追從捕捉をゆるさない。殆んど神秘的な力を有して居る。換骨奪胎とはその推移の徑路を全く踏晦し得なかつた折に用ゐらるる言葉に外ならない。後代文學に及ぼしたる影響の名の下に玆に論ぜんとするのは、單にこの種のもの、及び模倣の痕跡が明確なるものゝみを指すのである。しかも我限に觸れた範圍に限られて居

欠

るから實際の十が一にしか當らないかも知れないし、或は思ひもよらぬ目殘しもあらう。この點は寛恕を乞ふと共に後の研究に俟ちたいと思ふ。

雨月物語はかの英草紙や本朝水滸傳と共に讀本の先驅と稱せられてゐる。今單に雨月のみをとつて後世の讀本と比較するに一見その色調に於て甚だしい差違を認める。これは所謂勸善懲惡の金看板を眞向に振翳した後代のものに比して、雨月が此道義的觀念にはむしろ無頓着であつたからである。さればこの兩者の關係は、內容即ち中心思想よりも、先づ形式即ち文章の方面から結び付けられたと云ふべきであらう。絢爛にして華麗なる雨月の筆致が讀本界の二巨匠、京傳、馬琴を深く動かした事は爭はれない事實である。彼等はこれを愛讀せる結果、蔽ふべからざる模倣の途に踏込んだ。雨月に於ける說話の先蹤が多方面なるに拘らず、讀本の源流に置かるゝのは、文章上の類似が膠漆も管ならぬ關係に立つがためである。加ふるに雨月を初め前期の讀本に橫溢せる幻怪にして幽玄なる超自然界の消息は、又後期の讀本の內容を形成する一要素となつたのである。要するに後者が前者の後をうけて、形式より內容に入り、これを包括して己が一傍系となしたと云はねばならぬ。

かくの如く、後代文學との抵觸は、中心思想に淡くして、むしろ文體に濃密である。而してその特徵は同一說話に於て著しい。故に各說話の條目の下に兩々比較して、その間に文章の異同を觀はうと思ふ。

白峯の物語に多くの先蹤があることは已に述べた。吾々は更にこれを後世に求めて、曲亭馬琴の弓張月と幸田露伴氏の二日物語との二篇を得る。弓張月は云ふまでもなく保元の勇士八郎爲朝の後半生を描いたものである。今これを通覽するに白峯からヒントを得たと思はるゝ二個所の場面に遭逢する。

(一)、白縫汲潮志渡、新院生魔界、(前編、卷六、第十五回)

(二)、八郎決死詣靈墳、(後編、卷四、第二十五回)

即ちこれである、先づその(一)をとつて雨月の一節に對比して見よ。

三年が程に五部の大乘經を書寫したれど貝鉦の音も聞えぬ荒磯にとゞめん悲しさに、せめて筆の跡ばかりは洛の中に入れさせ給へと仁和寺の御室の許へ賴みつかはすとて

濱千鳥跡は都にかよへども身は松山に音をのみぞなく

と讀で經にそへて送りしに、尙呪咀のこゝろにやと彼信西が奏しけるによりて、とりも留めず返されしこそかへすがへすも恨みなれ。(弓張月)

五部の大乘經をうつしてけるが、貝鉦の音も聞えぬ荒磯にとゞめんも悲し、せめては筆の跡ばかりを洛の中に入れさせたまへと仁和寺の御室の許へ經にそへてよみおくりける

濱千鳥あとは都に通へども身は松山に音をのみぞなく

しかるに少納言信西が、はからひとして若し呪咀の心にや奏しけるより、そがまゝに返されしぞうらみなりける（白峯）

かくの如き類似を見ては何人も、この二篇の關聯を否定することは出來なからう。

而してその（二）をあぐれば

かくてその日も暮れなんとする程に、と見れば群鴉星を負て茂林に歸り、樵夫月を戴いて家路に急ぐ。啾々しき虫の音に、葉末の露ぞ濃かなる。既に人跡絶えければ、爲朝は木の下に立寄りて衣服を改め、御墓に詣でゝ見れば、千草は一叢の烟を殘して玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照して荊棘路を塞けり。百石城や百官は紫の袖をつらね、朝政助しめしける十善の君として、過去の惡業は脱れ玉はず。青塚苔滑かにして白楊風に戰き、旅魂幽靈今何處にか呻吟玉ふやらむ。げに人界の富貴は夢の中なる快樂にて、妻子珍寶及び王位も身死しては伴侶ならず、されば、とて三界の火宅を出でゝ永く九品の淨刹に至らんこと、なほ容易にあらざらめ、これを見、彼を思ふにも、わが身の果は數ならで、不覺に涙ぞ先だちける。折しも、さし入る月光に御廟の柱を向上れば、二首の歌を書たり。

讃岐に詣て松山の津と申す所にて新院おはしましけむ御跡を尋ねしに跡もなかりければ

松山の浪に流れて來し舟のやがてむなしくなりにけるかな

白峯と申すところの御墓に參りて

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらむ後はいかにかはせむ

仁安三年月日國位とあり。さては西行法師も去々年の冬こゝへは參りけむと默頭つき……

とある。出版月評にこの一節を評して曰く

爲朝謁白峯陵一節、不與前節相關、愴凉凄咽一種異樣文字、不是飜案出奇使人喫驚的文字、正是幽渺清迥、使讀者低回玦玩不能置的文字、此評爲妥當、雖然其結構文字、實皆是學雨月、唯其妙于換骨奪胎之術、是以功弄讀者、使不得窺其斧鑿之痕、但取彼我並誦、細咀嚼其眞味、則雖馬琴文非不巧妙、到底不免爲西施之顰邯鄲之步矣、學海翁評語、宜移置雨月卷上、不得贈與曲亭馬琴子爲其名譽賞牌也

弓張月の文が雨月から出たものであることは疑ふ餘地がない。しかし愴凉凄咽一種異樣の筆致ありとの讃嘆は一片の空辭ではあるまいか。馬琴が得意の四六駢驪や七五の調子は未だ多く現はれて居ないけれど、わざとらしい修飾が却つて醜女の脂粉を思はせる。唯西行を度外に置いて眺めたところに多少の變化が見られるのみである。白峯陵の一段を挿話としたのは結構上の巧妙はあるが、こゝでは一旦、この題材をとつた以上、如何に取扱はれたかゞ問題である。しかも未だ上乘を以てゆ

るすべからざるものがある。

吾々は更に露伴の二日物語を見やう。構想に於ては白峯を一歩も踏出して居らぬ。むしろ結構脚色を忠實に辿つて、しかも委曲周匝、新生面を開拓したと云ふのが適當であらう。されどその詩的幽韻は人をして其重複せる詩材なるを忘れしめる。こゝには登山の一節を引用する、

頃は十月の末、ところは荒凉たる境なれば、見渡す限りの景色いともの淋しく、多枯れ野邊を吹荒む風蕭々と衣裾にあたり、落葉は辿る徑を埋めて踏む足ごとに、かさこそと呼く如き聲を發する中を、踽々然として歩む西行、衆聖中尊、世間之父、一切衆生、皆是吾子、深着世樂、無有慧心など警喩品の偈を口の中にふつ〳〵と唱へ〳〵、從ふ影を友として漸く山にさしかゝり、次第々々に分け登れば、力なき日はいつしか光り薄れて、時雨空の雲の往來定めなく、後山晴るゝかと見れば前山忽ちに曇り、嵐に驅れ霧に遮られて九折なる岨を傳ひ、過來し方さへ見失ふ頃、前途の路もおぼつかなきまで黑みわたれる森に入るに、樅柏の大樹は枝を交はし葉を重ねて杖もてるわが手首も青むばかりに茂り合ひ、梢に懸れる松蘿は鬖々として靜かに垂れ、雨降るとしはなけれども、空翠凝つて葉末より滴る露の冷やかに、衣の袖も立迷へる水氣に濕りて濡れたる如し。（二日物語）

深山晩秋の幽邃凄凉の景、描き盡して剩す所がない。思ふに西行が白峯陵を憑弔せるを材とするも

の多きが中に、觀るべきは秋成と露伴とであらう。露伴の技巧は遙かに優秀を示して居るが時に繁褥なる佛語の羅列に流れた。秋成の幽韻ある筆力は往々にして散漫なる叙述に走つた。彼に行文の新趣があればこれには結構の創意がある。要するに二者の筆致は容易に軒輊すべからざるものであらう。しかも遂に白峯の後段がその後日を叙して「かの國に通ふ人は必ず幣をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし」と結んだ何等の生彩なきに反して、二日物語の

見よ、やがて此世は修羅道となり朕が眷屬となるべきぞ、あら心地快やと復笑ひたまふ御聲ばかり耳に殘りて、放たせ玉ふ赤光の谷々山々に映り合ひ、天地忽ち紅色になるかと見るまに失せ給ひぬ。西行つと我に復りて思へば夢か夢にあらず、おのれは猶かつ提婆品を繰かへし〳〵讀み居たるが、その讀つゞき我口頭に、今も絶えず上り來れり。

と云へる餘韻ある擱筆は、さすがに明治文學史上の巨擘なるを思はしめる。

露伴を思ふ時、更に淺茅が宿と對觸髏とが結びつけて考へられる。勿論、此れのお妙と彼れの宮木とに共通の點があると云ふのではない。唯、「丸木の堀立柱、笹葺きの厄拂したる小家」に美しき女と語り明せば「時しもあれ朝日紅々とさし登つて家も人も雲霧と消え、枯殘りたる去歳の萱薄の中に雪沓の紐續きかけしまゝ我たゞ一人にして、足下に白髑髏一つ」の夢幻境は、心なしか、淺茅が宿の黎明を想起せしめるのである。又わが聯想は武島羽衣氏の小夜砧に走る。高山樗牛は、この篇を

ビュルゲルのレノーレにヒントを得たものと論じてゐるが、吾々の見る所を以てすれば、むしろ淺茅が宿にある。「荒れたる閨のひまとめて、とのもの方を見出せば、霧の紛ひに影薄く、戀しきつまぞ立てりける……旅路の露に弱りけん、身は朝影と細りつゝ、寒れはてたる手をのべて、泣き伏す妻をかき撫で」し情趣は、夫妻その位置を異にするとは云へ、同一の氣分に浸潤してゐる。且古寺の塚の邊りに空蟬の魂なき骸を抱きながら仆れたる結末の如きは全然同型と云はねばならぬ。しかしこれは寧ろ源流を今昔物語に求むべきであるかもしれない。淺茅が宿に就ては猶明治文學に於て俳體詩淺茅宿（ホトトギス所載）及び脚本雨月物語（演藝畫報所載）の二篇を認めるけれど、これは深く云ふに足らないと思ふ。さはれ、雨月が今も現代人の心琴に共鳴する所ある證左とも見られやう。

吾々の筆は便宜上、明治文學の上に馳せた。されど猶馬琴に就て語る所がなければならぬ。かの蛇性の淫に於ける雨宿りの條が近世說美少年錄にとり入れられたのは有名な事實である。

夏の日のくせなれば御廟野の邊にて、猛に夕立の雨降そゝぐに雨具も持たざりければ……路の傍に荒傾きたる圓通堂の檐を仰いで遽しく走り入るに、われより先にこの所に笠やどりするものありけり。と見れば年紀は十八九にやとおぼしき一個の女子の人待貌に立てりける。（美少年錄第一輯卷二）

かくの如くにして夕暮近き野路の雨に、二人してさす一張の傘に袂は包みながら、濡れて嬉しき戀衣の、靈犀一點、おぞや竹葉媒をなし、赤繩誤つて惡緣を結びたる徑路は、品こそ違へ、宛ら眞女子が豊雄との戀の再現である。されどこの一段に於ける油の乘つた筆致と、多少脚色の相異とは、相俟つて雨月の別途に出でゝ充分の功果を收めてゐると思ふ。

猶こゝに注意すべきは、さきに弓張月に於ける「八郎決死詣靈墳」の章を說いた時、白峯の後蹤なる所以を述べたが、その後段の一節は又佛法僧をそのまゝ踏襲したものらしく思はれる。

山下風のいと凄まじきに吹き散る木の葉もろともに武者四五十騎前驅して來たり……やがて御輿を墳のほとりに扛居しかば武士は二帶に列を整へ蹲踞し警蹕の聲と共に御輿の中より玉音高く、

朝倉をたゞいたづらにかへすにも釣する海士の音こそ泣かるれ

と一首の歌を口號み、やをらおりたちて設の席につき給ふを……正弘、賴弘御酌に候して御盃を勸め奉れば新院こゝろよく喫し食て、やがて群臣に贈ぶ、賴長以下次第にこれをめぐらして、おの〳〵喫しをはると見えし。新院を初め奉り賴長公爲義朝臣以下の群臣、身の中より猛火もえ出で、阿と叫ぶ程こそあれ、合して一團の鬼火となり金光を發ちつゝ、兒が嶽さして飛び去り玉ふ。（弓張月、後篇卷四）

を誦し、翻て佛法僧の

思ひもかけず遠くの寺院の方より前追ふ聲のいかめしく聞えてやゝ近づき來り……はや前駈の若侍板橋をあらゝかに踏てこゝに來る……土に俯して跪る。程なく多くの足音聞ゆる中に沓音高く響きて、烏帽子直衣めしたる貴人、堂に上り給へば從者の武士四五人計り左右の座を設く……はやく酒殽をつらねてすゝめ、まゐらすれば萬作酌まゐれと課せらる。恐まりて美相の若士、膝行よりて瓶子を捧ぐ。かなたこなたに杯をめぐらしはいと興ありげなり……淡路と聞えし人俄かに色かへて、はや修羅の時にや阿修羅どもの御迎に來ると聞え侍る、立せ給へと云へば一座の人々忽ち面に血を濺ぎし如く人々の形も遠く雲井にゆくが如し。

と云ふを見れば冥々の間に兩者の聯關があると云つても強ちに附會の說ではあるまいと信ずる。

山東庵京傳も、亦雨月の感化を蒙つた作家である。彼が本朝醉菩提の發端に於て、飾磨曾根松が諸國廻禮の際、山城の國、六道の辻にて、折からの盂蘭盆會に「心ばかりの靈迎ひ、冥途を照す迎火と、木の葉を集め焚火して草菜の露をそのまゝに手向の水」とした夜、一陣の疾風颯と落し來て、霧を吹拂つた間から、忽然とあはれた宏壯なる館に集る惡靈共が、現世に對する復讐の謀議を開く幻怪な場面と、作中人物の運命事件の發展が、この密議通りに拘束せられつゝ推移する脚色とは、白峯及び佛法僧の一段とに緊密なる關係がある。しかし京傳の筆は何等悽愴の筆致なく、却て輕浮な氣分の漂るのは、たま〳〵神秘作家としての彼の天分が薄いことを證明して居る。殊に安積沼に於ける小平治の幽靈出現の描寫は吉備津釜の怨靈を模倣したと云ふよりも、むしろ文章をそのまゝ流用したと云ふのが適當であらう。要するに京傳が秋成から享けた影響は、あまりに赤裸々で、その間に何等濾過せられた痕跡がない。

猶、大正時代に入つて谷崎潤一郎氏は蛇性の淫を映畫化してゐるし、繪畫の方面ではあるが鏑木清方、玉村方久斗の二氏は雨月物語の中から題材を取つて彩筆を揮つてゐる。

最後に小泉八雲(Lafcadio Hearn)の"Japanese Micellany"に收められたPromise Kept（菊花の約）と The story of Kogi（夢應の鯉魚） の翻譯を忘れるわけにはゆかない。後者は殆んど逐字譯であるが、前者は等しく改竄の痕を留めて原文よりも遙かに藝術化せられた個所があるやうに思ふ。

泉は常に湛えられて居る。掬まれた水の行衛は汲む人の心々である。雨月に源流を仰いだ作品も、作家の手腕によつて十人十樣であらねばならぬ。思ふに雨月の說話にはまだ開拓の餘地が充分にある。近代人の悲哀と不安と焦慮との間に、のたうちまわる文藝思潮の渦中に立つて、更に意義ある藝術の珠玉をこゝに索めるのも、決して木に緣つて魚を求むるの類ではない。我邦人が新舊によつて物の價値を定めたがる癖は、古典文學を一概に侮蔑してかゝる傾向を生じた。我は我の權威に從ふべきである。我を動かすものはわれに於て常に新しい。吾々はかくて後代の作品が如何なる

新藝術の芳香の下に、發芽を玆に求むるものゝあるかを眺めやう。

第三編　雨月物語評釋

羅子撰水滸。而三世生啞兒。紫媛著源語。而一旦墮惡趣者。蓋爲業所偪耳。然而觀其文。各々奮奇態。喃喃逼眞。低昂宛轉。令讀者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。余適有鼓腹之閑話。衝口吐出。雉雛龍戰。自以爲杜撰。則摘讀之者。固當不謂信也。豈可求醜脣平鼻之報哉。明和戊子晩春。雨霽月朦朧之夜。窓下編成。以畀梓氏。題曰雨月物語云。剪枝畸人書。

【訓讀】羅子は水滸を撰して三世啞兒を生み、紫媛は源語を著はして一旦惡趣に墮つと、蓋し業に偪らるゝのみ。然して其の文を觀れば各々奇態を奮ひて喃喃眞に迫る。低昂宛轉、讀者をして心氣洞越せしむ。事實を千古に見鑑すべし焉。余適々鼓腹の閑話あり、口を衝いて吐き出す。雉雛き龍戰ふ、自からおもへらく杜撰なりと。之を摘讀せむ者は固より當に信と謂はざるべし。豈醜脣平鼻の報を求むべけんや。明和戊子の晩春、雨霽れて月朦朧たる夜、窓下に編成し、以て梓氏に畀ふ。題して雨月物語と曰ふと云ふ。剪枝畸人書す。

【語釋】○羅子。支那南宋時代の人。羅貫中。水滸傳の作者として知らる。○三世生啞兒。假作の物語をした罪業として子孫三代に亘つて啞者が生れたと云ふ俗說を云ふ。華亭の王圻が『續文獻通考』（卷百七十七）に「水滸傳羅貫著、貫字本中、杭州人、編撰小說數十種、而水滸傳敍三宋江事、奸盜脫騙　機械甚詳、然變詐百

端、壞二人心術一、說者謂、子孫三代皆啞、天道好還之報如レ此。」○紫媛。紫式部。年安朝中期の小說家歌人。式部丞藤原爲時の女で、藤原宣孝に嫁す。一條天皇の長保二年夫に死別し、後に中宮上東門院に仕ふ。生歿の年月は明でない。○源語。源氏物語のこと。○一旦墮惡趣。源氏物語と云ふ架空の小說を書いたがために地獄に墮ちたと云ふ。『今物語』に「或人の夢に、其正體もなきもの、影のやうなるが見えけるを、あれは何人ぞと尋ねげれば、紫式部なり、そらごとをのみ多くしあつめて人の心を惑はす故に地獄におちて苦を受くる事、と堪へがたし。源氏の物語の名をぐして、なもあみだ佛といふ歌を卷毎に人々によませて吾が苦しみをとぶらひ給へと云ひければ、いかやうに讀むべきにかと尋ねけるに、

桐壺に迷ぼむ闇もはるばかりなもあみだ佛と常にいはなむ

とぞ云ひける。」○嗚呼。嗚嚕の誤か。それならば夢寐の聲を云ふ。○鼓腹。太平を樂しむ形容。「有二老人一、嚕含鼓腹、擊壤而歌曰、（十八史略、五帝）」○雉雊。雊は雉の鳴くこと。○杜撰。著作又は議論に誤謬の多い事を云ふ。杜默の詩が多く律に合はなかつたので、時人が法式に違ふことを杜撰と言つた（陳餘叢考）○醜唇平鼻。みつ口や、鼻べちやである。私の物語は誰も本當にしないだらうから、啞が生れたり地獄に落ちする事は勿論のこと、鼻べちやになる位な業報もなからうとの意。○明和皮子。明和近年で、後桃園天皇の御宇。○梓氏。梓は「あづさ」。版木に用ふ。即ち出版書肆を云ふ。○剪枝畸人。秋成の戲號の一つ。「剪枝竭レ流、終不レ可レ絕」（魏書、高閭傳）に典故がある。

18/12

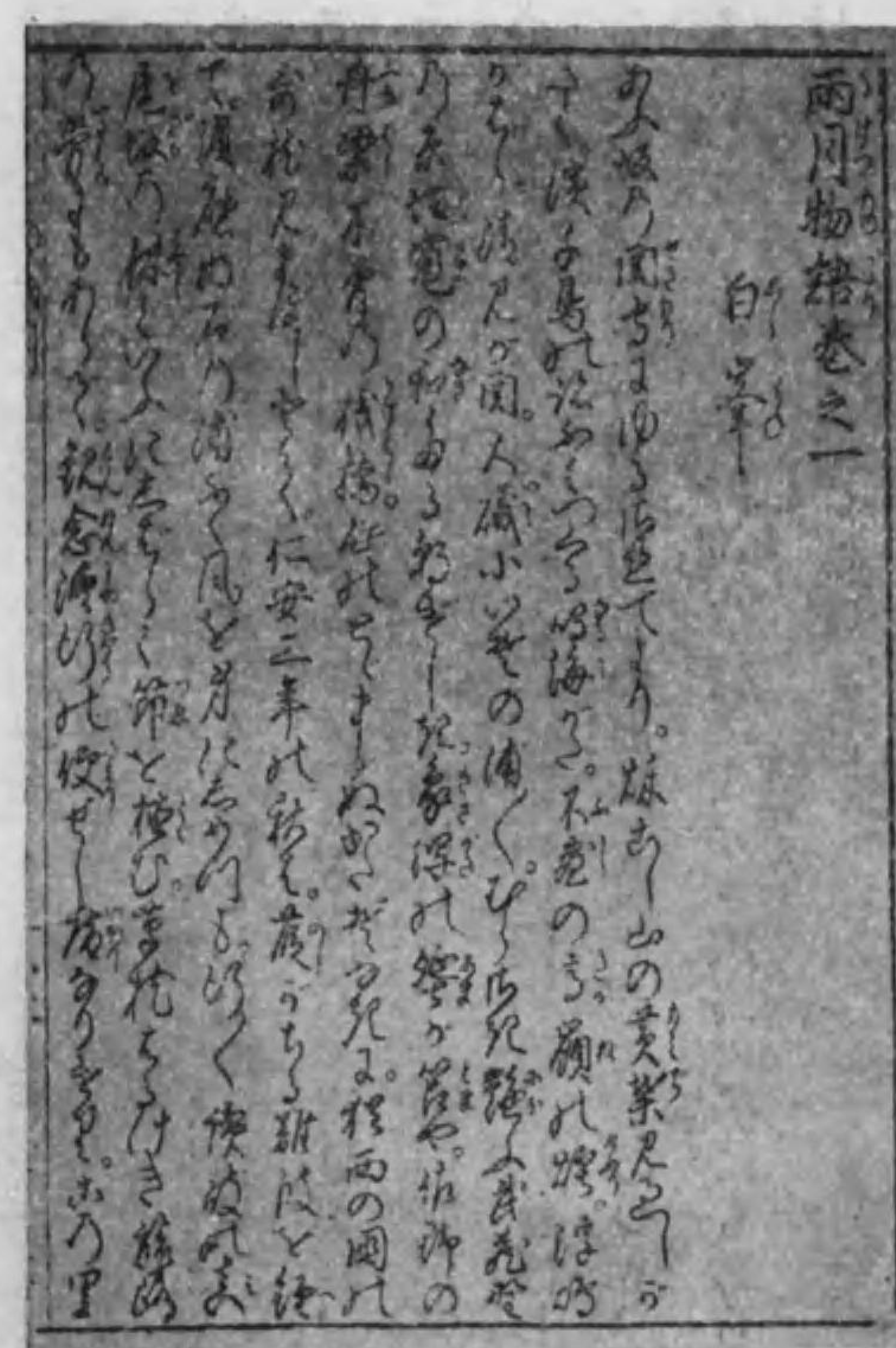
雨月物語　卷之一

白峯

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黃葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙。浮島がはら、淸見が關、大磯小いその浦〳〵、むらさき艶ふ武藏野の原鹽竈の和たる朝げしき、象潟の蜃が宮や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、鬼が ちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行〳〵讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく筇を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。

【語釋】逢坂。近江滋賀郡大津の南の山である。關の創置年代不詳、或は孝德天皇の大化二年かとも云、延曆四年閏七月廢去の事、日本紀略に見ゆ、文德天皇天安元年の時更に之を置く。その後、事ある毎に守らしめ

たが、これを固關使と云つた。後世、關は廢絶したが年代は明らかでない。歌名所。○關守にゆるされてより。正しく云へば「逢坂の關が關守に許されてより」で、關の廢絶を意味するもの。即ち交通の自由になつて以來の意である。關守に通行を許可されると解するのは不徹底であらう。京都から東海道を近江路に出る事には相違ないが漫然と釋くよりも語義に即して考へたい。○秋こし山。秋が來た山々で、秋色關はなる季節の山容を云ふ。○鳴海潟。尾張愛知郡にある千鳥の名所。「なるみ潟潮干はるかにあり通ふ跡のみ見えてたつ千鳥かな」（新千載集、冬、爲明）。○不盡の高根の烟。「風になびく富士の烟の空に消えて行へもしらぬ我思かな」（異本山家集、戀、西行）。○浮島が原。駿河。「足柄の關路こえゆく東雲に一村かすむ浮島が原」（新勅撰集、雜四、後京極攝政）。○清見が關。駿河淨見埼の要害にして後の清見寺の地か、海道圖會井國志には清見寺門前を關屋里と云へり。『更科日記』には關のさまが書いてあるから長元年中には關が存してゐたと見える。「清見潟沖の石こそ白波にひかりなかはす秋の夜の月」（異本山家集、秋、西行）。○むらさき艶ふ武藏野の原。むらさきは紫草。（和名、無良佐岐）、多年生草木。「むらさきの一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今集、雜、讀人不知）。○鹽釜の和ぎたる朝けしき。鹽釜は陸前にあり。「烟たつあまのとまやの見えぬまで霞みにけりな鹽釜の浦」（續古今、春上、源經信）。○象潟の蜑の苫や。象潟は羽後にあり、「さすらふる我身にしあれば象潟や蜑の苫屋にあまた旅寢ぬ」（新古今、羇旅、藤原顯仲）。○佐野の舟梁。下野にあり。「夕霧に佐野の舟橋おとすなり、たなれの駒の歸りくるかも」（詞花集、雜上、俊雅母）。○木曾の棧橋。「わけ暮す木曾の棧橋たえ〴〵に行末遠き峯の白雲」（續拾遺、羇旅、後京極攝政）。○歌枕。古歌によまれたる名所、又は名所の歌を集めたるもの、こゝにては前の意。「和歌之有名所、猶寢之有枕、因枕夢熟、因名所佳句成、歌枕之稱蓋如是」（勝地吐懷篇）。「ふる歌によめる天の下の名どころを世の人、歌枕と云ふは歌よみの枕ごとするにやあらむ……又思ふにしかにあらで、枕詞の類にてよむ歌のたすけに名所をする心にやあらむ」（松の落葉）。○見まほし。見たいものだ。○仁安三年。七十九代六條天皇の御宇。○葭がちる。難波の枕詞。「葦原のゆたけき見つゝ葭がちる難波に年は經ぬべく思ほゆ」（萬葉集。二十、大伴家持）。○身にしめつも。身に深く感じながら。「つ」は「つゝ」に同じ。○笻。竹の杖。○草枕。草を枕にして寢ると云ふ意にて、旅と云ふ語の枕詞でもあり、又旅の事をも云ふ。○觀念修行。事理を心に想


雨月物語巻之一
白峯

白峯（原本第一丁）

ひ浮べて見極め、道を守り善行を修むる事。

【評釋】白峯の一篇は、想の去來に任せて五十餘年の生涯を、自然の懐にかくれた、詩人西行の自叙體に擬したものである。この冒頭の一段は、輕々と筆をつけながら、一杖一鉢、處定めぬ行脚僧が、渡鳥のやうに旅から旅へとわたつてゆく樣を偲ばせて居る。逢坂山を東に下れば、優麗なる東海の長汀曲浦は、繪卷物でも見るやうに繰り廣げられ、黄葉散りしく驛路に杖を止めると、つゞく松原に霧がかゝつて、波の遠音は小鼓の調を奏でるやう。千鳥しば鳴くあゆち潟、蔦もみち絡む宇津の山蔭、かへり見すれば、中空には芙蓉の峯が玲瓏の姿を描き出す。空より廣い武藏野の原を北に急げば、やがて豪宕な東北の山河が漸次に展開する。ひき返して中山道に入ると、潮の香もせぬ山國の秋を、菅笠にはら〳〵り降りかゝる落葉の音。あはれや、自然の秘密藏も覗はれそうである。さて筆は一轉して讀者は遂に西行と共に讃岐の國に据えられるのである。事もなげに歌名所を並べたてた中に、一定の順序があり、一見不用意の如くにして、その實周到なる叙述である。自然詩人西行を主人公とするこの篇にとつては、特に看過し難いと思ふ。因に語釋にとつた和歌は引歌ばかりでなく、歌枕から生ずる印象を一層明瞭ならしめんとて擧げたのもある。

この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞て、拜みたてまつらばやと、十月初めつかたかの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし。兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、呎尺をも辨悒こゝちせらる。木立わづかに間たる所に、土墩く積たるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荆棘薜蘿にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。

【語釋】○白峰。「シロミネ」と訓むが正しい、けれども此の作の標題には「しらみね」と傍訓がしてある。讃岐國綾歌郡松山村。○新院。崇德天皇。○青雲の。――晴れたる日である。「彌彦のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼ降る」（萬葉集、十六）、○そぼふる。しと〳〵と雨の降るを云。○そぼつかなき。はつきりとせず不安心也、こゝは見透し難き狀である。○荊棘。雜草の一。○薜蘿。薜はまさかつら、蘿はつたかつら。こゝはすべて雜草に埋れての意。○うらがなし。心に自然と物悲しく感ぜらるゝ。○かきくらまされて。茫然たるさま。○夢現をも。夢か現實か判斷がつかないの意。

【評釋】筆は、本題に入る。時は十月の末である。處は荒凉たる境である。たゞさへ寂しい深山の秋に、瘠軀鶴に似たる僧形の人が晴れたる日すら「小雨そぼふる如き」木下闇を、默然として行く。簌々と踏みしだく落葉の音にさへ氣が置ける位、靜かである。重巒の間からは山霧がむくむ

くと湧上つて來る。かう云ふ境地を思ひ浮べて、さてこの文を誦すると、人間の血行が止つて、自然のみが活きて居るやうな、靜寂の趣がよく現はれて居る。叙述が纖細でないだけ、景物と適應した豪宕な趣がある。駿馬の馳驅するが如く、おほまかながら要所々々に蹄の痕は深く且强く印せられて居る。吾々はこれに依つて凄凉たる深山晩秋の夕暮を、まざ〳〵と眼前に見、茂林の梢を拂ふ風の音が颯々と耳に響く。文中「兒が嶽と云ふ嶮しき嶽」云々と叙して眼前に雄大なる景色を展げて置いて、直ちに「木立わずかにすきたる所に土墩く積み上げたる御陵の荒廢した狀を述べたのは、さすがに妙手と云はねばならぬ。

現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清凉の御座に朝政ことしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを、思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣つかふる人もなき深山の荆の下に神がくれたまはんとは。萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものゝ、おそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。

【語釋】○紫宸。禁中の正殿。○清凉。主上の常殿。○朝政。政務を云ふ。政は寸時も怠るまじきもの故、早朝より、その日の政事をとらせ給ふと云ふのである。○藐姑射の山。上皇の御所を云、上皇の御所を仙洞と云ひ、仙人の住む洞とて世俗と離れ給ふの意である。而して藐姑射の山に仙人が住むと云ふので、これも亦、院の別稱となつた。「藐姑射山有二神人一居焉、肌膚若二氷雪一、綽約若二處子一」(莊子逍遙遊)。「萬世を常磐かきはに頼むかな、はこやの山の君の御影を」(定家)。○瓊の林。姑射の山の緣語で林と云つたのである。美稱、立派なる場所—禁苑—の意。○禁めさせ。限りを立て出入を禁ずるの義。「させ」は敬語。上皇の御住ゐになるのを云ふ。○神がくれ。崩御。○萬乘の君。天子の事、天子萬乘譜侯千乘。○宿世の業。前世になせし善惡のしわざ。

【評釋】文脈は一轉して懷舊同情の涙となつた。懷舊同情の涙は、現實と比較して不滿を感ずる時、自他のために逝る。西の國の歌人ではないが「苦しき日にありて樂しかりしそのかみを思ふ程痛ましい事はない」のである。西行はさすがに佛者である。こゝに於て彼は宿命を思つた。

終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみてたてまつる

松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は沒しほどに、山深き夜のさま常ならね、石の牀木葉の衾いと寒く、神清骨冷て、物とはなしに凄じきここちせらる。月は出しかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく「圓位〳〵」とよぶ聲す。

【語釋】○供養、楚語、物を備菩薩にすゝむる事。三寶（佛、法、僧）に財と行とを進むるを供と云ひ、攝養を進むるを養と云ふと。「供養佛者、得大福德、速成阿耨菩薩、提令諸衆生、皆獲安樂、供養法者、增長智慧、證法自在、能了知諸法實性、供養僧者、增長無量、福德資糧、致成佛道」（大方廣不思議境界經）。また、供養に財と法との二種がある。飲食衣服香華をすゝむるを財供養と云ひ、講經說法等をすゝむるを法供養と云ふと。○松山の歌。この歌は山家集下雜に見える。歌意は自然の景色は昔ながらに變らないけれど、この自然を背景として現實の果敢なさを托したのである。松山は保元物語に見えるやうに地名であるが、こゝは松林に蔽はれた海邊の寂しい丘陵を偲ばせる。原歌第五句は「なりましにけり」である。かたなくは形無にて「空しく」の意。○牀。墓の下の板敷。○衾。寢る時、身にかけるもの、方形で長八尺五寸なる本體とする。○物とはなしに。これと指しては云へないが、たゞ何となく、自然にと云ふ意。○あやなし。文無、不分明で、何一つ見えぬ眞暗である。○うらぶれて。つらく、うく、心淋しくなるの意。「さを鹿のけさうらがれて鳴くなべに野原の小萩花ちりぬべし」（基俊）。○圓位。西行が高野登山後に呼びし名。

【評釋】彼はまた詩人であつた。だから經文を誦しつゝも歌を奉つたのである。かくて日は暮れた。深山の落日ほど心寂しいものはない。さらぬだに晩秋である。「物とはなしに凄しき心地せらる」の一句はよくその氣分をあらはして居る。而して冴えきつた片破月の木葉がくれに洩れる光は更に物凄い感を增す。この境、この時、何事かなけらねばならぬ。果然耳もとに圓位々々と呼ぶ聲がする。

この段で「猶心怠らず供養す、露いかばかり袂に深かりけん」の一節は疣贅だと思ふ。

眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の、背高く痩おとろへたるが、顏のかたち着たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立るを西行もとより道心の法師なれば、恐ろしともなくて、「こゝに來たるは誰」と答ふ。かの人いふ、「前によみつる言葉のかへりを聞えんとて見えつるなり」とて、

「松山の浪にながれてこし船のやがてむなしくなりにけるかな

嬉しくもまうでつるよ」と聞ゆるに、新院の靈なることをしりて、地にぬかづき涙を

流ていふ、「さりとていかに迷はせたまふや、濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜の法施の隨緣したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御こゝろにし侍り。ひたぶるに隔生即忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へ」と、情をつくして諫奉る。

【語釋】○色紋。色柄也。○道心の法師。正道を修めし法師。○よみつる言葉。西行の詠んだ歌のこと。○かへりごと聞えむ。返歌を申さうの意。○松山の歌。山家集、下、雜にある西行の詠、その詞書に「讃岐にまうでて松山と申す所に院おはしましけん御跡たづねけれどもかたもなかりければ」とあるが、こゝは上皇の詠として用ひてある。なほ流れて本し舟は上皇の身を漂流船に喩へたのである。○濁世。五濁惡世の略、即ち五濁相現れて惡事繁き世の中を云。五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁を云。○厭離。正しくは「オンリ」と訓む。いとひはなるゝ事、即ち死して世を離る事である。「總有十門、分爲三卷、一厭離穢土、二欣求淨土」（往生要集）。○法施に隨緣す。法施は諸佛妙喜の法を以て演說すること。隨緣は緣に應じて、誦經供養するを云。○現形。うつし身のまゝの形、姿してあらはるゝのである。○隔生即忘。生を隔つる時は前世の事を忘るの意。○情。「ロ、ロ」と訓む。

【評釋】　上皇の御靈は遂に出現したのである。西行が初めその誰人とも氣附かず、返歌を聞いて、新院の靈なるを知り、はつとひれ伏して「さりとていかに迷はせ玉ふや」と急轉直下に筆をつけたのは非常に面白い。すかし見る西行の眼に映じた御靈の姿も、短い叙述ではあるが印象が鮮明である。而して「うれしくも詣でつるよ」の一句のいかに生彩なるよ。唯西行の言葉に佛語を朧列したのは、坊主としては自然ではあらうが讀者には甚だ目障りである。

新院呵〳〵と笑はせ給ひ、「汝しらず、近來の世の亂は朕なす事なり。生てありし日より魔道にこゝろざしをかたぶけて、平治の亂を發さしめ、死て猶朝家に祟をなす。見よ〳〵やがて天が下に大亂を生ぜしめん」といふ。西行此詔に涙をとゞめて、「こは淺ましき御こゝろばへをうけたまはるものかな。君はもとより聰明の聞えましませば、王道のことわりはあきらめさせ給ふ。こゝろみに討ね請すべし。そも保元の御謀叛は、天の神の敎給ふことわりにも違はじとておぼし立せ給ふか。又みづからの人慾より計策給ふか。詳に告せ給へ」と奏す。其時院の御けしきかはらせ給ひ、「汝きけ。帝位は人の極なり。若し人道上より亂す則は、天の命に應じ、民の望に順ふて是を伐つ。抑永治の昔、犯せる罪もなきに父帝の命を恐みて、三歳の體仁に代を禪りし心、

人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕皇子の重仁こそ國しらすべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬みにさへられて、四の宮の雅仁に代を簒はれしは深き怨にあらずや。重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。人の德をえらばずも。天が下のことを後宮にかたらひ給ふは父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは、孝信をまもりて、勤色にも出さゞりしを、崩れさせたまひてはいつまでありなんと、武きこゝろざしを發せしなり。臣として君を伐すら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを、ましてしるべき位ある身にて、牝雞の晨する代を取て代らんに、道を失ふといふべからず。汝家を出で佛に淫し、未來解脫の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜のをしへを釋門に混じて朕に說や」と御聲あらゝかに告せ給ふ。

【語釋】○魔道。魔は麻羅の略。障礙又は奪命の義。樂欲、怒、惱、詐等凡て修道の障りとなるものを云。ここにては邪道の意。○淺まし。興ざめなる。○心ばへ。心の趣くところ。料簡。○天の神。天照大神。○御けしき。樣子也、御けしきかはるとは心が擧動顏面にあらはれし也、即むつとせられし也。○永治。崇德天皇の御宇。○父帝。鳥羽帝。○體仁。正しくは「ナリヒト」と訓む。近衞天皇、御生母は美福門院。○美福門院。藤原得子、贈大政大臣長實の女、永曆元年崩四十四。○雅仁。後白河天皇。鳥羽天皇の第四皇子。○國しらすべき才。治國の才。○後宮。宮中の大奧。「張貴妃寵傾後宮、後宮之政從歸之、后澹然未嘗有所忌怨」（陳書沈皇后傳）。○勤。決しての意。（禁止の語。後に打消の言葉を以て呼應させる。）○臣として君を打つ。周武王、桀紂を討ちたるを云。○牝雞の晨する代。婦人の權を專らにする世。「武王故人有言、曰牝雞之晨、惟家之索今商王受、惟婦言是用」（書經、牧誓。）○佛に淫す。佛道に惑溺する也。○解脫。煩惱の繫縛を解き三界の業苦を脫する義にして即悟り也。念彼觀音力、釋然得解脫（法華經）。○因果。「擧果知因、譬如蓮、花方其吐花、而果具蓮中」（華嚴經）こゝにては單に佛道と云ふ意。○堯舜の敎、儒敎を指す。○釋門。佛敎を指す。

【評釋】　西行の言葉はどこまでも靜かである。しかもその中に凛として犯すべからざるものがある。これに反して上皇の語氣は荒れて居る。憤怨の炎が迸るやうだ。一は冷灰の如く、一は電火の如く、靜と動と兩々相反映して更に一段の妙を見る。殊に「重仁國しらすべき才あり、雅仁、何等のうつは者ぞ」の一句、上皇の心情を披瀝して餘蘊なく、きび〳〵した筆致は胸すく計りである。

西行いよゝ恐るゝ色もなく、座をすゝみて、「君が告せたまふ所は、人道のことわりを

かりて慾塵をのがれ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず、皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子菟道の王を日嗣の太子となしたまふ。天皇崩御たまひては兄弟相讓りて位に昇りたまはず。三とせをわたりても猶果べくもあらぬを、兎道の王深く憂給ひて、豈久しく生て天が下を煩しめんやとて、みづから實算を斷せたまふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即せ給ふ。是れ天業を重んじ孝悌をまもり忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本朝に儒教を尊みて專王道の輔とするは、菟道の王、百濟の王仁を召て學ばせたまふをはじめなれば、此の兄弟の王の御心ぞ、即漢土の聖の御心ともいふべし。又周の創、武王一たび怒りて天下の民を安くす。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊み義を賊む。一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと人の傳へに聞侍る。されば漢土の書は經典史策詩文にいたるまで渡さゞるはなきに、かの孟子の書ばかりいまだ日本に來らず。此書を積て來る船は、必しも暴風にあひて沈沒よしをいへり。それをいかなる故ぞととふに、我國は天照すおほん神の開闢しろしめしゝより、日嗣の大王絶ることなきを、かく口賢しきをしへを傳へなば、末の世に神孫を奪ふて罪なしといふ敵も出べしと、八百よろづの神の惡ませ給うて、神風を起して船を覆し給ふと聞。されば他國の聖の教も、こゝの國土にふさはしからぬことすくなからず。且詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮を禦げよと。さるを骨肉の愛をわすれ給ひ、あまつさへ一院崩御給ひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て寶祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ重仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布和を施し給はで、道ならぬみわざをもて代を亂したまふ則は、きのふまで君を慕ひしも、けふは忽怨敵となりて、本意をも遂たまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ〳〵舊讐をわすれ給ふて、淨土にかへらせたまはんこそ願まほしき叡慮なれ」と、はゞかることなく奏ける。

【語釋】 ○慾塵。五慾、六塵、人間の煩惱也。○震旦。支那古代の音譯字。○譽田の天皇。應神天皇。○大鶴鵠王。仁德天皇の御諱。○菟道の王。菟道雅郎子。○寶算。天下の御齡、「五龍歸寶算、九雁叶時康」(徐彥和、奉和幸新豐溫泉宮應制詩)○罷事なく。仕方なく、すてゝおけないの意。元來この語は(一)止む事なし、(二)すてゝおけぬ、(三)平凡でない、(四)高貴と語義が推移してゐる。こゝは第二の意。○天業。天皇の御政事。○孝悌。孝は善く親に事ふる事、悌は善く兄に事ふる事。○堯舜の道。堯舜は理想的君主、即ち人道の極致を云ふ。○王仁。百濟の人、應神帝十六年、來朝歸化し、始て漢籍を齎す。後、內藏の出納を錄する事を掌る。○一夫の紂を誅するなり。紂は暴君故、一匹夫に等し、されば紂を殺すは王を弑する所以とはならで匹夫を誅するに同じとの意。「賊仁者謂二之賊一。賊義者謂二之殘一、殘賊之人謂二之一夫一、聞レ誅二一夫紂一矣、未レ聞レ弑レ君也」(孟子、梁惠王章句下)。○孟子の書ばかり未だ日本に來らず云々。—これは五雜俎に「後漢亦重二儒書一信二佛法一、凡中國經書皆以二重價一購レ之、獨無二孟子一云、有下攜二其書一往者上、舟輙覆溺、此亦一奇事也」(五雜俎、第四卷、地部)。この項、江戸時代の繙刻本には削除してある。本文は明版の本から拔萃した。○開闢。「肇國」の意に用ゐてある。○日嗣。御位を嗣ぎ給ふとの意。○兄弟牆に鬩ぐ云々。內輪喧嘩をして居ても、外から敵が來ると一所になつて禦げとの意。「兄弟鬩二于牆一、外禦二其侮一」(詩經、小雅)○一院。鳥羽天皇。○殯の宮。死人の埋葬する前、暫く骸を棺に斂め安置し置く場。○天下は神器なり。天下を治める天位は神の定めたものと云ふ意。「天下神器、不可爲也」(老子)。「不レ知二神器有下命、不レ可下以二智力一求上也。」(漢書)。○本意。かれて思ひよりたる心。○側なき刑。上皇播遷(流謫)の御事。○鄙の國。都以外の地。○淨土。佛菩薩の住する國で、五濁なく、惡道なき處を云。現世を穢土と云ふに對す。十方に諸佛の淨土があるが、後、西方往生の思想盛んとなるや特に西方極樂國をさして淨土と呼ぶに至つた。

【評釋】 縷々として說き去り、說き來る。水の滾々として、湧き出づるが如く、些の澁滯を見ない。たゞこの夥しい故事に依つて、吾々はこゝに甚だ雄辯の西行を見るより外に何物をも獲る能はざるを悲しむ。德川期の一般の學風から見て、作者に對しては無理な注文かも知らないが、西行をして、かくの如き具體的な例を列べさせる代りに佛者の立場から抽象的に今少し深く突込んで貰いたかつた。

院長嘘をつかせ給ひ、「今事を正して罪をとふ、ことわりなきにあらず。されどいかにせん、この島に謫れて、高遠が松山の家に困められ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まゐりつかふる者もなし。只天とぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行らんとなつかしく、曉の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。烏の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にと

ゞめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを洛の中に入れさせたまへと、仁和寺の御室の許へ經にそへてよみておくりける。

濱千鳥跡はみやこにかよへども身は松山に音をのみぞ鳴

【語釋】○謫れ。流しものとなる。○高遠。保元物語に高季に作る。「當國の在廳三位高ずゑといふものゝ造りたる一字の堂、松山と云ふ所にあるにぞ入れまゐらせける」（保元物語、三、新院せうかうの事）。○御膳。御物にて、主上などの供御を云、それより轉じて飯の事を云。○天とぶ雁。雁に音信を聯想するは蘇武の故事あるがため也。「敎使者謂單于、言天子射上林中、得雁、足有係帛書、武等在某澤中」（漢書、蘇武傳）。○鳥の頭白くなるとも。とても不可能であると思はれる事に喩ふ。「燕太子丹者、故嘗質於趙、而秦王政於趙、其少時與丹驩、及政立爲秦王而丹於秦、秦遇丹不善、故丹亡歸、歸而、求爲報秦王者」（秦隱）。「燕丹求歸烏頭白、馬生角乃許耳　丹乃仰天歎烏頭即白、馬亦生角」（史記卷八十六、荊軻傳）。熊野に參りて、あす出でなむとし侍りけるに人々暫しはさぶらひなんや、神もゆるゝ給はじなど云ひける程に、番無川のほとりに頭白き鳥の侍りければよめる。「山鳥かしら白くもなりにけりわが歸るべき時や來ぬらむ」（後拾遺集、雜四、增基法師）○五部の大乘經。華嚴經六十卷、大集經五十卷、般若經三十卷、法華經十卷、大般涅槃四十卷、已上百九十卷。（大乘とは如來敎法中で最上の敎法を云ふ。）○貝鐘の音も云々。貝は法螺貝、鐘は釣鐘、大寺に具ふべき佛具。その音も聞えぬとは、名寺巨刹なきところ。即ち通常の寺に納めをくも、不都合なれば

の意。○仁和寺の御室。鳥羽院の第五皇子、本仁親王、後に覺性法親王と申せし人。仁和寺は「ニンナ」寺と訓む。山城國葛野郡花園村字御室にある。光孝天皇勅願の寺。○濱千鳥の跡。鳥跡は文字の事、この歌は保元物語、卷三に見ゆ。歌の意は「わが筆の跡ばかり都へ行くけれども筆者たるわれはこの松山に悲しい運命を泣いて居る」。「音をのみぞなく」は濱千鳥の緣にてかく云つたので、嗚咽するやうな泣き方を云ふ。

【評釋】眞情は人を動かすものである。西行は涙を以て切諫した。こゝに於て上皇の驀進的の氣鋒は、やゝたぢろいて、そこに間隙を生じた。即ち回想と云ふ事が入込んだのである。上皇が長き嘘をつかせられたのは、これがためであるとして、「今事を正して罪を問ふ理なきにあらず」と西行の言を容れながら、猶「されど如何せむ」と一轉した裏には、自己を憐れむの情が仄見える。從つて此一節は餘程、感傷的に出來上つて居る。磯打つ浪が夜もすがらの夢を洗つて、寢覺の枕を倚つれば、群に離れた雁が寂しげに啼いてゆく。日に三度の御膳を進むる者が退いた後は、磯馴松に風の音のみが冴えて、ぱつと立つ千鳥の影に見入りつゝ、思ひはいつしか昔に返る。簡單な叙述ではあるが孤獨の感が、しみ〴〵と身に泌みて來る。

しかるに少納言信西がはからひとして、若呪咀の心にやと奏しけるより、そがまゝにかへされしぞうらみなれ。いにしへより倭漢土ともに、國をあらそひて兄弟敵となり

し例は珍しからねど、罪深きことかなと思ふより、惡心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にもたがひて、筆の跡だも納たまはぬ叡慮こそ、今は舊しき讐なるかな。所詮此經を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定て、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈てし後は、人にも見えず深く閉こもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出できぬる。まづ信頼が高き位を望む驕慢の心をさそうて義朝をかたらはしむ。かの義朝こそ惡き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕がために命を捨しに、他一人朕に弓を挽く。爲朝が勇猛、爲義忠政が軍配に贏目を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出しより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此の島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困められしなり。これが報ひを虎狼の心に障化して、信頼が隱謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐討たる。且父の爲義を弑せ

迫害←清盛
↔
信頼→義朝

（第二編　第一章）

し報偪りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬこれをさそうて信頼義朝が讐となせしかば、終に家をすてゝ宇治山の穴に竄れしを、はた探し獲られて六條河原に梟首らる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。それがあまり應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を祟りて、朕も其秋世をさりしかど、猶嗔火熾にして盡ざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕けんぞくのなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治るを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず。汝見よ、平氏も亦久しからじ、雅仁朕につらかりしほどは終に報ふべきぞ」と、御聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ。「君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へばふたゝびいはじ」とて、只默してむかひ居たりける。

【語釋】○少納言信西。藤原通憲。藤原實兼の子、高階經敏に養はる。鳥羽・崇德・近衞三朝に歷任す。入道して信西と云ふ。○懺悔。懺は懺摩の略、即ち後悔の義なり、過去の罪惡を全く後悔するを云ふ。○親しきに云々。名例律六議（議親、議故、議賢、議能、議功、議貴）の一に當る。即ち天皇及太皇太后、皇太后、皇后等の親族の減刑せらるゝ特別法を議親法と云ふ。○回向。讀經して亡者の菩提を弔ふを云ふ。大乘義章に三種の回向を說けるその一、衆生回向にて、自己の善根を他の衆生にさしむけて、其功德利益を與ふること。佛菩薩が自ら修せし廣行の功德を有緣の衆生に廻施するを云ふ。○はるかさん。「はらす」に同じ。（他動詞四段活用）。○軍配。謀也。心たばかりある人にて（竹取物語）等の例あり。○山賤。山の人の義で、柚人の稱。○椎柴。椎の一名。椎の木の小枝を柴木とする。○蓋し。れぢけた心のさま。○虎狼の心に陰化して。心を虎狼の如く殘忍にしての意。○地祇。天神に對する語。下土に生れし神。即ち天皇。○家の子。家人也。末流の同族、轉じて家の召仕の意となる。長田忠致を指す。○博士ぶりて。學者ぶる。ぶるは實質なくして、有るが如く振舞ふを云ふ。○應保長寬。共に二條帝の御宇の年號也。應保元年（一說、永曆元年十一月二十三日）美福門院崩。長寬二年二月關白忠通薨。年六十八。忠通は忠實の子、顧長の兄。崇德院の崩御は長寬二年八月六日、御歲四十六。○嗔火、怒りの激しきさま。○朕けんぞく、「わが眷族」である、眷族は六親以外の同族、轉じて從僕の意。○人果。人間としての果報。○つらかりし。無情なりし也。○いやまし。彌增し也。

【評釋】今迄の感傷的な情緒は是に於て蜻蛉返りをした。信西の邪推が讖をなして「所詮此經を魔道に回向して」の大願となり「汝見よ、平家も亦久しからじ」の逆情となつたのである。西行も云ふべき程の事は押切つて云つた。しかも上皇の激情は一旦靜謐に歸しかけたものゝ追想は更に新しく憤怨の油を注いで嗔恚の炎は底止すべからざるに至つた。彼は默すより外はない。これは自然の徑路である。このあたりは保元物語の文章を引延ばしたに過ぎないが、上皇の口づから出て居るだけに一層引立つて感ぜられる。此段の初めは前段からのつゞきで上皇の言葉である。

時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を偃すがごとく、沙石を空に卷上る。見るみる一段の陰火、君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあきらかなり。光の中につらつら御氣色を見たてまつるに、朱をそゝぎたる龍顏に、荆の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生のびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて「相摸〳〵」と叫せ給ふ。あと答へて、鳶のごとくの化鳥翱來り、前に伏て詔をまつ。院かの化鳥にむかひ給ひ、「何ぞはやく重盛が命を奪て雅仁清盛をくるしめざる。」化鳥こたへていふ。「上皇の幸福いまだつきず、重盛が忠信ちがづきがたし。今

より支干一周を待ば、重盛が命數既に盡なむ。他死せば一族の幸福此時に亡べし。」院手を拍て怡ばせたまひ、「かの讐敵ことごとく此前の海に盡すべし」と、御聲谷峯に響きて凄じさいふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て涙しのぶに堪ず。復び一首の歌に隨緣のこゝろをすゝめたてまつる。

「よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん
刹利も須陀もかはらぬものを」と、心あまりて高らかに吟ける。

【語釋】○沙石。こまかき砂。○陰火。鬼火也。○つら〳〵。熟々にて、充分との意。○御氣色。御樣子也。○朱をそゝぐ。赤き也、怒れる貌。○龍顏。天子のお顏。「高祖爲人、隆準而龍顏」（史記高祖記）。○白眼。睨むやうな目つき。○柿色。修驗者の衣の色。○すゝび。煤ばみたる也。○相模、三井寺の僧、勝尊の事か。○支干一周。支干一周は十干十二支にて一週六十年なれど、ここにては十二年を云。○緇衣。佛の道に入る也。○よしや君の歌。山家集、下、雜。歌意は「たとへ昔は金殿玉樓にお住みなされても、最早かうなられてからはどうする事も出來ませんからお諦めたさい」との意。○刹利。梵語、刹帝利の略。印度王族の名、印度四姓中の第二位。○須陀。梵語、首陀羅の略。印度の最下位。王侯も土民もの意。「きくならく奈落の底にいりぬれば刹利も首陀もかはらざりけり」（後頼口傳）。

【評釋】　月が森の彼方に落ちた木下闇に、立てる人の衣の色は無論わからぬ。朦朧として中空に浮くが如き影に對して、端座せる西行は、今や一團の鬼火を透して魔王姿の上皇を、まざ〳〵と眼前に見たのである。此處に至つて漸く明らかに御姿を描出したのは、對象の妙諦で、これでこそ初めて「山も谷も雲の如く」の句が活きて來る。且、相模との問答に於て上皇のいら〳〵して居られる心持がよく出て居る。從つて「院手を拍つて怡ば」れたさまも、峰谷に響いて凄じい御聲も、さすがと首肯せられるのである。

此ことばを聞しめして感させ給ふやうなりしが、御面も和らぎ陰火もやゝうすく消ゆくほどに、つひに龍體もかきけちたるごとく見えずなれば、化鳥もいづち去けん跡もなく、十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふがごとし。ほどなくいなのめの明けゆく空に朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば、かさねて金剛經一卷を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閑に終夜のことどもを思ひ出るに平治の亂よりはじめて、人々の消息年月のたがひなければ、深く慎しみて人にも語り出ず。

【語釋】○龍體。天子の御體。○やすらふ。躊躇するの意。○いなのめの。「あく」の枕詞。しのゝめに同じ。曉也。「相見らく、あきたらねどもいなのめの、あけゆきにけり、舟出せむ。いも。」（萬葉十）。○朝鳥。凡て朝立つ鳥を云。○金剛經。金剛般若波羅密經、禪家にては專ら此經を誦す。般若の智惠をもて一切の苦厄を除くと云ふ。

【評釋】　悽愴たる夜は遂に明けた。而し朝の梢に飛び交ふ小鳥の聲は、如何にも朗らかであり快よさそうである。西行は又山を下つて人の世を廻る。物語はこゝで終らねばならぬ。

其後十三年を經て治承三年の秋平の重盛病に係りて世を逝ぬれば、平相國入道、君をうらみて鳥羽の離宮に籠めたてまつり、かさねて福原の茅の宮に困めたてまつる。賴朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出るに及び、平氏の一門ことゝく西の海に漂ひ、遂に讃岐の海志戸八島にいたりて、武きつはものどもおほく鼇魚のはらに葬むられ、赤間が關壇の浦にせまりて、幼主海に入らせ給へば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしくあやしき話柄なりける。其後御廚は玉もて雕り、丹青を彩りなして、稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必幣をささげて齋ひまつるべき御神なりけらし。（原本十丁の裏）。

【語釋】○治承。高倉天皇御宇の年號。○鳥羽の離宮。山城國乙訓郡鳥羽にあり。（この事件は「平家物語」卷三の城南の離宮の事、參照）。○福原の茅の宮。「福原へ行幸なし奉り四面に、はた板おし口一つあきたる內に三間の板屋を作つて押籠め奉る」（平家物語卷五、都うつりの事參照）。○鼇魚云々。鼇は海龜。水死するを云ふ。○幼主。安德天皇。○話柄。話の種。（佛家の語である）。○丹青。丹は赤色青は金碧。彩色を施した形容。○稜威。いづは銳利なる勢を云。「稜威此云伊都」（日本紀）。○幣。神に祈る時必ず奉るもの、麻、木綿、布、紙にて作る。○齋ふ。けがれをいみ、つゝしみて神に奉祀する。

【評釋】　此一段は西行下山後の史實との上皇の豫言と暗合を述べたものである。文脈は前からつゞくので此作家の惡い筆癖が見られる。「賴朝東風に競ひ起りて」から「壇浦にせまりて」と云ふあたりまでの文章は隨分しどろもどろで、白峯に於ては甚だ見劣りのする個所である。要するに此の一節は蛇足に過ぎない。

【特殊相】　白峯に現はれたる憤怒の情緒と其表現。

こゝに深山幽谷がある、老樹巨幹がある。狹霧はその間を點綴し、片われ月は雲間を縫つて走る。この夜陰、晩秋の古墳に佇むものは獲然たる一沙門である。永しへに靜寂の底に沈むと見えた背景は、忽ちにして一脈の陰火によつて顫動した。風は捲き、砂は飛び、山も谷も森も流も顫れをうつ

て幽冥の黑い影に喘ぎ初めた。而して此情趣を縱に貫いて響くものを崇德院が嗔恚の叫喚とする。

白峯一篇に漲る情緒の中、最も顯著なるものを求めるなら、それは云ふまでもなく上皇の憤怒である。吾々は今、この情緒を構成する心理的要素が如何に取扱はれて居るかを觀察しやうと思ふ。

憤怒は恐怖と同じく原始的情緒であつて、自己保存の要求に基くものである。一般の性質として積極的氣分が充實して居る、換言すれば反抗的であり進取的であり破壞的である。即ち自我の活動及幸福が阻礙せられた時、反撥的の行動がこれに伴ふ。

光の中につら〳〵御氣色を見たてまつるに朱をそゝぎたる靨額に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼をつりあげ、熱き嘘を苦しげにつかせ給ふ。

思ひがけない讓位から失意の淵に沈淪せられ、世を恨み人を恨むのあまり、遂に魔王とならせられた憤怒の形相はこれである。一體、外面的變化は最も明晰なる印象を與ふるもので、創作家はこれによつて容易に目的を達し、鑑賞者も、たやすく作者の意を享受し得るのが常である。從つてその效果は極めて易々として獲得せられる事となる。しかし憤怒の情緒の表現は、この生理的要素のみに限られてはゐない。その奥には心理的の力强い根柢があつて、それがたま〳〵外面に露はれる。その刹那を捕捉したのが、生理的のものとなるのである。いはゞ操人形と人形使との關係である。

憤怒が起るには、先づ對象たる知覺がなけらねばならぬ。上皇の場合にあつてはそれは當時の宮廷及び朝臣にあつた。「何ぞ早く重盛の命を奪つて雅仁清盛を苦しめざる」とは明らかにこれを啓示してゐる。次に敵愾心が必要である、何となれば拮抗する要素がなければ憤怒とはならないし、これに依て迸出したる意志活動は凡てを破壞排斥せんとするからである。

近來の世の亂れは朕がなすわざなり、生きてありし日より魔道に志を傾けて平治の亂れを發さしめ、死して猶朝家に祟りをなす、みよ〳〵やがて天が下に大亂を生ぜしめむ。

と云ふのは斯般の心理を表現したものである。而して、

遂に大魔王となり、三百餘類の巨魁となる、朕眷屬のなすところ人の禍を見ては轉じて禍とし、世の治まるを見ては亂を發さしむ。

の一節は憤怒に特有なる破壞的方面をあらはしてゐるが、この間には、心理學者の所謂力の計算、即ち彼我の强弱を商量すると云ふ、知的作用さへ含まれてゐる。

然らば憤怒の根本的要素とも云ふべき不快感は如何に寫されてゐるか、

(一)、抑も永治の昔、犯せる罪もなきに父帝の命を恐こみて三才の體仁に代を讓りし心、人慾深きとはいふべからず。體仁早世ましては朕が皇子重仁こそ國知らすべきものをと、朕も人も思ひ居りしに、美福門院が妬みに支へられて四宮の雅仁に世を奪はれしは深き怨にあらずや。重仁國知らすべき才あり、雅仁何等のうつはものぞ。人の德を選ばずとも天が下のことを後宮に語らひ給ふは父帝の罪なりし。

(二)、いにしへより倭漢共ともに、國を爭ひて兄弟敵となりし例は珍らしからねど、罪深きことかなと思ふより、惡心懺悔のためとて寫しぬる御經なるを、いかに支ふる者ありとも親しきに讎るべき命にも逸ひて、筆のあとだも納れたまはぬ叡慮こそ、今は舊しき仇なるかな。

思ふに(一)は憤怒を惹起した不快感の素因であつて、この情緒の消失するまで固執せられたもの、(二)は憤怒に伴つて更にこれに油を注ぎ、益々情緒を激越ならしめて、復讐に移行する徑路を作つたものである。

而して憤怒には時として快感が伴ふと云ふ學說は、

今より支干一周を待たば重盛が命數既につきなむ、彼死せば一族の幸福この時に亡ぶべしと、院手を拍つて恰ばせ給ひ。

の文が恰度當つて居るが、かゝる情緒はむしろリボーの言の如く「勝利を得たこと、勢力の優れたこと、高慢等の情緒の種子を包含するもの、破壞的本能と覇權を握らんとする本能とが、相加つて生れたもの」で、憤怒の完全且つ純粹なる狀態とは謂はれない。

かう觀て來ると白峯に於ける崇德院の憤怒は、表現上の深淺は別として、とにかく一通りそつなく描き出されてゐる。從つて魔王になり給ふ徑路も鮮明に讀者の頭腦に反映して來ると思ふ。而してそれ以上の感情の昂奮は憤怒の情緒をして更に他の領域——復仇——に走らしめるのである。

菊花の約

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交は輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹に耐めや。輕薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども輕薄の人は絶て訪ふ日なし。

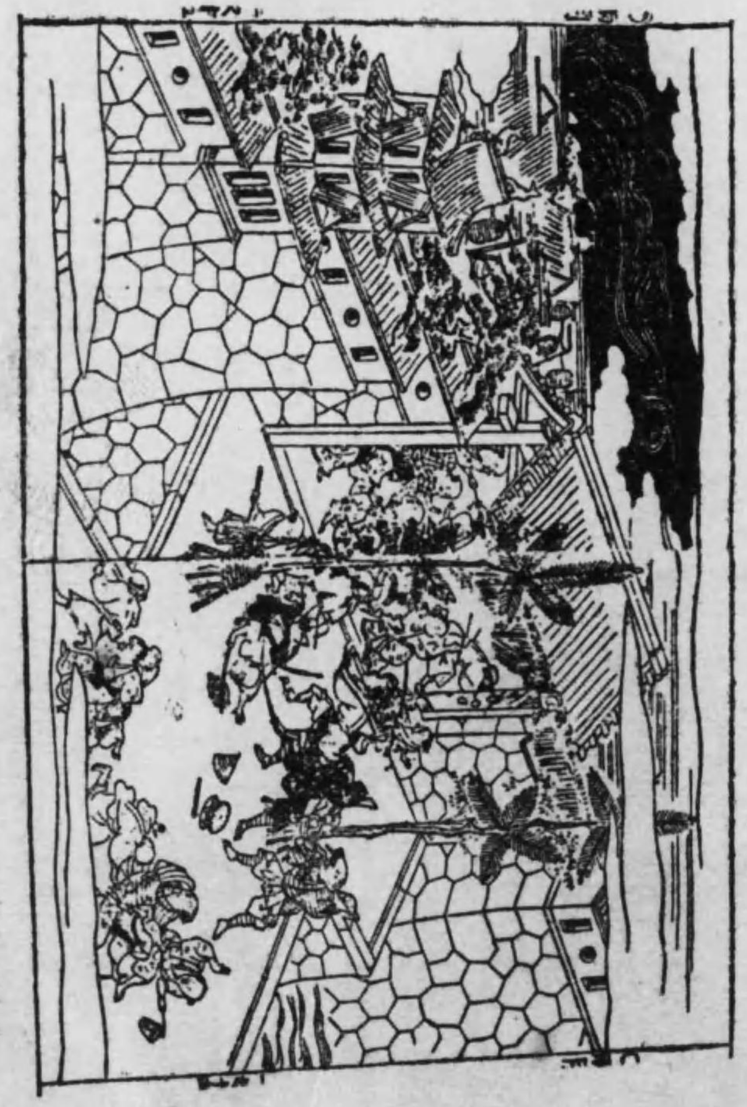
【語釋】○菊花の約。九月九日、重陽を以て再會を約したるによる。菊花と云ふは、「舒菊花時并探萱葉、雜黍米釀之、至來年九月九日、始熟就飲、故曰菊花酒」(西京雜記)の故事などにより季節の花を思合せたる也。○青々たる春の柳云々。かゝる成語あるにあらず、青々河畔草(文選、古詩)、客舍青々柳色新(唐、王維)などから得たものであらうか。

【評釋】冒頭の一段は、楊柳と交友との對語を以て綯り合せたやうな文章で、一寸した旋律はあるが、字句として整はぬふしがある。而してこの一篇の着想はこの交友觀にあるけれど、主題となつてゐるのは輕薄の人でなくして、節義の士であるから、この點に於て矛盾してゐる。勿論、全篇を讀了してから氣付く事ではあるが、この總序とも見るべき敍述と內容との不調和は何と云つても辯解せられない。

播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧を慰なひて友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり、孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として左門がこゝろざしを助く。其季女なるものは同じ里の佐用氏に養はる。此佐用が家は頗富さかえて有けるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢事に托て物を餉るといへども、口腹の爲に人を累さんやとて、敢て承ることなし。

【語釋】○博士。學者の意。○清貧。廉潔にして貧に安んずるを云。「與其謂富寧此清貧」（蛾術・冰壺賦）。○慰ふ。甘んずる、心に叶ふ、「たれかこの樂をあまなはんや」（四季物語）。○調度。手廻り道具、こゝにては一般の俗事を指す。○孟氏の操。孟母三遷の教で、賢夫人の意を寓したのである。（蒙求上「軻親斷機」。）○こゝろざし。所存、見込。○口腹。飲食。こゝは廣く物質上の事。「閔仲叔老病家貧、不レ能レ得レ肉、日買二豬肝一片一、屠或不レ肯レ與、安邑令聞レ之、餉レ吏當給、仲叔嘆曰、閔仲叔豈以二口腹一累二安邑一耶、遂去客レ沛」（世說）○累す。厄介をかける。

【評釋】先づ主人公、丈部左門の性格を描く、佐用といふ富豪が「丈部母子の人となり」を慕ひて娘を娶つたと云ひ、又物を送つても「口腹のために人を累さんや」とて敢てうけぬ所に、左門の人となりが思ひやられる。まづ意志の人としての彼が見える。



（第一編　十四丁、十五丁）

第二、一七二頁ノ次ニ挿入

一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物がたりして興ある時に、壁を隔て人の痛楚聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、あるじ答ふ。「これより西の國の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて、一宿を求らるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗まゐらせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬを、いとほしさに三日四日を過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出で、こゝち惑ひ侍りぬ」といふ。左門聞て、「かなしき物がたりにこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に此疾を憂へ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其やうをも看ばや」といふを、あるじとゞめて、「瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行しめず。立よりて身を害し給ふことなかれ」。左門笑うていふ、「死生命あり。何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて吾們はとらず」とて戸を推て入つも、其人を見るに、あるじがかたりしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黑く瘦、

古き衾のうへに悶へ臥す。人なつかしげに左門を見て、「湯ひとつ恵み給へ」といふ。左門ちかくよりて、「士憂ひ給ふことなかれ。必救ひまいらすべし」とて、あるじと計りて藥をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶弼をすゝめて病を看ること、同胞のごとく、まことに捨がたきありさまなり。

【語釋】○伴ひ。ともなふの名詞化、伴侶の同じ。○士家。武家に同じ、風は様子也。○さだか。分明。○しるべ。相識也、知人に同じ。○瘟病。疫病。傳染病である。瘟は元來家畜の傳染病である。○過つ物。仕損ずる物即ち傳染するもの。○家黨。わらはべの略、べは群の意、召使の童男女。但こゝは妻女をさして云ふ。○死生命あり。人の命は有生の初めに稟く、即ち天命だから人力でどうすることも出來ないの意。「死生有命、富貴在天」（論語顔淵篇）。○愚俗のことば。俗說也。○倫の人。普通の人、凡庸の人。○方を案ず。投藥。處方を作る。○同胞。同腹から生れたものゝ義で、兄弟である。「同胞之徒無所容居、註胞者胞胎也」（漢書東方朔傳）。

【評釋】春の日影をのせて、野川の水が若草の間を流れてゆくやうに、すら〳〵とした筆づかひである。これと取たてゝ云ふ程、異彩ある文章ではないが、そこに捨て難い風情がある。いかにも暢達な筆致である。こゝでは情の人としての左門を見る。

かの武士、左門が愛憐の厚きに泪を流して、「かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報ひたてまつらん」といふ。左門諫めて、「ちからなきことは聞えたまひそ。凡疫は日數あり。其ほどをすぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣てつかへまゐらすべし」と、實やかに約りつゝも、心を用ゐて助けるに病漸減じてこゝち清しくおぼえければ、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰德をたゞふとみて、其生業をもたづね、己が身の上をもかたりていふ。「故出雲の國松江の郷に生長て、赤穴宗右衛門といふ者なるが、わづかに兵書の旨を察しによりて富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使にえらばれて、かの館にとどまるうち前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて大三十日の夜不慮に城を乘とりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡ぼし給へとすゝむれども、氏綱は外勇にして内怯たる愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國